

僕とテストと幻想郷

あんこ入りチョコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学生になる前、吉井明久は交通事故にあい、家族を失った。

家族を失い、親戚もおらず一人ぼっちになり、はじめは必死に生きてきたがやがて、一人で過ごす悲しみを感じ始めていた。

そんなある日、吉井明久は幻想郷へと紛れ込んでしまう。

幻想郷で過ごすうちに、心は強くなり、一人で過ごす悲しみを克服した明久は、文月学園で、どう過ごすのか…

この作品は、東方Projectとバカとテストと召喚獣のクロスオーバーです。

駄文注意。

この作品が始まる前の時間軸で明久が幻想郷に迷い込んだという設定

幻想郷側の時間軸は、明久が中学1年に初めて幻想入り、そこから1年目に紅魔郷、2年目に妖々夢、永夜抄、3年目に花映塚

という風に時間が流れています。

これでいくと風神録は高校2年で発生する計算になるので、風神録以降のキャラはそれよりも前にかかわったことがあるという設定のキャラ以外はでないと思います。

幻想郷で起こった過去の出来事はこちらの『僕とテストと幻想郷ー幻想郷での話ー』で投稿しています（URL：<https://syosetu.org/novel/227997/>）

タグは後々追加予定、不定期更新となります。

※この作品は二次創作ネタも含みます

基本的に22時の更新を目指していますが、その日もし更新されない場合、活動報告に何かしら書いていると思うので、その時はそちらを確認してください

目次

プロローグ	1	前線と腕輪と嫌な予感	79
キャラクター設定	9	惨劇と怒りと次の作戦	89
1章 試験召喚戦争編		罨と対話とフェニックス再誕	99
朝と桜と結果発表	17	交渉と条件とある提案	109
教室と現実逃避と自己紹介	23	感謝と作戦と勝利への道	116
根拠と士気と力の証明	34	宣戦布告と乱入と特殊ルール	124
屋上と女子会?とお昼ご飯	42	選択と相談と奇跡の対峙	135
ミーティングと確認とDクラス戦		三戦目と誤算と弾幕開始!	144
52		人形と神宝と美しさ	152
勝利と交渉と次へのピース	60	炎と応酬とラストワード	159
テストとお昼と事故現場	67	激突と圧倒と天然発動	165
		強さと失望と決着	174
		終戦と説得と命令	184

キャラクター設定②	198	醜態と勝利と公開終了	313
2章 清涼祭編		騒動と捕縛と清涼祭終結	321
準備と試着と見える影	206	2・5章 如月ハイランド編	
開幕と初戦と営業妨害	220	俺と僕と私の気持ち	328
来店と対応と次の時間	232	到着と受付と写真撮影	333
卑怯と彗星と女の子	240	写真と昼食と演劇魂	342
迷惑と羞恥と鉄拳制裁	250	クイズと陰謀とバカップル	350
連携と接戦と星の魔砲	260	体験と騒動と本当の気持ち	361
喧嘩と宣伝と四回戦	268	ドッキリと告白と伝える気持ち	377
星と奇跡とギリギリの戦い	276	3章 学力強化合宿編	
火力と相性の準決勝	287	合宿としおりと無慈悲な宣告	387
事件と真相とみなぎる覚悟	296		
二日目と睡眠と決勝戦	303		

プロローグ

文月学園——

世界初の『とあるシステム』を導入した進学校である

その『とあるシステム』：『試験召喚システム』とは、科学とオカルトが偶然にも融合した世界最先端、かつ世界唯一のシステムである。

『試験召喚システム』は、テストの点数を召喚者自身の分身、『召喚獣』として具現化することができ、その性能はテストの点数によって決まる。

文月学園は学習意欲の向上、および成績上昇の一端として、『召喚獣』を用いたクラス対抗戦。『試験召喚戦争』通称『試召戦争』を行っている。（生徒によつてはただただ設備入れ替えや嫌がらせ目的でもあるが…）

そして今日は、文月学園のクラスの振り分け試験が行われているのであった…

明久 side

「——では、テストを始めてください」

これが振り分け試験か：難しいって聞いたこともあったけど：これなら問題なく解けるぞ：!!

僕は吉井明久。ここ文月学園に通う2年生だ。

そして今は、文月学園の振り分け試験っていう、クラス分けのための試験をしてるんだ

辺りからはカリカリと鉛筆やシャーペンが走る音が聞こえてくる。

ガタンツ!

今の音は：後ろから?

大きな音がしたので少しだけ後ろを見てみると、ピンク色の髪の女の子が倒れていった。

『姫路瑞希』——1年の時には学年次席候補と言われていた女の子だった。

「姫路さんっ!大丈夫!?!」

僕は思わず声を出し、彼女にかけよる。

ひどい熱だ：顔色もかなり悪い：

そう思っていた僕が聞いた言葉は思いもよらない言葉だった

「姫路、試験途中での退席は『無得点』扱いとなるが、構わんか?」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちよつと先生!?! 具合が悪くなつて退席するだけでそれは酷いじゃないですか!?!」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路?」

「……退席……します……」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言つて、教卓に戻ろうとする教師。まさかこの教師…倒れた人間に自分で保健室に行けつて言うのか!?!

「……しつ…れい…しま…あ…!?!」

教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになつたのでとつさにその体を受け止める。

「大丈夫? 姫路さん? ほら、掴まつて、保健室まで連れて行くから」

「吉井くん…でも…」

「気にしないで」

こんなになつてる人はほつとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている! 早く席に戻れ! 貴様も無得点扱いにするぞ!」

「ここで人を見捨てるような屑になるくらいなら、無得点になつたほうがマシです! では…」

後ろで教師が何か言っていたけど、無視でいいだろう。
そして僕たちは廊下に出て、保健室を目指した。

明久 side out

???
side

さすがは明久、無鉄砲というか、お人よしというか…自分の点を削ってまで人助けするなんてね…。

ま、そこが明久の美点でもあるんだけどねえ。

「チツ…観察処分者の屑が、私の監督しているクラスで2人も無得点者が出たとすると、私の評価が下がるじゃないか…」

…こいつ今なんて言った？

そう思ったところには、私の体が動いていた。

…ま、いつか。

「アンタの方が屑だ馬鹿野郎！ 『藤原妹紅』、具合が悪くなつたので退室します！」

『ドゴッッ』

「グボォー！」

そう宣言して、私は屑を殴り飛ばし、廊下へと出て行った。
ん、加減間違えたかな…

「明久は保健室だろうし、私も向かおうかな」

そうつぶやくと、私は保健室へ足を進めるのだった。（荷物はもちろん回収したよ！）
あ…でもこれは明久と慧音に怒られるかな…

妹紅 side out

??? side

ふーん、あいつ等はFクラスか…

なら、Fクラス代表レベルまで点数を調整しとくか…

??? side out

明久 side

ふう、着いた

「失礼しまーす」

そう宣言せて僕は保健室に足を踏み入れる

「あら、吉井君じゃない。どうしたの？」

「永 r…じゃない、八意先生、急患です。テスト中に熱が出たみたいで…」

「そう…じゃあ、こつちのベッドに寝せて」

「わかりました」

彼女は八意永琳。『幻想郷』に住んでいる医者だ。

「ただの熱みたいだし、保護者の方には連絡を入れておいたから、これで安心ね。

それにしても、今は振り分け試験中じゃなかったかしら？」

「それが…」

そう問われたので、僕はさっきの出来事を話した。

「そう…そういうことがあったのね…」

確かこの時間のあのクラスはあの先生だったはず…

このことはあてで抗議しておくわ。教師としてよりも、人として最低なもの」

うん、永琳の目が笑ってないね…あの教師…ご愁傷様…

「それで、『明久』はこの後はどうするの？」

明久君って呼ぶってことは、ここに居るのは寝ている姫路さん以外には僕だけってことかな？

「あー…とりあえず妹紅を待つておこうかな？テストはもう受けられないし、荷物も取りにいかないといけなしいし…」

「ガラガラッ！」

僕がそう言い終わった後、保健室の扉が勢いよく開いた。

僕が言うのもあれだけど、テスト中に誰だろう…

「失礼しまーす！明久はいますかー？」

「って、妹紅!？」

「あら妹紅、どうしたの？」

「永琳もいたのか、永琳聞いて、実は…」

「ってことが」

そういうと妹紅は僕が退出後のことを含めてさっきの出来事を話した。

永琳の目がさらに冷たくなった気がするけど…気のせいだと思いたい…

「明久の荷物も持つてきたし、帰ろう！」

「あ、そうなんだ。妹紅、ありがとう」

まさか荷物もいっしょに持つてきてくれるなんて

「そうだ妹紅、たとえ屑だとしても、教師を殴り飛ばしたんだから、帰ったら慧音と一緒に説教だからね？」

それじゃあ永琳、また今度」

「お……お手柔らかに頼む……」

永琳、またな」

「ええ、また今度ね、明久、妹紅」

こうして、僕たちの振り分け試験は無得点扱いとして終わった。（帰ったらちゃんと言教したよ！）

キャラクター設定

吉井明久

所属

Fクラス

容姿

原作と同じ

点数

Aクラスレベル

得意科目

古典、日本史、世界史、家庭科

苦手科目

現代国語、現代社会、情報

召喚獣の容姿

原作と同じ

腕輪

『模写』

腕輪詳細

一度見たことのある腕輪の能力をコピーして扱うことができる。ただし、消費点数はオリジナルの1.5倍必要

設定

家族で小学校の卒業旅行中に交通事故に遭い、家族が亡くなる。

親戚もいないので、そのまま一人で家に住むことになる。

一人になってすぐは、一人になってしまい広く感じる家の掃除や、料理等に小さな生きがいを探すも、孤独と戦う日々にならず疲れていったのか、中学1年生のGWを前に不登校になる。

GWに入ったあたりで、消えたいという小さな願いが幻想入りにつながる。

幻想入りした場所は迷いの竹林で、倒れていたところを妹紅に保護される。

幻想郷で過ごしていく中で、感情が落ち着き、妹紅と共に迷いの竹林で人助けをしていくうちに人を助けることに生きがいを感じ始め、紅霧異変が落ち着いた辺りで現代に戻る。

現代に戻った後も定期的に幻想郷に出入りする。

趣味は親が遺した一般の家にはないような大きな書齋で本を読むこと。

宗教関係なしに様々な古典、経典等があり、それらを読んでいくうちに古典、歴史が得意となる。

また、掃除や料理などの趣味もあり、レミリアに「フリーだったら執事として雇ったのに」と言われるほどの腕前。

原作ほど馬鹿ではないが、天然発言が目立つ。

能力

『学習能力を強化する程度の能力』

文字通り、自身の学習能力を強化する能力。

この能力のおかげで、幻想入り、妹紅の特訓から半年と経たずに紅霧異変に首を突っ込めるほどの実力を得た。中学生にして古典、経典を読破したのも実はこの能力のおかげ。

『常に相手の一歩先を読む程度の能力』

文字通り、敵の考えている一歩先を読み取る能力。実は上記の『学習能力を強化する程度の能力』から派生した能力で、元から2つの能力を持っていたわけではない。

一歩先を読むだけなので、自身の反射神経次第では意味がないし、さらに一歩先を読まれるとその一歩先を読もうとするので、疲れる。

藤原妹紅

所属

Fクラス

容姿

原作と同じ

文月学園では学校と交渉してズボンを穿いている

点数

Aクラスレベル

得意科目

古典、日本史

苦手科目

現代国語、現代社会、情報

召喚獣の容姿

妹紅をそのままデフォルメした感じ。

炎を武器として使う（つまり素手）

腕輪

『不死鳥』

腕輪詳細

点数が0になっても、1度だけ不死鳥の如く復活する。復活するときの点数は元の点数の二分の一で復活する。復活後は召喚獣の炎の火力が上がるが、常時点数を消費する状態となる

点数消費は召喚時にオートで100点を消費する。

腕輪はついたままなので、消費後に400点を下回っていてもわかる。

設定

人の身でありながら『蓬萊の薬』を口にした蓬萊人。

迷いの竹林で明久を保護したのが最初の出会い。

最初は現代に返そうとしたけど、明久の事を聞いて、明久が『帰りたくない』と、幻想郷の管理者である紫に『面倒をみてほしい』と言われ、放っておけずに明久と同居することに。

幻想入りし、迷いの竹林に住むことになった明久に自衛できるようにと『スペルカードルール』や戦い方を教える。

明久に人間の里へおつかいを頼んでいると、紅霧異変が発生し、いつの間にか明久が

異変解決に首を突っ込んでいたことを知ると、慧音と一緒に明久を説教した。

明久が現代へ帰ってから、定期的に顔を出しに来るときはいつも顔を合わせている。

文月学園入学のきっかけは、紫が『明久が入学している間、文月学園のテクノロジー調査をするから、何人かついでに入学させる』といったことがきっかけ。

落ち着いているときは女性的な口調だが、そうでないときは男性的な口調の時も多い能力

『老いることも死ぬこともない程度の能力』

文字通り、どんなけがを負っても死なないし、病気になることはない。

薬に関しても、いい影響を与える薬であろうが、悪い影響を与える薬であろうが効かない。

生徒として登場する東方キャラに関しては、出るたびに各章の終わりにキャラ紹介として追加予定。

教師として文月学園に居るのは、慧音と永琳のみ。

紫が幻想郷の住人に出した文月学園入学の条件は、見た目をごまかさずに済む存在であること。(例えばレミリアのような吸血鬼などは不可能)

また、非常時に異変が発生しても解決できるように、博麗の巫女である霊夢、異変解

決して積極的な魔理沙は認められていない。

なので、今後文月学園に生徒として現れるキャラクターはある程度限られる

その他原作からの変更点や補足

雄二とは悪友だが、雄二が明久の不幸を見て喜ぶという性格ではないため、明久弄りは少ない。

しかし、天然発言は面白いため、そういつた時だけ弄る。

姫路とは面識はないが、お互いに高得点者のため、お互いの認識はある。

美波は暴力的ではなく、好意も抱いていない（どちらかというと助けてもらったという感謝）

テスト科目は教科は基本科目として

現代国語、古典、数学、物理、化学、生物、地学、地理、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育

の13教科に加え、副教科として、

家庭科、情報、音楽

の3教科、そしてそれらの合計である「総合科目」の16教科である

召喚獣の装備について

召喚獣の武器は、その武器の大きさに応じた点数を消費することによって、複製することが可能

1章 試験召喚戦争編 朝と桜と結果発表

妹紅 side

——数年前

「うん？あれは…人間か？」

私は日課としている迷いの竹林のパトロールをしていると、一人の少年が倒れていた。

「少年、大丈夫か？」

——ふむ、寝ているだけ…か？とにかく、放置しておくのはまずいし、私の家に連れていくか…」

眠っているだけのようだが、ここに放置しておくのはまずいと判断したため、ひとまず私が住んでいるところに連れ行くことにした。

——数時間後

「少年、目が覚めたか。とりあえず…君の名前を覚えてくれないか？」
「明久…吉井明久です。」

「…あなたは？」

「私は妹紅。藤原妹紅だ。」

「これが私、藤原妹紅と吉井明久の出会いだった…」

P i P i P i P i P i P i …

部屋中に目覚まし時計が鳴り響いた

「ふう…懐かしい夢を見たな」

春は別れと出会いの季節なんて言うみたいだし…それが原因か？

「それにしても、もうこんな時間か…」

『ガチャッ』

そんなことを考えていると、突然ドアが開いた

「妹紅く朝だよくおはようく」

「ああ明久、おはよう」

「どうやら明久だったようだ。」

同居中の身とはいえ、よくノックなしで入ってこれるな。私だからいいが…

「今日から学校だし、ご飯食べたら学校に向かうよ！」

慧音は教師の集会があるからとかでもう行ったよ」

「そうか、ならご飯食べていくか。」

遅くなりすぎてダツシュってのも嫌だし…」

あの日があつたから、今の日々がある。

私は、明久に出会えてよかったと思ってるよ。

これからもよろしく、明久。

妹紅 side out

少年少女移動中…

明久 side

僕たちが文月学園に入学して、2度目の春。

おそらく、文月学園に通っている生徒の大半が待ち望んでいたもの。

それはなぜかというと、文月学園の代名詞とも言つていいような存在、『試験召喚システム』を用いた『試験召喚戦争』は、2年生になつてからでないと許可されていけないからだ。

1年生は操作の仕方などに時間を費やされて、3年生は進学などで時間がないから、しようと思つてもあまり賛成されならしい。

つまり、『試験召喚戦争』をしたいとなると、2年生の方がクラスの人たちからも賛成を得やすいみたいなんだ。

そんなことを考えながら、僕と妹紅は学校へと続く桜の散り積もる道を歩いていた。

「桜の散る光景は、何度見ても華やかで美しいねえ…」

「僕もそう思うけど…急にどうしたの？」

「いや…春だしそれっぽいことでも言つておこうかな…つて」

「雰囲気って大事だよね…」

そんな他愛もない雑談をしていると、いつの間にか校門までたどり着いていた。

「おはよう、吉井、藤原」

「おはようございます、西村先生」

そう言つて僕たちは校門の前に居た先生、西村先生に挨拶を返した。

でも、どうしてここに居るんだろう…慧音が今日は新年度の教師の集まりがあるつて

言つてたけど…

ちよつと聞いてみようかな

「先生、どうしてこんなところに？」

慧：上白沢先生が、今日は教師の集まりがあるって言つてたんですが…」

「ああ、そういえばお前たちは上白沢先生と知り合いだったな。」

それなんだが、俺は今のところクラスを持っていないし、登校してくる生徒にこれを渡さないといけないからな。お前たちの分だ、受け取れ」

そう言つて先生は2通の封筒を取り出し、僕たちに渡してくる

あつ、もしかしてこれって…

「あつ、振り分け試験の結果ですか？」

察したかのように妹紅が先生に尋ねる。

まあ、僕たちは結果がわかつてるんだけどね

「そうだ。そして吉井、お前には申し訳ないことをした。」

お前は体調不良の生徒を助けるために付き添っただけだというのに…

もう一度試験を受けなおすことができないか掛け合つてみたが、規則だとの一点張り
でな…」

そういうと先生は僕に向かって頭を下げてくる

「先生、気にしないでください。僕が姫路さんが心配で勝手にやったことですから」
「そう言ってもらえるなら、そう受け取っておこう。」

そして藤原、教師の言動に腹が立ったからと言って、殴り飛ばすとはどういうことだ
！」

「すみません…つかつとなつて…」

あの後、明久と上白沢先生にこっぴどく怒られたので反省しています…」

「反省しているのならいいが、気をつけるよ？」

「以後気を付けます…」

「さあ、立ち話もこれくらいにして、行つて来い！」

「わかりました。先生も業務、頑張ってください」

そして僕たちは校門をくぐつた…

吉井明久 Fクラス

藤原妹紅 Fクラス

教室と現実逃避と自己紹介

明久 side

「妹紅、まだ時間はあるし、Aクラスでも見ていく?」

僕はふと思ったことを口にする

「おつ、それいいね! Aクラスの設備がどれほどのものか気になるし」

どうやら妹紅も賛成のようだ

「じゃあ、そつちを見てから行こうか」

そう言つて僕たちはAクラスのある新校舎へ足を進めた

少年少女移動中…

「なにこれ…」

Aクラスの教室前にたどり着いた僕たちだけど、その教室の大きさと、窓から見える設備の豪華さに唖然とする。

「高級ホテルのロビーかのような広さの教室、個人の机にはノートパソコン、個人エアコ

ン、冷蔵庫…」

「それだけじゃない、本来黒板の置かれるであろう場所には巨大なモニター、教室そのものにも備え付けのお菓子、ドリンクサーバー…この学園長の金銭感覚はバグってるのか？」

どうやら学年でもトップクラスの点数の持ち主への待遇は異常らしい。

こんな設備の学校があつてたまるか

「これ…いろんな意味でやる気をなくす生徒がいそうだよね…」

「明久…もう行こう…これ以上ここに居ると幻想郷に対応してきた私でも、Fクラスを見たら発狂しそうだ」

「そうだね…Fクラスの教室がどのくらいかはわからないけど、1年生の時みたいなく普通の教室でも落ち込みそうだよ…後悔はしてないけど…」

そんなやり取りをして、僕たちはまだ見ぬFクラスへと進んでいくのであった…

少年少女再び移動中…

「誰のいたずらだよまったく！こんな物置にぶざけてFクラスの看板なんてつけて！」

「明久落ち着いて！現実を見よう！」

「いやだ！こんな現実認めない！Aクラスを見た後じゃなくてもこんな設備がおかしいって思うよ！」

僕はFクラスの設備を見て絶賛現実逃避中だった

「明久落ち着こう、ほんとに。もしかしたら入ってみると意外と快適かも…」
 「そ、そうだね。入ると意外と落ち着くかもしれないよね！よし、入ろう！」
 うん、もしかしたら実は外見だけなんてことが…

『ガラガラッ』

「うわあ…」

案外いいかもしれないどころじゃない、どころじゃない。絶句だった。

主に悪い意味で。

ひび割れたところもある落書きだらけの壁、教室の隅には蜘蛛の巣、さらにかびたような空気…これは畳か床板が腐ってるな…？

それにぼろぼろの黒板…個人の設備も今にも壊れそうなちゃぶ台に、見ただけでも綿の詰まってないとわかる座布団…

「いつも霊夢がお金がないってばやいてる博麗神社よりもひどいよ…」

「これは…Fクラスだからって勉強させる気はないな…？」

??? 「やっとな来たか、明久に藤原」

そんな絶句してる僕たちに話しかけたのは、教卓の前に仁王立ちしてた赤いたてがみのような髪型の男だった。

「雄二? どうしてこのクラスに? 雄二ならもつと上のクラスに行けたよね?」

それに、まだホームルームまで時間はあるでしょ?」

「お前らが振り分け試験で退出してるのを見かけたからな、点数を調整してFクラスの代表になったんだ

だ。

それと、今何時だと思ってるか知らないが、あと5分もすればホームルームは始まる」
「ええっ!?! もうそんな時間!?!」

まさかAクラスに寄り道してる間にそんなに時間が経つてるとは…

「それで坂本、私たちの席はどこだ?」

ああ、それも重要だ。ナイス妹紅

「それが、席は決まってるじゃないようだから適当に座ってくれ」

それも雑なのか…

「雑だなあ…お、一番後ろに二個並んで空いてるじゃん、ラッキー! 明久、あそこに座ろう」

「うん、そうだね。雄二の席はどこなの？」

「ん？俺か？俺はお前たちが座ろうとしてるところの隣だ」

「そうなの？また一年間よろしくね、雄二」

「ああ、お前らも同じクラスだし、退屈はなさそうだな。明久に藤原、一年間よろしく頼む」

『キーンコーンカーンコーン

ガラガラッ』

そんな会話をしてるうちに、ホームルームに入ったようで、僕たちの後ろにある扉が開いた。

「お前たち、そんなところに突っ立ってないで早く席につけ」

「どうやら僕たちの担任は慧音らしい。これは一安心…かな？」

「わかりました」

あ、雄二とハモった

「あ、慧音おはよう」

妹紅…マイペースすぎるよ…

「藤原さん、おはようございます、ですが学校では上白沢先生と呼ぶように。…頭突きが喰らいたいのか？（ボソツ）」

うわあ…何か今怖いことが聞こえたような…

「す、すみません。気を付けます…」

妹紅も一瞬で顔が真っ青になってるし…

「とりあえず座ろうか」

「そうだな…」

僕たちはとりあえず席に着いた。

「それでは皆席に着いたところで自己紹介と行きましょう、私がこのクラスの担任になった

…上白沢慧音です。」

そう言つて慧音が黒板に名前を書こうとしたけどそれをしなかった。なんでだろう？

まさか…

「雄二、もしかしてチョークなかつた？」

「ああ、俺が見たときは削りカスみたいなのしかなかったな…」

うわあ…それはひどいや…

「そこ、うるさいですよ。」

では、窓側の人からお願いします。」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん？誰かと思えば秀吉じゃないか。

独特な名前に言葉遣い、そしてまるで女の子のような見た目の彼はれつきとした男である。

一年前に初めて見たときは僕も女の子じゃないかと見間違えたことがある。

「——というわけじゃ。よろしく頼むぞい」

そんなことを考えてるうちに秀吉の自己紹介は済んだようだ。

「……………土屋康太」

おやおや、また知り合いだ。どうやらこのクラスには僕の知り合いが多いらしい。

といっても、彼は保健体育以外の科目にめっぽう弱く、納得といえば納得のだが…

「島田美波、です。よろしく、お願いします」

そんなことを考えてるうちにまた次の生徒へ変わったらしい。

彼女もまた知り合いだ。このクラスには本当に僕の知り合いが多いな…

彼女は去年ドイツから転校してきた、いわば帰国子女というやつで、日本語に不慣れなのである。

「十六夜咲夜です。とある事情でFクラスになりました、よろしくお願いします。」

そんなことを考えてるうちにまた、知り合いの名前が聞こえた。

まさか彼女がここに居るなんて……というか、咲夜はAクラスでもおかしくないよね？
後で聞いてみよう：

そのあとは特に知り合いの名前が出るわけでもなく、気づけば妹紅の番になっていた。

「藤原妹紅、ズボンを着ているが女の子なので、よろしくお願いします」

妹紅の自己紹介も簡単なもので終わる。

というか、自己紹介ってこんなものだよな。

そして特に何もいまま、僕の番まで回ってきた。

「吉井明久です。料理と読書が趣味です。よろしくお願いします」

僕も簡単な自己紹介で終わらせる。

最初は『ダーリンって呼んでくださいっ♪』とでもぼけようと思ったけど、あとで死ぬほど弄られそうだし、やめることにした。

そのあとと特に何も起きず、雄二の番になろうとした頃に扉が開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

誰から、というわけでもなく、クラス全体からそんな声が聞こえた。

それはそうだろう。僕も当事者だったら驚いていたはずだ。

「姫路さん、いいところに来ましたね。自己紹介中なので貴女もお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」

「あの！質問いいですか？」

姫路さんに対して、すでに自己紹介を終えた一人の生徒が手を挙げる

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいるんですか？」

姫路さんに向けられた質問は、聞き方を変えれば失礼なものになるものの、誰もが知りたがっているであろう質問だった。

彼女の成績ならAクラスは余裕だろう。

「その…振り分け試験の最中に熱が出てしまいました…」

そんな質問に姫路さんは答え、その言い訳を聞き、クラスの連中からもちらほらと言
い訳が聞こえる。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

…バカばかりだ…

「貴方たち、静かにしなさい」

そう言つて慧音が名簿で教卓をたたきながら生徒たちに注意をする。

『バラバラッ』

あつ、教卓が壊れた。

「…替えの教卓をとつてきます。姫路さんは空いてる席に座つてください。」

坂本くん、最後は貴方だけなので、自己紹介を終わらせておいてください。」

そう伝えると慧音は教室を出て行った。

慧音が出ていき、姫路さんが席に着くと雄二が立ち上がつて自己紹介を始めた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。」

俺のことは坂本でも代表でも好きなように呼んでくれて構わない。」

そんな前振りを話しながら、雄二はまだ話そうとしている。

…コイツ、何か企んでるな？ Fクラスでやってみたいことがあるとか言つてたし…

「さて、皆に一つ聞きたい。」

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

Aクラスは冷蔵庫完備な上に、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて、雄二が告げる

「――不満はないか？」

『大ありじゃあ！』

二年Fクラス、魂の叫び。

「だろ？俺だってこの現状には不満を抱いている。

これは代表からの提案だが――」

ああ、そうか。雄二が企んでいるのはこれか。

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』

雄二がやろうとしていることを理解したとき、一呼吸置いた雄二の口からそつと『試験召喚戦争』の引き金が引かれた

根拠と士気と力の証明

明久 side

「——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『十六夜さんに奉仕されたい』

『藤原さん付き合ってください』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

そして最後の2人は殺す。

『ヒッ、スミマセンデシタ』

そう思つてそんなことをほざいてた人をにらんでたら思いが伝わったのか相手が縮

こまる

妹紅にも咲夜にも手を出そうなんて許さないよ？

「そんなことはないさ。必ず勝てる！いや、俺が勝たせてやる」

学年でも最弱のFクラスが学年でも最強のAクラスを相手にしようとしているのに、雄二は自信満々に言い放つ。

『何をばかなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が飛び交う。

まあそうだろう。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝てる要素がそろっている。それを今から証明してやる！」

得意な不敵な笑みを浮かべ、雄二はそう宣言した。

これは長い演説になりそうだな

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を振り、否定的なポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

ここまで堂々とした犯行だと、あきれを通り越してある意味尊敬するよ…

「土屋康太。こいつがああの有名な、『寡黙なる性識者』だ！」

「……………!! (ブンブン)」

土屋康太という名前は有名じゃない。でも、ムッツリー二となれば別だ。

その名は男子生徒に畏怖と敬意を、女子生徒には軽蔑を持ってあげられる。

僕はどちらかという軽蔑寄りだが…

『ムッツリー二だと!?!』

『馬鹿な、奴がそうだというのか?!?!』

『だがみろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ…』

『ああ。ムッツリーの名に恥じない姿だ…』

うん、このクラスはバカばかりだ。

ムッツリは恥じたほうがいいと思う。

「姫路と十六夜に関しては説明するまでもないだろう。この二人はAクラス上位は確実

とまで言われていた二人だ」

雄二はさらに続けていく。

確かに、姫路さんと咲夜は一年のころは壮絶な上位争いを繰り広げていた生徒だ。

『そうだ、俺達には彼女たちがいるんだ!』

『彼女たちならAクラスにも引けを取らない』

『ああ。彼女たちさえいけば何もいらぬ』

…さつきから咲夜に変なことを言ってる人は何なの？死にたいの？

『ヒッ』

怯むくらいなら言わなければいいのに

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。彼は学力面ではあまり聞かないけど、演劇部のホープだったり、優秀な双子のお姉さんがいたりで有名だ。

雄二は学力以外でも、そういった有名人の名前を出すことで士気を高めるつもりだろう。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「島田美波だつて、数学は高得点者だ！」

島田さんも、帰国子女というのもあり、文系は苦手としているが、問題を解くのに日本語をあまり使わない数学はかなりの点を保有している。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本つて、小学生のころ神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったわけか』

『実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな!』

雄二は自分自身の名前を挙げた。

雄二自身の名前はあまり有名ではないが、誰かが言った『神童』って噂とかで、少し噂されていたりする。

「それに、吉井明久と藤原妹紅だっている」

『…シーン……』

そして一気に静かになる。

雄二? 僕と妹紅の名前は出さなくてもよかったよね? とくに有名なわけでもないし!

「ちよつと雄二! 別に僕たちの名前は呼ぶ必要なかったよね!」

『誰だよ、吉井明久って』

『そんな奴いたか?』

『藤原さんって白髪の男装女子だっけ?』

『そんな奴ら戦力になるのか?』

うん、ひどい言われようだ

「ホラ、折角上がりかけてた士気に陰りが見えるし! 別に僕たちは雄二と違って普通の人間なんだから、普通の扱いをしてよ!」

果たして妖怪と人間の共存を望む人間と蓬萊人が普通の人間かはわからないけど…

「そうか、知らないようなら教えてやる。明久の肩書は『観察処分者』だ」

なんでそれを言うかな

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ?』

『観察処分者って召喚獣のダメージを受けるんじゃないやなかったか?』

『おいおい、それって一人だけまともに戦えないやつがいるってことかよ』

クラスの誰かが致命的な発言を筆頭に、士気の下がるような発言が連鎖する。

『観察処分者』それは、学園から要注意人物だと定められた人物に与えられた不名誉な称号。

基本的に教師の手伝い等を罰として与えられ、召喚獣に物理干渉とフィードバックが設定される。

「いいや違うな。明久はバカだから観察処分者になったんじゃないやなく、自分から名乗り出たからだ。」

それに、観察処分者は教師の雑用を行うため、すでに一年のころにはかの同学年をはるかに超える回数 of 召喚獣を操作している。それは、同じ学年にいる誰よりも召喚獣の操作がうまいってことだ!」

そう、僕が観察処分者になったのは、教師の手伝いで召喚獣を召喚し、誰よりも操作

技術を高めたかったからだ。

それに、みんな知らないけど、僕は自分から名乗り出たからフィードバックも本来のものより少ない。

「そして明久と藤原はあまり知られていないが、点数はAクラスに匹敵する点数を持っている!」

『何っ! つてことは本当はAクラスレベルが5人いるつてことか!』

『いける…俺たちはいけるぞ!』

雄二の説明のおかげで、下がっていた士気は先ほどまでとは比べ物にならないほどに上昇する。

「まずは手始めに、俺たちの力の証明としてDクラスを征服しようと思う。

須川、Dクラスに宣戦布告してきてほしい。時間は午後の一時半から頼む。

それから、先ほど呼んだ奴らはミーティングを行うから昼休みに屋上に集合してくれ」

『おう! 任せとけ、代表!』

そう言つて、須川君はFクラスを飛び出していった。

「…須川君が教室を飛び出していったが、何かあったのか?」

そして須川君と入れ替わるように、慧音が替えの教卓を持って帰ってきた。

「ああ、上白沢先生。俺たちFクラスは試験召喚戦争を行うことにしたから、須川にはFクラスからの使者として、宣戦布告させに行った。」

「…そういうことか。まだホームルームは終わってないんだが…」

まあいい。Fクラス担任としてFクラスの勝利を祈っているよ。

それでは、ホームルームの続きを行う———」

こうして、僕たちの運命は戦いの道へと進んでいくのであった。

須川君はこの後、ボロボロになって帰ってきたよ

屋上と女子会？とお昼ご飯

明久 side

僕たちは、昼食とミーティングのために屋上へとやってきた。

「とりあえずお前ら、昼に開戦だしちゃんと飯食って力を蓄えとけよ。」

ミーティングはそのあとだ。まあ、Dクラスくらいならしつかりとミーティングをしなくても勝てるだろ」

雄二はフェンスに腰掛けながら、そんなことを言う

確かにその通りだろう

「じゃあ、まずはご飯だね。」

はい、これ妹紅の分」

そう言つて僕はカバンから三個あるお弁当のうちの一つを妹紅に渡す…

うん？…三個？

「しまった！慧音にお弁当を渡してない！

みんな先に食べてて！」

そう言つて僕はカバンを持つて慧音を探すために屋上を出ていくのであつた

明久 s i d e o u t

妹紅 s i d e

…やれやれ、明久は変なところで抜けてるんだから：

「明久がそう言つてるし、先にみんなで食べ始めよう」

カバンごと持つて行つたつてことはたぶんご飯は慧音と一緒に済ませてこつちに戻つてくるつもりだろう

「慧音つて…上白沢先生の事ですか？」

去年、私たちとあまり絡みのなかつた姫路さんは、普通なら思うであろうことを質問してきた

「あー、そつか。姫路さんは去年私たちとあまりかかわつてなかつたから知らないのも当然か。

私と明久は孤児で、慧音が保護者つてことになつてるから一緒に住んでるんだよ」
特に隠しておく必要もないだろうし、私はそう答えた

「そ、そうだったんですね。すみません…」

「?なんで謝るんだ?」

謝る意味が分からない

「いえ…孤児だなんて知らずに失礼な質問を…」

どうやら姫路さんの方は私たちが孤児だと知らずに失礼な質問をしたと思っ
ているらしい

まあ、私を孤児と言っていていいかはわからないが

「いやいや、気にしないでいいよ。別に気にしてないし

慧音と明久に出会えたからここに居るわけだからね」

「そう言っていただけとありがたいです…」

それにしてもそのお弁当、おいしそうですね…吉井君が作ったんですか」

今日の弁当は筍ご飯に焼き鳥、あとは適当な野菜類の入った弁当だ。

筍は迷いの竹林で手に入れたばかりの新鮮もので、焼き鳥と共に新年度だからと私が頼んでいたものだ

「そうでしょ!明久の作るご飯はそれもおいしいぞ!」

そのの味夜もいい勝負してるが…私は明久のご飯の方が好きだな!」

うん。吸血鬼のこのメイドと明久の作ったご飯を比べるのは嫌だが…

あつちは本職だからな。うまいのは仕方のないことだ

「そうなんですね!十六夜さんも料理をされるんですか?」

そして姫路さんは咲夜に話を振る

「そうですね…こう見えても私、本業はメイドなので、家事全般は得意ですね。

むしろ本職のメイドを相手にほぼ互角の腕を持つ明久の方がおかしいんじゃないですかね?」

明久は知らないところで変人認定された。ドンマイ明久…

「十六夜さんってメイドなんですね!もしかして、仕えてる人もこの学校に?」

「いえ、お嬢様はこの学校には通っていませんね。

お嬢様が明久の知り合いで、『自分のことはいいいから明久たちと学校に通いなさい』と。その際、学校内での言葉遣いもある程度崩せとの事だったので…」

咲夜の言ってることは本当だ。レミリアが外の世界を勉強してこいたことを言ったらしい

咲夜も咲夜で主の言っていることに背くわけにもいかなかったらしい

「へえ、そうなんですね。そうだ!今度私がお弁当を用意してくるので、アドバイスをしてくれませんか?」

姫路さんがそんなことを言った

「ええ。そんなことでいいならいいわよ」

咲夜もそう答える。

だが私たちは知らなかった。まさかこれがきっかけであんなことになるなんて…

この後はみんなで他愛もない雑談をしながら、明久が戻ってくるのを待った

妹紅 side out

時は遡り明久が慧音を探しに行つてすぐ…

明久 side

僕は今、絶賛慧音を搜索中だった

「うーん…職員室には居なかったし…もしかして食堂に行つたかな？」

お弁当が無いわけだし、行くとしたら食堂かな…

とりあえず向かつてみよう！

少年移動中…

あ、今食堂に入っていたのつてもしかして…!

「上白沢先生!」

「吉井君か?こんなところでどうしました?」

「こんなところじゃ話辛いので…移動しませんか?」

「…何か事情がありそうだね。わかった」

食堂なんて人が多いところで慧音との変な噂が流れたりしたら困るからね!

そう言っつて僕たちは食堂を離れた

少年再び移動中…

さて、ここなら誰もいないかな?

「慧音ごめん!すっかり今日のお弁当を渡し忘れてて…」

とりあえず謝っておこう

「まあ、そういうことだろうと思つたよ。かまわないさ。」

私も気づいたのは先ほど昼食にしようと思った時だからね…」

「どうやら慧音の方は気にしてないみたいだ」

「でも、どこで食べようか…」

慧音と一緒に食べる場所が限られてくる…

「？妹紅たちとは食べないのか？」

「そう思ってたけど…お弁当のこともあつて慧音と食べてから皆には合流しようかなって…」

「なんだそういうことか。だったら、職員室で一緒に食べていくといい。」

職員室の先生方なら、私が明久の保護者だと知っている人も多いし、ほかの生徒もよほどのことがない限り来ないだろう」

確かに、それはいい案だ。

「うん、じゃあそうしよう。でも、ほかの先生たちに迷惑にならないかな？」

「気にしないでいいと思うぞ？気にするなら自習室でも借りようか？」

「こんな時間に自習室や補修室を借りる生徒なんていないだろうから、安心できると思う」

「じゃあ、そつちでお願いしようかな？」

妹紅たちは屋上だから、職員室よりは近いし」

「私は補修室の使用許可と鍵を受け取ってくるから、明久は先に補修室に行っておいてくれ」

「うん、わかったよ」

数分後

「待たせたね。手続きに時間がかかってしまったよ」

「そんなに待ってないよ?」

「そうか。では、さっそく食べようか」

補修室に入ったからか、慧音の口調が若干砕ける

今日のお弁当は新年度一日目ということもあつて、妹紅から焼き鳥と筍ご飯をリクエ
ストされたので、それにしてみた。

「うん、どれもおいしい」

「そう言ってもらえると作り甲斐があるよ」

焼き鳥も筍ご飯も、妹紅とよく作るから、そのおかげかな?」

迷いの竹林はよく筍が取れるし、妹紅が迷いの竹林で道案内をしているときに職業を
聞かれると『焼き鳥屋』と答えるくらいにこの二つが好きで、よく二人で作ってるから

僕たちの得意料理でもある

「どうだい？新しいクラスは」

「んー、知ってる人が意外と多かったから安心した…かな？

そういうえば咲夜がFクラスなのはなんでもか聞いている？」

僕は自己紹介の時に疑問に思っていたことを聞いてみる

「ああ、そのことか。ちょうど振り分け試験の時に吸血鬼のお嬢様の我が儘を言ってきたらしい

なんでも、『その日のうちになんか教えてくれー』とか言つて。振り分け試験があるといつても聞いてくれなかったそうだな…」

あー…そういうことか…

レミリアの我が儘、たまにとんでもないこと言ってくるから…

「ちなみにどんなことを？」

「誰も見たことのないような新しいペットが欲しいと言いつけ出したらしくてな…

幻想郷中を駆け巡る羽目になったらしい…」

「あー…それはまた…というか、そんなことよく言つてるような気が…」

「咲夜曰く『一年に一度くらい突然言い出す』らしい」

うわあ…咲夜ご愁傷様…

「それで、それはかなえられたの?」

「かなえられると思うか?」

「ですよー」

「ごちそうさま。明久、時間は大丈夫なのか?」

「ごちそうさま。んー、そろそろ妹紅たちの方に合流しようかな?」

「気づいたら30分ほど経過していた。昼休み終了まであと40分ほどといったところか」

「そうか。なら行ってくるといい。ミーティングか何かやるのだろうか?」

「此処の戸締りは私がやっておこう」

「ありがとう!助かるよ。じゃあね!」

「あ、そうだ。夜ご飯のリクエストはある?」

「お昼は妹紅のリクエストだったし、夜は慧音に聞いてみよう」

「そうだな…あまりリクエストはないからお任せするよ」

「わかった!」

慧音の返事を聞いて、僕は自習室を飛び出した

ミーティングと確認とDクラス戦

明久side

「ごめんっ！待たせた？」

屋上にたどり着いた僕はとりあえずみんなに確認してみる

「そんなに待ってないぞ。カバンも持って行ったから飯は食ってくるんだろうと予想できたしな」

そう返してくる雄二。さすがの観察眼だ

「明久も帰ってきたことだし、ミーティングを行う。」

代表である雄二が仕切り始めた。

まあ、異論はないんだけどね

「雄二。一つ気になっていたんじやが、なぜDクラスなんじや？」

段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろ？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二がうなずく。雄二の考えていることは多少わかる

たぶんだけど、戦力的にEクラスとは戦わなくても勝てるとわかるってところだろう
「どんな考えですか？」

「色々理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。
戦うまでもない相手だからな」

やつぱり

「え？でも、私たちより上のクラス、ですよね？」

まだ理解ができていないのか、島田さんが質問する

「ま、振り分け試験の点数では向こうが強いかもしれないな。」

けど、実際のところは違う。島田、俺が戦力を紹介するとき、実際の点数がFクラス
レベルではない人間が数名いるといったな？」

「なるほど…つまり、その時点でEクラスには余裕で勝てる、と？」

「そんなところだ。頭の回転がいい奴は助かる」

島田さんの回答に、雄二は満足気に答えた

「じゃが、それではDクラスとやりあうのは厳しいということかのかの？」

すかさず、秀吉が質問する

「ああ、確実に勝てるとは言えないな。」

確かに姫路たちの点数は高い。だが、振り分け試験はどうだ？ 姫路たちが『途中退室による0点扱い』になつてゐる状態だと、Aクラスはおろか、Dクラスと互角ぐらいだろうな」

そう、僕と妹紅、姫路さんは途中退室で0点扱い。咲夜はそもそも振り分け試験を受けることができていないからFクラスに居るのだ。点数がなければ戦力でも何でもない

「試験召喚戦争が終われば、点数の補充試験も確実に受けることができるし、こういうプロセスを踏むことによって、操作能力の向上、ほかのクラスと交渉することで今後にも役に立つことがあるからな」

「なるほどのお」

「色々考えてるんですね…」

秀吉と姫路さんも納得がいったのか、雄二の考えには同意みたいだ

「そうだ、雄二」

「ん？ どうした明久。まさか理解できなかつたか？」

失礼な

「雄二の考えてゐることはよくわかつてゐる。雄二に伝えておきたいことがあつてね？」

「伝えたいこと？何かあったのか？」

「僕と妹紅の点数なんだけど、実は振り分け試験の後、補充試験を前もって行つててね？」

そう、僕と妹紅はすぐに試験召喚戦争が起こつてもいいようにあらかじめ補充試験を受けていたのだ

「あ、それは私もです。上白沢先生と個人的に話したときに、明久と妹紅が補充試験を受けたと聞いたので、受けておこうかと」

咲夜も続ける

まさか咲夜も受けていたなんて…

「これはうれしい誤算だ。この勝負、勝つたな」

「勝てるかもしれないけど、油断はだめだよ？」

『勝つて兜の緒を締めよ』っていうし」

雄二はこうなるとたまに油断するし、とりあえず言っておこう

「ま、そうだな。Dクラスにも予想外の存在がいるかもしれないからな

じゃあ、これから作戦を伝えるぞ——」

こうして、僕たちの作戦会議が始まるのだった

数時間後

僕たちは教室でのんびりしていた

「雄二？こんなことしててあれだけど、ほんとにこれでいいの？」

「そうだなあ、本当は明久たちの点数がないから時間稼ぎを兼ねてクラスの連中に操作の練習をさせるつもりだったからな…」

それに、明久と藤原の本来の点数を知ってる奴はそんなにいないから、次の試召戦争までできるだけみせたくないからな

俺たちは教室でどっしりと待ち構えて、クラスの連中に操作の練習でもさせとこうぜ」

ということらしい

まるでアニメ版のEクラス戦みたいだ（メタア）

「坂本、廊下が騒がしくなってないか？」

「そうだな。そろそろFクラスの防壁が破られる頃か…」

廊下が騒がしくなってきて、妹紅と雄二がそんなやり取りをする

ちなみに、今教室に居るのは妹紅、雄二、咲夜、僕だ

「大変じゃ雄二！防壁が破られてDクラスがもう目の前まで！」

のんびりしてた空間に秀吉が慌てて駆け込んでくる

「ほお、予想してたより早いな…」

仕方ない。もしDクラスが突入してきたら十六夜、お前が相手をしてくれ」

雄二が咲夜にそう指示を出す

「わかりました」

「Fクラスは馬鹿ばかりだな。ここまで一方的にやられるのがわかっていて試召戦争を仕掛けてくるなんて

なあ、Fクラスさんたち？」

咲夜が答えたところでタイミングを見計らったかのようにDクラスが攻めてくる

…それにしてもあれがDクラスの代表かな？

あのしゃべり方、まるでかませ犬みたいだ」

「明久…途中から口に出てるぞ」

妹紅がそう突っ込んでくる

「えっ、嘘」

「マジだ」

「観察処分者の癖に生意気な口をたたくだな！だがFクラスはここまでだ！

Dクラス代表平賀、Fクラス代表に数学で勝負を申し込む！試^サ獸^モ召喚！」

平賀君はそう高らかに宣言する

でも、生意気で油断しているのは君たちだ！

「生意気は貴方の方です。油断しすぎてますね。まさかDクラス代表がFクラスまでわざわざ足を踏み込むなど…

Fクラス、十六夜咲夜。代表に代わってここに居るDクラス全員に勝負を仕掛けます。試獣^{サモモン}召喚！」

『なっ!?!』

Dクラス生徒の声が響いた

Fクラス 十六夜咲夜 VS Dクラス 平賀源二

数学 431点

VS

113点

その他Dクラス

平均109点

「腕輪発動！」

腕輪。それは単体教科400点を超えたものにだけ与えられる必殺技のようなもの

それに、咲夜の腕輪はある程度の操作技術がないと防げない…!!

『なっ、なんだよこれ!』

『召喚獣が操作できない!』

『召喚獣だけじゃない！十六夜さんの投げたナイフも止まってる！』

『つてことは、時間を止めてるのか!?』

「…そして時は動き出す」

咲夜の召喚獣はまるで紅魔館に居る時の姿をデフォルメしたようなもので、10点消費でナイフを1つ作れるらしい

それに咲夜の腕輪『時間停止』は自身の召喚獣以外の時間を止めるといふ反則ものだからその代わり、点数消費が尋常じゃなく、相手の召喚獣に直接危害を加えることができないそうだが…

Fクラス 十六夜咲夜 VS Dクラス 平賀源二

数学 99点 VS

DEAD

DEAD

その他Dクラス

咲夜はその圧倒的点数と反則じみた腕輪でDクラスを蹂躪し、僕たちの最初の試召戦争は、あつけない最後となった

勝利と交渉と次へのピース

明久 side

僕たちは…というか、実質咲夜一人の活躍でDクラス戦は幕を閉じた

「さて、戦後対談と行こうか、Dクラス代表さん？」

「まさか十六夜さんがFクラスだったなんて…Fクラスを甘く見て油断していたのは俺たちだったか…」

平賀君は悔しそうな声でつぶやいた

まあ、普通ならFクラスが調子に乗って戦争を仕掛けてきたとしか思わないだろう

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから作業を始めるのは明日からでいいか？」

敗戦の将か。彼はFクラス橋正富下し、甘く見ていたが故に簡単に簡単に敗北し、試験召喚戦争を申し込む権利を失い、あの教室でクラスメイトに恨まれながら過ごすのだろうか――

「いや、その必要はない。俺たちがDクラスの教室を奪うつもりはないからだ」

—— 本来ならば

「それは俺たちにとつてはありがたい話でしかないが…いいのか？」

「ああ、ただし条件がある」

まあ、さすがに無条件ではないだろう

でも、雄二はDクラス戦を『Aクラス戦に向けて必要なプロセス』と言っていた

つまり、何かしらの条件で交渉するつもりなのだろう

「一応、聞かせてもらおうか…これでもDクラスの代表として、あまりにも不利な条件なら断らないといけないからな」

試召戦争では油断だらけだったけど、どうやら冷静な思考も持ち合わせているらしい
落ちて着いた声で平賀君が返事をする

「なあに、簡単なことだ。この試召戦争は『和平交渉にて終結』ということにして、三カ月の間もしくは『坂本雄二がクラス代表の間』FクラスとDクラスで同盟を結んでほしい」

やっぱり…それに、同盟の期間を三カ月か雄二が代表の間ということは、Aクラス戦

もただただ設備が狙いつてわけじゃないな…？

「自分から聞いておいてあれだが…そんな条件でいいのか？」

クラスの設備を要求しない割には簡単すぎる要求な気もするが…」

「まあ、そこは問題ない。その代わりいくつかFクラスから頼みがあるときにそれをかなえてくれればな」

「…わかった。ではありがたくそちらの提案を吞ませてもらおう」

どうやら交渉は終結したようだ

「さ、これで戦後対談は終わりだ。行っていいぞ」

「ああ、ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ、無理するなよ。勝てっこないって思ってるだろ？」

「そうだな、社交辞令だな」

…だが、お前の戦後対談でのいろいろなことを考えたような話し方…まだ何かあるんだらう？」

「さあ、どうだろうな？」

雄二はわざとらしく、いつもの不敵な笑みを見せながらそう返した

「ま、Dクラスにとってはあまり関係ないことだし、深くは追及はしないでおこう」

そう残して平賀君はその場を去っていった

「さて、皆！今日はご苦勞だった！明日は消費した点数を補充するから、今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ！解散！」

それと、明久は話しておきたいことがあるから残っておいてくれ」

雄二が号令をかけると、いつの間にか帰ってきていたクラスメイトが一定に帰る支度を行い、次第に帰っていった

「妹紅、僕は雄二に呼ばれたから残るけど、妹紅はどうする？先に帰っててもいいけど……」

雄二に残るように言われたから、妹紅にどうするか尋ねてみる

「なら、私は先に帰って夕飯の支度でもしておくよ。」

本当は今日は明久が夕飯の日だけど……慧音は何か食べたいとか言ってた？」

「んー……お任せするって言ってたから何でもいいんじゃないかな？」

「そうか。だったら家にあるものを見て適当に支度しとく！」

そう残すと、妹紅も帰っていき、教室には僕と雄二だけになった

「さて雄二、用事って何かかな？」

とりあえず僕は雄二に聞いてみる

「そうだな……頭のキレるお前と二人で今後の作戦会議をしたかったって所だな」

「なんだ、そんな事だったんだね。それで、今後の展開って？」

「どうやら僕の読み通り、Aクラス戦で雄二は何かを仕掛けるつもりらしい。事前に僕に打ち明かそうとした事は予想外だったけど……」

「Aクラスにはクラス単位での試召戦争じゃなく、変則的に一騎討ちで申し込もうと思っけていな。」

「そのためにはDクラスだけじゃ足りないと思っけていな。」

「なるほど……雄二が言っけてたDクラスへのお願いつてもしかして、Aクラスの交渉の時にDクラスと共に攻め込むとかさう言っけて一騎打ちを受けさせるためのパーツつてこと？」

「一騎打ちか……確かにそれなら、Aクラスとの戦いが有利とまではいかずとも、数と力の暴力を受ける危険性はなくなるわけだ。」

「まあ、そんな所だ。」

「それで、次はBクラスを攻めようと思っけているんだが、Bクラスとの戦いはよつぽどのがない限り、お前らの力でごり押ししても勝てると思っけているんだがな、Bクラスにイレギュラーな存在はいると思っけてるか？」

「なるほど、そういう事か。」

「雄二は作戦会議というよりも、Bクラスに勝てるかどうかの相談らしい。」

「Dクラス戦とは違い、Aクラス予備軍が数名いるBクラスを警戒しているらしい。」

「んー、どうだろうね？」

Bクラスともなると、Aクラス下位レベルの人も数人いるだろうし、Aクラス下位レベルの人がケアレスミスでBクラスにいる可能性もあるし…」

可能性ばかりを考えるとキリが無い

「だよなあ…だったら、なるべくお前らの得意科目で戦うつてのが良いのかもな」

「それで良いんじゃないかな？ 姫路さんと咲夜は得意科目に余り偏りが無いオールラウンダーだし、基本は僕と妹紅が得意な日本史や古典で攻めて、代表との戦いで康太の得意な保健体育を使うとか…」

自惚れている気はないけど、僕と妹紅の得意科目は学年でトップクラスだし、操作技術もあるからめったなことでは負けないだろう

「あとはBクラス代表が誰かと、そいつの指揮能力次第、ってことか」

「ま、クラスを仕切るのは雄二の役目だ。僕は雄二の作戦なら反対はしないし、それで負けても攻めたりはしないよ

…クラスの皆がどうかは分からないけど…」

Fクラスの大半がバカばかりだからなあ…

「ま、お前に聞いてみて良かったよ。少し楽になった

Bクラス戦は頼りにしてるぞ？」

「任せておいてよ。僕たちが必ず、勝利に導いてみせるから」

「それじゃ、また明日な」

「うん。また明日」

こうして、僕たちの長い新学期初日は幕を閉じた

テストとお昼と事故現場

明久 side

Dクラス戦の翌日、僕たちは学校に登校していた

「雄二おはよー」

「坂本、おはよう」

「やつと来たかお前ら」

今日は遅かったな。何かあったか？」

珍しく遅刻ギリギリになった僕たちに向かって、雄二がそう質問した（昨日も危なかったけど…）

「今日は補充試験やるんでしょ？少しでも点数を上げたいから、昨日帰って勉強してただけ…」

起きたら時間が結構危なくて…」

昨日学校から帰り、ご飯とお風呂を済ませて妹紅と一緒に勉強して、いつの間にか寝ていたおかげでアラームをセットし忘れ、慧音に起こされるまで寝ていたという訳だ

「そういう事か。お前ら、たまにそういう事あるからな…」

「否定はしないよ」

それで雄二、設備のことは文句出なかつたの?」

「ああ、皆にもきちんと説明したからな。問題ない」

僕は気になつていた事を質問する

よかつた、一応クラスメイトは理解してくれたみたいだ

「で? 勉強したつて言つたが、今日の補充試験の自信はどうなんだ?」

「うーん…いまいぢかなあ…」

僕も妹紅も慧音も、現代国語、現代社会、情報はどうも苦手で…

つまりは教えてくれる人がいないから、何とか調べながらやつただけどね…」

妹紅と慧音は幻想郷での暮らしが長いため、現代に若干疎く、僕も中学から幻想郷を

出入りしているため、現代に疎いんだ

歴史関連は何とかなるんだけど…

「そうか。だつたらBクラス戦はなるべくその三科目以外を中心に戦わないとな」

「そうしてくれるとありがたいよ…」

さて、そろそろ始まるし、勉強モードと入りますか」

数時間後

「これで午前が終了か…」

「よし、とりあえず昼飯にするぞ！今日はラーメンとカツ丼とチャーハンとカレーにすっかな」

そんな事を叫びながら雄二が勢い良く立ち上がった

午前中のテストだけでこれだけ食べるなんて、コイツの体の構造はどうなってるんだ
「お弁当を作る時間も無かったし、僕たちも一緒に行くよ」

「私は何にしようかな…」

「私も一緒に、行って良いですか？」

「ん？島田か。別に構わないぞ」

そう言って島田さんがメンバーに加わる

咲夜と秀吉、康太もいるし、どうやらこれがFクラスでの普段のメンツになりそうだ

「あ、あの。皆さん…」

立ち上がり、学食に向かおうとすると声をかけられた

「あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「い、いえ。え、ええつと…お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の…」

姫路さんはもじもじしながら僕の方を見ている。どうしたんだろう？

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、体の後ろに隠したバッグを出してくる

…ほかの皆は理解してるんだけど、僕はいまだに状況が呑み込めてない

「ええつと…どういいう状況？」

「そういえば明久は昨日、この話をしていた時はいなかったわね

姫路さんが料理のアドバイスを欲しいからお弁当を食べてほしい、と昨日明久がいなくなるときに言っていたのよ」

咲夜が説明してくれた

なるほど、そういうことか

「全然迷惑じゃないよ！ね、雄二」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあゝ」

どうやら姫路さんは断られないか心配だったようだ

さつきまでの緊張した顔が崩れる

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上にも行くかのう」

「そうだね」

こんな腐った畳の上だと美味しさが半減しそうだ

「そうか。それならお前たちは先に行っててくれ

俺はお前らに飲み物でもご馳走してやる。昨日頑張ってもらったしな」

「じゃあ僕も行くよ。さすがの雄二でもこの人数分はきついでしょう？」

「悪いな。それは助かる」

「皆は先に行つて食べてて！そんなに遅くなるつもりはないから！」

そう言つて僕と雄二は教室を出た

明久 s i d e o u t

妹紅 s i d e

明久と坂本と別れて、私たちは屋上に向かった

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうですねー」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。絶好のお弁当日和だ

「あ、ビニールシートもあるんですよ」

そう言って姫路さんはビニールシートを取り出す。準備万端だが、最初から屋上で食べるつもりだったのだろうか

「あの…あまり自信は無いんですけど…」

ビニールシートを広げ終わり、各々座り終えたところで、姫路さんがお弁当を取り出した

『おぉー』

見た目はかなり美味しそうだ

から揚げやエビフライ、おにぎりなど定番のメニューが重箱に詰まっている

「……………(ヒョイ)」

動きの素早い土屋は一目散にエビフライを手を取った

そして流れるように口に運び……

「……………(パク)」

バタン ガタガタガタ

豪快に倒れ、小刻みに震えだした

「……」

「……」

思わぬ出来事に咲夜と顔を見合わせる

いったい何が起きた…？

「わわっ、土屋君!？」

姫路さんが慌てて、配ろうとしていた割り箸を落とす

「……………（ムクリ）」

土屋が起き上がった。よかった、生きていたか

「……………（グッ）」

そして、姫路さんに向けて親指を立てる

姫路さんを気遣って『美味しい』と伝えたいのだろう。私には『生きている』にしか

見えない

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ！」

姫路さんは土屋からのメッセージが伝わったのか、喜ぶ

だがまだ彼の足は小刻みに震えている。一体彼女は何をあのエビフライに盛ったん

だ

「良かったらどんどん食べてくださいいね」

姫路さんが笑顔で勧めてくる。その笑顔が今は怖い

(咲夜、あれをどう思う?)

私はたまたまず咲夜に小声で話しかける

(見ただけでは分かりませんが、危険物が入っているとしか)

だよなあ

(だがあの姫路さんの純粋な笑顔を傷つけない。どうしようか)

(あなたが全部食べればいいでしょう? 死なないのだし)

(バカ言えっ! 確かに私は死なないが、現代で、それも人前で死ぬ訳にはいかない!)

痛いのは痛いし、苦しいのは苦しいのだ。しかも、危険物を摂取するなら体に残るだろうし、何回死ぬか分からん

(ならどうしろと? あなたが彼女の笑顔を傷つけないと言ったんですよ?)

(うっ…それは…お前の能力で時間を止めて処理するとか…)

(食べ物を粗末にするならあなたの口に全部処理してあげましょう)

(はあ!?!なんて事言いやがる! それに、あれは食べ物じゃ無くて立派な殺戮兵器だ!)

「おう、待たせたな。へー、こりや美味そうじゃないか。どれどれ?」

そんなやり取りをしてたら坂本が来た

「待てっ、坂本」

止める間もなく、坂本は素手で卵焼きをつまみ口へ運ぶ

パクツ バタン——ガシヤンガシヤン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた

「ちよつ、雄二!?! いったいどうしたのさ!」

遅れてやってきた明久が坂本に駆け寄る

それにしてもこれは間違いない。本物の殺戮兵器だ:

すると、坂本は私の方を見て目で訴えてくる

『毒を盛ったな?』

『違う、姫路さんの実力だ』

『えつ、何それ怖い』

すかさず私は目で返事をした。明久はそのやり取りである程度理解したようだ

明久程じゃないが、坂本は一年の頃からの仲だ。このくらいは出来る

「あ、足が… 擰つてだな…」

坂本は姫路さんを傷つけまいと嘘をつく

「あはは、ダツシユで階段を上ったからじゃないかな?」

「うむ、そうじゃな…」

「悪い、島田、姫路さつき転んだ勢いで飲み物がダメになっちゃってしまつてな…」

二人で買つてきてきてくれないか？買う物は任せる」

「わかりました」

坂本はこう言つて若干震えている島田さんと、余り気づいていない姫路さんをこの場から離した

「さて…これをどうやつて処理しようか…」

明久がそう呟いた。これは確かにまずい…

でも、悩んでも時間が過ぎる一方だ…こうなつたら…

「坂本、木下、土屋。これは私たち三人で処理しとくから、三人は姫路さんたちを追つて、学食にでも行つててくれ」

「じゃが、大丈夫かの？」

「うん、秀吉たちは行つてて」

「……………(グツ)」

「…死ぬなよ？」

「アハハ、善処する」

私はそう言つて坂本たちをこの場から離す

「さて、これでここに居るのは私たちだけだ。明久、念のために人払いと防音の結界を張っておいてくれないか？」

「うん、分かったよ。妹紅、無理はしないでね？」

「善処するよ」

そう言つて明久は結界を張つた

結界を張るのは博麗の巫女の十八番だが、明久はそれには劣るものの、そこそこ良い結界を張ることが出来る

「じゃあ…いただきます…」

余り気が乗らないが、やるしかない！

そう言つて私は箸を進めた

数分後

「なんとか…食べ終わった…だめだ、一回死ぬ…というか新しく体を構築する…」

そう言つて私は一度死んだ

妹紅 side out

明久 side

妹紅が一度死んで数分後、妹紅は体と魂を切り離して、魂を起点に蘇生した

「だめだ…あれは殺戮兵器だ…この体になって毒キノコを口にしたことは何度かあったが…」ここまで毒一色のご飯は初めてだ…」

「妹紅…大丈夫？」

「大丈夫じゃない…ちゃんとしたご飯を食べたい…」

「妹紅に任せきりになるのはアレだし、さっきの間に適当にご飯を買ってきたわ。皆で食べましょう」

咲夜は気を遣ってご飯を買ってきてくれたらしい

「それにしても…姫路さんには今度一から教えないとね…ご飯は化学じゃないのに…」
「そうね。いつ死人が出るか分かったものじゃないわ」

僕の意見に、咲夜が賛同する

もう、このような地獄は見たくない。そう思い、僕たちは決心するのだった

前線と腕輪と嫌な予感

明久 side

前話から時は飛んで、屋上での惨劇の翌日の午後

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆のほうを向いている

「今日も午前中がテストで、ついさつき全科目のテストが終わって昼食をとったところだ」

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おぉーっ！』

雄二の号令にクラスの皆の野太い声がこだまする

ちなみに、宣戦布告は昨日のお昼、お弁当事件で妹紅がリザレクションしてる間に須川君に行かせたらしい

「今回の戦闘は敵を教室へ押し込み、短期決戦を仕掛ける！その為、開戦直後の渡り廊下

戦は絶対に負けるわけにはいかない！」

『おぉーっ！』

「そこで、前衛部隊の指揮は姫路瑞希に任せる！野郎共しつかり死んで来い！」

「が、頑張ります！」

男のノリについていけないのか、若干引き気味な姫路さんが一步前に入る

『うおぉーっ！』

一緒に戦えるとおあって、前衛部隊の指揮は最高潮に達していた

若干暑苦しい

とりあえず今回は廊下での戦闘に勝ちに行くらしい

ここで負けると話にならないから、戦力もFクラス50人中40人を戦力に注ぎ込む
その中に僕と妹紅、咲夜に姫路さんが居るから廊下での戦闘どころかそのままBクラスまで押し切るつもりみたいだ

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。Bクラス戦闘開始だ

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエツサー！』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いが必要になる。前衛部隊のほぼ全員が全力でBクラスへと向かう廊下へと駆け出した

：そんなに急いだら姫路さんがついていけないだろうに

「姫路さんは焦りすぎないでいいから！前衛部隊の壊滅は僕たちがさせない！」

そう言つて、僕たちも駆け出した

今回のこちらの主武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、数学の長谷川先生はなぜか召喚可能範囲が広いというのが理由だ。一気に勝負を仕掛けたいときにありがたい先生でもある

ほかに、英語のライティングの山田先生と、物理の木村先生もいる。立ち合いの教師を多くして一気に駆け抜ける！

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてるぞ！」

正面を見ると向こうからゆつくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくるのが見えた

人数は十人程度、あくまで様子見といったところだろうか

「生かして返すなー！」

物騒なセリフが皮切りとなり、Bクラス戦が始まった

Fクラス 近藤吉宗 VS Bクラス 野中長男

総合 764点 VS 1943点

うん、FクラスとBクラスじゃ文字通り桁が違う

Fクラス 武藤啓太 VS Bクラス 金田一裕子

数学 69点 VS 159点

Fクラス 君島博 VS Bクラス 里井真由子

物理 77点 VS 152点

圧倒的な点数差に第一陣がごとごとくやられていき、戦死者を『西村先生がどこからともなく現れて補修室へと連れ去っていく』

…西村先生は距離や時間に干渉する能力でも持つてるのだろうか？

「お、遅れ、ました…。ごめ、んな、さい…」

そんなどうでもいいことを考えていると、急いで来たのか息を切らした姫路さんがやってきた

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

「十六夜咲夜も居るぞ！」

Bクラス側からそんな声上がる。さすがにBクラス、Aクラスに姫路さんが居ないことくらい調べていたか

声を聴き、Bクラスの目の色が変わる。それだけAクラス上位の学力を持つ二人を警戒してるのだろう

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラスの姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

「律子、私も手伝う」

Bクラスの女子生徒が、すかさず姫路さんに勝負を申し込んだ

最初から二人がかりとは、それだけ姫路さんを警戒していたのだろう

『試獣召喚！』

喚声に応じて魔法陣が展開。試験召喚獣が顔を出す

敵の二体の召喚獣は剣と槍を構え、姫路さんの方は大剣を軽々と持っている

それに、姫路さんの召喚獣にはDクラス戦で咲夜が使っていたものと色違いの腕輪がついている

「さすが姫路さん、腕輪もついているんだね」

「あ、はい。数学は結構解けたので…」

「そ、それって!？」

「私たちが勝てる相手じゃないじゃない!」

向こうの二人が顔色を変える

そう、腕輪をしているということは、単教科で四百点を超えているということ

つまり、Aクラスだとしてもかなりの実力者ということだ

「じゃあ、いきますね!」

姫路さんが手をキュツと握りこむ。それと同時に姫路さんの召喚獣が左腕を敵の方を向けた

「ちよつと待つてよ!?!」

「律子!とにかく避けなと!」

大げさなくらい横に飛ぶ敵の召喚獣

その直後、姫路さんの腕輪が光を発した

キュボツ

「きゃあああーっ!」

「り、律子!」

左腕から光線がほとばしったかと思つた瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一隊が炎に包まれる

Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下津子 & 菊入真由美

数学 412点 VS 189点 & 151点

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ!」

大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄し、大剣を振り下ろす姫路さんの召喚獣相手の武器ごと一刀両断し、決着は一瞬でついた

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!」

「なっ!そんな馬鹿な!」

「姫路瑞希、想像以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残り八人に驚愕の表情が浮かぶ

この十人はそこそこの精鋭だったのだろう

「み、皆さん、頑張ってくださいー！」

姫路さんの指揮官らしくない指示

でも、Fクラスの皆なら効果絶大だろう

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

…アホばかり増えていくね

「姫路さん、とりあえず下がっておいて。こうなったら皆でもなんとかかなると思う」

「は、はい！」

敵の士気も挫いたし、味方の士気は上昇中だ

それに、腕輪は絶大な効果の代わりに相当の点数を消費する。いくら姫路さんの点数といえど、一気に点数を減らしすぎるのはよくない

「中堅部隊と入れ替わりながら交代！戦死だけはするな！」

敵陣からそんな指示が飛んでくる。とりあえず目標通りだ

「明久、藤原、ワシらは教室に戻るぞ」

「ん？秀吉、どうしたの？」

「何かあったのか？」

戦況を眺めていた僕らのところに秀吉がやってきた

本陣で何かあったのだろうか？

「Bクラスの代表じゃが…あの根本らしい」

「なっ！」

「根本ですって!?!」

「うむ」

根本恭二という男は、とにかく評判が悪い

噂ではカンニングの常連だとか。目的のためには手段を選ばないらしく『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物はデフォ』とか

さすがにそこまで卑怯だとは思わないけど、用心に越したことはない

「なるほど…戻っておいた方が良さそうだね」

「あれだけ悪い噂が流れていたら警戒するのは当然ね…」

「雄二に何かがあるとは思えんが、念のためにの」

「ということだから咲夜、あとは任せたまよ！」

「承知しました」

咲夜に伝えて僕と秀吉と妹紅は教室へと引き返した
何か嫌な予感がするけど……これは当たらないでほしい……

惨劇と怒りと次の作戦

明久 side

「うわあ……これは……」

「まさかこうくるとはのう」

「……こんなことをするなんて」

教室に引き返した僕らを迎えたのは穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープペンシルや消しゴムだった

「これじゃあ補充がままならないね」

「うむ……地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

妹紅と秀吉がそんな会話をしていると、教室にいた雄二が言った

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「それはそうと、どうして坂本は教室がこんなことになってるって気が付かなかったんだ？」

妹紅は疑問に思ったのか、雄二にそう質問した。確かに気になる

「協定を結びたいと申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと?」

「ああ、四時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁ずる。ってな」

「それ、承諾したの? Bクラスがどうかはわからないけど、Fクラスにとつては有利な条件じゃないか」

「そうかの? ワシらにとつては体力勝負に持ち込んだほうが勝てるんじゃないかの?」

確かに秀吉の言うことは一理ある。一人を除いては

「姫路以外は、な」

秀吉の疑問に、雄二が答えた

「確かに十六夜、藤原、明久の三人は強力だが、戦力が多いに越したことはないからな。敵をBクラスに押し込んだ状態で今日は終了となるだろうな。そうなると、作戦の本

番は明日となる」

「なるほどのお」

「どうやら秀吉は納得したみたいだ」

「ま、そんなところだ。シャーペンと消しゴムの手配は俺がしとこう」

「お前らは戦場に戻って、敵を押し込んで来い。その過程で根本を倒してしまっても構わん」

「僕は雄二と話したいことがあるから、二人は先に行つてて！」

「了解じゃ」

「わかつた」

僕と雄二がそう言つて、二人は戦場へと戻つていった

二人が戻つていつて僕と雄二の二人になつた教室で、僕は雄二に話しかける

「雄二、このことどう思う？ 根本君の考えがこれだけだとは思えないんだ」

「…そうだろうな。考えられるのは、教室を漁つて弱みを握ろうとしたか、奴が別の何かの時間稼ぎをしているかだろうな」

「…だよ。そうなると、やつぱり今日中に決着をつけるのがいいのか」

「そう思うのならお前は戦場に出て敵を蹂躪してこい」

「わかつたよ。雄二も気を付けて」

「ああ、行つてこい」

そう言つて僕は教室を出ようとして、扉の近くに落ちていた折られたシャーペンを手に取り

「…たとえ戦争とはいえ。たとえこんな勉強をロクにしないようなクラスメイトとはいえ…そんな文房具でも神は宿るんだ…」

…根本君…君は僕を怒らせた」

僕は誰にも聞こえないような小さな声でそうつぶやいた

少年移動中…

僕が戦場に戻った時、Fクラスの前線部隊はもう一押しのところまで来ていた

それに、さつきまで時間を気にしてなかったけど、もう三時半を過ぎている

どうやら今日はBクラスにたどり着いたら集結しそうだ

「秀吉、戦況はどう?」

僕は後方で全体をまとめていた秀吉に声をかける

「明久、やっと戻ってきたか。戦況は見たままじゃが、前衛部隊は半分は戦死、姫路と十六夜は点数消費が激しいから、とにかく協定までにBクラスに押し込もうとしておる。

教室前のBクラス生徒はあと五人ほどじゃ」

「腕輪は強力だけど、点数消費はとんでもないからね…」

「うむ…皆Bクラスまで押し込もうと奮闘しておるが、敵に教科を現代国語に変えられてしまつてのう」

「げっ、それはまずいね…妹紅も咲夜も点数が出ない教科だ

でも、それはある意味チャンスかもしれない!僕の点数がそんなに高くないと思わせ

ることができると、Bクラスまでなら押し込んでみせるよ！」

現代国語なら、点数が取れる科目の半分以下だし、

「そうじゃな！決戦が明日なら、明久も点数で警戒されにくくなるなら頼んだぞい」

「任せて！」

秀吉にそう言つて僕は最前線へと出た

「先生！Fクラス吉井明久、ここにいるBクラスの生徒に勝負を仕掛けます！試獸召喚！」

「なっ！観察処分者が舐めやがつて！」

「ぼこぼこにしてやる！」

Bクラスの人たちからそんな言葉が出てくる

相変わらず雑な情報しかないようだ

そして、その場に僕の召喚獣が召喚される

改造学ランに木刀といった貧相に見える装備だが、軽くて丈夫だからいい

それに、なぜかこの木刀は切れ味がいい

Fクラス 吉井明久 VS Bクラス モブ×5

現代国語 153点 VS 平均175点

「なっ!?!」

「馬鹿な、Fクラスの観察処分者がどうしてそんなに点数高いんだよ!」

「残念だったね!僕は馬鹿じゃない!」

それに:よそ見していると危ないよ?」

相手がそう言ってる間に、僕は召喚獣を操作し、一人目の召喚獣を切り刻んだ

「は、早い!?!」

「驚いてる暇はないよ!?!」

相手の召喚獣がまとまって行動してたから、僕は召喚獣を即座に方向転換させ、二人目の召喚獣の喉部分へと突き刺した

「お前ら同時にやるぞ!」

「おう!」

「くらえ観察処分者!」

一人の声で相手が同時に分散して僕の召喚獣を囲うように動き出した

でもその動きなら、きつとこうやってこうしてくる!

「動きが甘いよ!」

「なっ!」

「馬鹿な!？」

僕は召喚獣を一回転させて、相手の召喚獣を同時に斬った
というか君たち、同じようなセリフしか言えないのか？

キーンコーンカーンコーン

あつ、四時だ

つてことは今日の戦争は終わりか…

「撤収じゃ。協定通り、教室に戻って解散するぞい」

「みんな、いったん教室に戻ろう」

『おー』

続きは明日。でも、なんとかBクラスの前の敵は一掃できたからいいか

少年たち移動中…

そしてFクラス解散後（明久、妹紅、咲夜、雄二、秀吉、康太は残っている）

「お前ら、お疲れ。作戦通り教室前まで攻め込んだ

明日は決戦だ。気合い入れとけよ？」

「うん、教室をこんなにされた借りも返さないとね！」

「……報告がある」

「どうした、康太」

解散ムードの中、康太が一言発した

今日の康太は情報係で、戦闘には参加せずに周囲の警戒をしていた。何かあったのだろうか？

「……Cクラスの様子が怪しい」

「なに？Cクラスだと？」

康太の話によると、どうやらCクラスの動きが怪しいとのこと

まさかAクラスを相手にしようなんてことはないだろうから……

「なるほど、漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

雄二の言う通り、この戦争の勝者に戦争を挑むつもりだろう

疲弊した相手ならば、戦いやすいだろうから

でも僕は、なんとなく根本君が絡んでると感じる。いくらなんでも、このタイミングで動き出すのは怪しい

「んー、そうだな……Cクラスと協定でも結ぶか」

雄二はちらりと時計を見ながらそう言った

…なるほど、根本君の狙いはこれか

「待って雄二。多分だけど…これはBクラスの罠だ」

「…なに？」

僕の声に、雄二は疑問を持ったような反応を返す

「考えてみてよ。Bクラスとの協定は『四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁ずる。』つまり、BクラスとCクラスがつながって、これは協定違反を口実に攻撃しようとしてくるんだと思う」

僕は雄二に、考えを伝えた

「…なるほどなあ。だったら、別の手を打とう」

今からCクラスと協定を結びに行くんじゃない。根元を討ちに行く」

「どういうこと？」

「恐らくだが、根本は『試召戦争に関わる一切の行為を禁ずる』これを盾に先生を味方につけ、俺たちがCクラスと協定を結びに来たところを、先に破つたのはFクラスだといつて攻撃してくるんだろう」

だが、おそらく奴は明久と藤原の本来の点数を知らないはずだ。半端な科目だった

ら、お前たちが居たら返り討ちにできる」

「なるほどね。だったら、こっちも先生を味方につけていく？」

僕らに味方してくれる先生で、僕らに有利な点数をとれる教師なら、一人いるじゃないか」

雄二の案に乗るように、僕も一つの提案をした

「フツ、そうだな。根元にぎゃふんといわせてやろうぜ」

僕の提案に、雄二はいつもの不敵な笑みを浮かべた

罨と対話とフェニックス再誕

明久 side

僕たちは、Cクラスと協定を結ぶ（という見せかけ）ために、僕、妹紅、雄二、咲夜、康太、秀吉の五人は慧音を連れてCクラスに来ていた

「Fクラス代表の坂本雄二だ。Cクラスの代表は？」

Fクラス代表としてクラス間交渉をしに来た

不可侵条約を結びたい」

Cクラスの扉を開くなり、雄二がここに居る全員に一方的に告げる

Cクラスの教室にはまだかなりの人数が残っていた

康太の情報通り、漁夫の利を狙っているのだろう

「私だけど、不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本クン？」

僕らの前に出てきたのは気の強そうな女子だった

確か小山さんだったと思う。バレー部のホープだとかなんとか

小山さんは不可侵条約の言葉を聞き、Cクラスの教室の奥に隠れていた根本君に対し

て声をかけた

やはりこれは罠だったか

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

それに、酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

小山さんに声をかけられた根本君は、そんなセリフを言いながらBクラスの取り巻きを引き連れて出て来た

それに、やはりというべきかCクラスに残っていたように見えた人の一部がCクラスの生徒を装ったBクラスの生徒みたいだ

「根本君！これはやはり君の罠か！」

「協定を先に破ったのはソツチだからな？これはお互い様、だよな！」

根本君が告げると同時に、Bクラスの取り巻きが動き出す

奥には数学の長谷川先生と一緒にいた

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を——」

Bクラスの取り巻きの一人が召喚の許可を取ろうとした

…かかった！

「長谷川先生！待ってください！」

「…なんでしよう、上白沢先生?」

慧音の言葉に、召喚フィールドを展開しようとしていた長谷川先生が動きを止める

「私はFクラス代表の坂本君に、事前に話を聞いていました

『Bクラスが協定を破る可能性があるから着いてきてくれ』と」

「ですが、話を聞く限り休戦協定を先に破ったのはそちらですよ?」

「この場での話を聞けばそうかもしれないませんが、そちらはどうなのでしょう?」

なぜ、Bクラス代表の根本君と長谷川先生が、Cクラスの教室に隠れるようにして居たのか…

Fクラスが協定違反をするだろうから一緒にCクラスにいてください。と言うものならその時点でFクラスが協定違反をしていたというわけではないのに、戦う準備をしていたということですよ?」

「ふむ…なるほど…」

「私としてはどちらが協定違反をしてもいいのですが…」

これは戦争ですが、あくまでも『テストの点数を用いた戦争』です。勝利のためとはいえ、Fクラスの設備をボロボロにするような生徒の言うことを信用できない」

「チツ、待て!それなら、あの観察処分者のことは信用するというのか!」

学園の恥ともいえるべき存在に、この僕が劣るとでもいうのか!」

慧音の言葉に対し、根本君が言葉を発する

「静かにしてください。私は今、長谷川先生と話をしています」

それに、吉井君が観察処分者になつたのは問題を起こしたのではなく、『教師の手伝いをしたいからそういう扱いにしてください』と、彼が自ら志願したものです

長谷川先生、召喚フィールドは私が担当するので、先生は別の場所へどうぞ」

「…わかりました。少々気になることもありますが、どちらにせよ協定違反に対処する教師を引き受けてくれるのであれば、私はこれで」

そう言つて、長谷川先生はCクラスを後にする

「チツ！予定が狂つたが、お前らやれ！」

「上白沢先生！Bクラス芳野がFクラス代表に勝負を仕掛けます！」

長谷川先生が去り、根本君が指示を出してその場が動き出す

でも、僕らの狙いはこの場を避けるのではなく、この場の教師を慧音一人にして日本史でしか勝負できないようにすることだ

「上白沢先生！代表に代わつてFクラスの吉井明久がこの場に居るBクラス生徒全員に勝負を仕掛けます！」

「同じくFクラスの藤原妹紅、参戦します！」

「同じくFクラス、十六夜咲夜も援護します！」

『試獣召喚!』

「Bクラスの皆さん、召喚しないと戦闘放棄とみなし、戦死扱いになりますよ?」

「くっ! 試獣召喚!」

『試獣召喚!』

流石に戦わないといけないと察したのか、Bクラスの生徒が一斉に召喚獣を召喚する

Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 根本恭二

日本史 531点 VS 231点

Fクラス 十六夜咲夜 & 藤原妹紅 VS Bクラス モブ×9

日本史 453点 VS 平均193点

「馬鹿な!」

「全員高得点保持者だ?!」

「相手の召喚獣:すべて腕輪がついてるぞ?!」

Bクラスの生徒が騒ぎ出す

当然だ。見下してきたFクラスの生徒に点数で負けているのだから

「オイ、先生! 藤原の召喚獣、四百点を超えてないのに腕輪がついてるぞ?! 反則じゃない

のか!!」

根本君がそう叫び出す

初見だとそうなるだろう。妹紅の腕輪は特殊なのだから

「残念だったね。Bクラス代表さん

私の腕輪はちよつと特殊でねえ召喚する時点で自動的に発動するのさ!」

「僕も使っておこうかな!腕輪発動!」

Fクラス 吉井明久

日本史 381点

そう宣言すると、僕の召喚獣の点数が減る

「はっ!何も起こらないじゃねえか!お前たち、やるぞ!」

そういうと、根本君以外の召喚獣が僕たちの召喚獣に向かって、三体ずつ突っ込んでくる

「甘い!」

「甘いですね!」

「燃え尽きろ!」

Bクラスの生徒は操作に慣れてないのか、直線的な動きで突っ込んでくるだけで、僕と咲夜は敵の攻撃をはらりと避け相手にカウンターを入れ、妹紅の召喚獣は自身の点数を消費（燃烧）しながら炎の壁を作った

Bクラス モブ×9

日本史 D E A D

「馬鹿なっ!?!」

「あの数を…一瞬で…!?!」

「ありえない…」

Bクラスの生徒はよほど自信があつたのか、膝から崩れ落ちていく

まあ、そんなのどうでもいいけど…

「さあ、あとは君だけだ。根本君!

よくもFクラスの設備を…Fクラスの皆の道具を壊してくれたね! 君は僕を怒らせ
たんだ!」

「ハッ、何を言い出すかと思えば、そんなことか

これは戦争なんだ。そんな小さなこと気にするなよ

それに、Fクラスの生徒なんて屑の集まりだ。あんな奴らの設備や道具を壊して何が悪い」

そうやって、根本君はへらへらしたような顔でそう返してくる

「違う！確かに彼らは、ロクに勉強もしなかったような人たちかもしれない！

だからといって、道具を壊していい理由なんてない！あんな彼らだろうと、使われた道具に神は宿るんだ！想いはこもるんだ！

それを君は壊したんだ！」

「ハハハッ！何を言い出すかと思えば、道具に神が宿るだど？そんな年にもなってそんなことを考えてるなんて、やっぱりFクラスは馬鹿ばかりだろうな！反吐が出る！」

根本君はそう一蹴し、いつのまにか僕の召喚獣の背後にいた召喚獣を動かして僕の召喚獣に斬りかかった

「観察処分者なら、斬られると痛いんだろう？たとと喰らいな！」

「明久！危ない！」

持っている剣を大きく振りかぶり斬りかかってくるのを、妹紅の召喚獣が身を挺して防いだ

「ハッ！これで一人目だ！」

「…何を言ってる？まだ誰も倒していないぞ、根本恭二」

「はあ？君の方こそ何を言ってるんだい？君の召喚獣はもう倒れたんだ」

勝った！そんな表情をしていた妹紅の言葉に、呆れた表情で返す根本君

でも、妹紅はまだ負けてない

「一つ言っておく。不死鳥は甦る！」

妹紅の召喚獣がまるで燃え尽きるように消えたその場に、炎の羽根をまとった妹紅の召喚獣が再び現れた

Fクラス 藤原妹紅

日本史 254点

「復活した…だと?！」

「怯んでる暇はないぞ!！」

根本君が妹紅の召喚獣が復活している間に、炎をまとった妹紅の召喚獣が根本君の召喚獣に対して蹴りかかる

「そんな攻撃当たらないツ!！」

「私の存在…忘れてるわけではないでしょうね?！」

根本君がよけようとした瞬間、咲夜以外の召喚獣の時が止まり、無数のナイフが根本

君の逃げ道を塞いだ

「根本君……これでゲームオーバーだ！」

「腕輪解除！」

根本君の召喚獣が炎とナイフの連携によって散り、僕たちのBクラス戦の勝利が確定した

交渉と条件とある提案

明久 side

「さて、それじゃあ戦後対談と行こうか？負け組代表さん」

雄二は、負けて倒れこんでいる根本君を煽るように声をかける

「……」

根本君に先ほどのような勢いはなく、睨むような顔をしている

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには自分たちで壊した卓袱台だったものをプレゼントしてやるんだが、条件を呑んでもらえば特別に免除してやらなくもない」

「…条件はなんだ」

不敵な笑みを浮かべる雄二の言葉に、根本君は力なく問う

「それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ、お前には去年から散々迷惑だったし、今回の戦争でもさんざんやってくれたからな」

正直目障りなんだよ」

根本君に対してかなりストレスがたまっていたのか、雄二はいろいろとぶちまける「そこで、お前らBクラスに大チャンスだ。取り巻きのお前らもちゃんと聞いとけよ?」

雄二は完全に悪役の顔で、根本君の取り巻きに言い放つ

「明日、Aクラスに行つて試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば、設備に関しては見逃してやる

ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからなあくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えてこい」

「…それだけでいいのか?」

疑うような根本君の視線。それはそうだ、さつきいろいろとぶちまけられておいて、これだけだと条件が良すぎる

「ああ。Bクラス代表がこれを着て言ったとおりに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、文月学園の女子制服
一体どうやって準備して、どこから取り出したのだろう

それがわからないおかげで雄二がただの変態みたいだ

「ば、馬鹿なことを言うな!この俺がそんなふざけたことを……!」

根本君が慌てふためく。そりやそうだ

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

根本君の取り巻きたちから次々とそんな言葉が出てきた

取り巻きとはいえ、彼らも相当溜まっていたのだろう

「んじや、明日ちゃんとそれをやってこい。写真を撮って俺たちのところに見せに来てくれたらそれでいい

あと、この戦争は和平交渉による終結扱いにしておいてくれ。そうじゃないと、戦争の意思を伝えたところで意味がないからな

俺たちはFクラスに戻るぞ」

雄二はそう残してこの場から去って行った

僕たちも、それについていくような形でCクラスを後にした

少年たち移動中…

「さて、お前たちのおかげで助かった。ありがとう」

Fクラスに戻るなり、雄二が感謝の言葉を口にした

「これで、残すはAクラス戦だけとなった。

明日、明後日と補充試験を行ったら、作戦を伝える。まずは補充試験を頑張ってくれ」
「わかったよ！Aクラス戦…点数の自己ベストをたたき出してやる！」

「頑張るぞい」

「……（コクコク）」

雄二の言葉に続けて僕、秀吉、康太はやる気満々で返事をする

「私も帰ったらいろいろ見直しとくか」

「勝ちましょう、私たちで」

妹紅も咲夜もやる気なようだ

「よし、それじゃあ、解散！」

最後に雄二が締めて、僕らはそれぞれ帰路についた

明久 side out

三人称 side

時を同じくして学園長室

「(コンコン) 保険医の八意永琳です」

「入りな」

八意永琳は学園長室を訪ねていた

「学園長、来月の清涼祭で召喚獣を使った大会を行うとお聞きして、提案をと思ったのですが、大丈夫でしょうか？」

「…ふむ、聞こうじゃないか」

「召喚獣の大会は二人一組で行い、三回戦以降は一般公開をすると聞いたので、通常の召喚獣の戦いではなく、特殊なルールを使えないかと…」

「…特殊なルール？」

永琳が学園長へと特殊ルールの採用について提案する

「はい。『スペルカードルール』というのですが…」

そう言つて、永琳は召喚獣仕様の『スペルカードルール』を書いた紙を渡す

「…ほお、面白そうじゃないかい。確かに、ただの召喚獣の戦いだと殺風景だし、このルールだとウチの技術力のアピールにもつながりそうだ

問題は、このルールを使うとして試験運用をどう行うかだが…」

学園長は面白そうだと、そのルールを見た

「それも考えがあります。二年Fクラスが打倒二年Aクラスを掲げていることをご存じ

ですか？」

「知ってるよ。さつきBクラスを倒したんだらう？ 全く、新学期が始まってまだ一週間だというのに、元気がいいねえ…」

「私の推測だと、直接Aクラスを叩かないということは、通常の戦争ではなく、一騎打ちか何かでの戦争を行ってるんじゃないでしょうか？」

「…なるほど、もし一騎打ちだった場合、その一騎打ちのうち一試合でも『スペルカードルール』を使わせる、ということかい」

「そういうことです。一騎打ちという制度を使うのであれば、その許可を教師側にも取りに来るはずなので、その条件として提示すれば…」

「だが、突然そんなルールをやらせて、試験運用になるのかい？」

「それも、戦わせる生徒を指定すれば大丈夫だと思います」

「戦わせる生徒を指定、ねえ。その生徒というのは？」

「Fクラスの『吉井明久』と『藤原妹紅』。Aクラスの『アリス・マーガトロイド』と『蓬萊山輝夜』の四名です」

「わかった。考えておくよ」

「それでは、失礼します」

その言葉を最後に、永琳は学園長室を去った

「スペルカードルール」ねえ…面白いじゃないかい」
一人になった学園長は、不敵な笑みを浮かべていた

感謝と作戦と勝利への道

明久 side

Bクラスへの勝利から二日経った朝、前日にFクラスは補充試験を終えて対Aクラスに向けて雄二の演説が始まろうとしていた

ちなみに、根本君はちゃんと役目を果たしたらしい

「まずは皆に礼を言いたい。周りには不可能だといわれていたにもかかわらずここまで来れたものは、ほかでもない皆の協力があつてのことだ。感謝する」

壇上の雄二が最初に発したのは、クラスの皆への感謝の言葉だった

雄二が多数の人間に感謝するなんて珍しい

「そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

雄二の口から、大体予想通りの言葉が出てきた

Aクラスと全面戦争をするつもりだったらBクラスと戦うなんてことしなくいいはずだからね

『どういふことだ?』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ、それを今から説明する」

突然の一騎打ち宣言に、クラスメイトが困惑の声上がり、雄二が制止する

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子さんと、Fクラス代表の坂本雄二

クラス間の戦争を一騎打ちで代用するのだから、当然だろう

だが、いくら雄二の学力がそこそいいからって、霧島さんに勝てるのだろうか?

「お前たちも知ってるかもしれないが、翔子は確かに学年トップの成績を持っている

まともにやりあっても勝てないかもしれない

だが、それはDクラスもBクラスも同じだっただろう?まともにやりあえば勝ち目はなかった

それは今回も同じだ!俺は翔子に勝ってみせる!」

最初は勝てないと思っていた勝負を、雄二は勝利に導いてきた

雄二はきつとやってくれるのだろう

「俺を信じてくれ!過去に神童と言われた力を、今皆見せてやる!」

『おおおーっ！っ！』

どうやらクラスの皆は雄二を完全に信用しているようだ

確かに雄二は過去に神童と呼ばれていたし、今だって一部では有名だ

『過去に神童と呼ばれた生徒が、その力を取り戻しつつある』と

雄二は入学前は喧嘩に明け暮れて『悪鬼羅刹』なんて呼ばれてたみたいだけど、僕が知り合った雄二はどちらかというと神童だから、よくわからないけど……

「さて、具体的な作戦だが、一騎打ちでは召喚フィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

雄二の言った作戦は、いたってシンプルなものだった

雄二は霧島さんの弱点を知ってるのだろうか？

「日本史だ」

日本史？霧島さんは情報が苦手なのだろうか？彼女の得意な科目や不得意な科目のことはよくわからないので、少し疑問に思ったその時、雄二は言葉を続けた

「ただし、内容は限定する」

レベルは小学生程度。点数は百点満点の上限あり

「召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

小学生程度の満点あり？それだと、満点前提のミスした方が負けになるような勝負になるだろう

そんなことをして本当に勝てるのだろうか

「雄二、そんなことをして勝てるの？その方法だと、満点が前提で、集中力が乱れてミスした方が負けになるよね？」

僕は思わず雄二に質問した

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「^レ謎がさらに深まった
???」

「雄二よ、あまりもつたいぶるでない。早くタネを明かしてほしいのじゃ」
クラスの皆も秀吉の言葉にうなずいた

「俺がこの方法を採用した理由は一つ。ある問題が出ると、翔子は必ず間違えるからだ」
ある問題？なんだろう

「その問題とは『大化の改新』だ」

『大化の改新』、それは当時天皇を次々と擁立したり廃したりするほど権勢を誇っていた

蘇我氏を皇極天皇の皇居において蘇我入鹿を暗殺して滅亡させ、当時の日本に様々な改革を行った出来事である

でも、それがなんなのだろうか

「大化の改新？その問題が何だっというのさ」

「ああ。大化の改新の年号を問う問題。それが出れば俺たちの勝ちだ！

明久、大化の改新の年号はわかるな？」

馬鹿げた質問だ。そんなの簡単だ

「『蘇我入鹿を蒸しころす』って語呂合わせをして覚えると簡単な645年だよ。最近は何とバラバラな意見が飛び交ってるみたいだけど…」

「…物騒な覚え方だな。だが、正解だ

そして、その問題を翔子は間違える！そうしたら俺たちの勝ちだ！」

なるほど…それにしても、さつきから気になってたけど…

「坂本って霧島さんと仲がいいのか？」

妹紅がド直球に質問を投げた

僕も気になってた質問だ

さつきから霧島さんを『翔子』とか『アイツ』とか言ってたし

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

なるほど、幼馴染だったか

そう納得した瞬間、Fクラスの生徒がいきなり立ち上がった

「貴様は男の敵だ！Aクラスの前にお前を殺す！」

…やはりFクラスは馬鹿なのかもしれない

しれっと康太も交じってるし

「俺が一体何をしたと!？」

それに、幼馴染でそうなるなら、明久と藤原、十六夜はどうなるんだ！」

雄二の馬鹿野郎！

「お前もだ吉井明久ア！」

「落ち着け、お前たち。もう一つ伝えておくことがある」

「つまらんことだったら殺すぞ」

…Fクラスがただの暴徒になっている

「もし我らがFクラスがAクラスに勝った暁には、設備ではなく振り分け試験の再試験を要求するつもりだ！」

ほう？初耳だ

「それがなんだというのだ！」

「お前たちの頑張りしだいでは、こんな九割が男のクラスなんかじゃなく、女子が多いク

ラスに行けるといふことだ」

「よし坂本、お前たちを殺すのは後回しにしておこう」

…やっぱりこの人たち馬鹿だ。君たちは実力でFクラスに来たのだからに

「とにかく、俺たちの勝利は揺るがない！俺たちは勝つぞー！」

『おおおー！』

「明久、藤原、十六夜。お前たちはこのあと、俺と一緒にAクラスに来てもらう。宣戦布告に行くぞ」

『わかったよ。代表』

僕と妹紅、咲夜は声をそろえて、雄二に返事をした

Aクラスとの戦いまで、あと少し

ここから没になったネタ

雄二が霧島翔子の苦手科目を教えるシーン

「情報だ」

情報？霧島さんは情報が苦手なのだろうか？彼女の得意な科目や不得意な科目のことはよくわからないので、少し疑問に思った

「霧島さんは情報が苦手なの？」

僕は思わず、そう質問した

「ああ、そうだ。翔子は情報が苦手科目なんだ。明久、お前なら何点取れる？」

雄二が疑問を解いてくれた後、僕に質問を投げ返してきた

…よりよってあまり答えたくない質問だ

「…あと少して三桁だったはず」

「…そういえばお前も情報が苦手だったな。すまない」

仕方ないじゃないか。電子機器を買ってもらう前に親は亡くなったし、幻想郷の文化は明治時代で止まってるのだから

宣戦布告と乱入と特殊ルール

明久side

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告

僕と妹紅、咲夜、雄二はAクラスに宣戦布告するために、Aクラスの教室に来ていた
「うーん、何が狙いなのか？」

現在雄二と交渉を行っているのは、秀吉の双子のお姉さん、木下優子さんだ
本当に秀吉と似ている…

「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが怪しく思うのも無理ないだろう

僕たち最低クラスであるFクラスが、一騎打ちで学年トップである霧島さんに勝負を挑むというのだから

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけど、わざわざリス

クを冒す必要もないかな」

「賢明な判断だな」

流石、Aクラス代表の代理として交渉してるだけはある。簡単にはいかない

だが、勝負はここからだ

「ところで、Bクラスとやりあうつもりはあるか?」

「Bクラスって…この前来ていた、あの…」

Bクラスという単語を聞いた瞬間、木下さんの顔が一気に青ざめる

僕たちは写真を見ただけでそうなったのだ。無理はない

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。まだ宣戦布告はされてないようだが、どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争をしたから、三カ月間は試召戦争ができないはずだよ
ね?」

「それでもないぞ? 対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになってる。何の
問題もない

もちろん、Dクラスもだ」

そう、僕たちFクラスが設備を奪わないって条件まで出して和平交渉に手終結って形
にこだわったのはここにある

こうすれば、戦争で負けても試召戦争は行うことができる

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

「うーん……わかったよ。何を企んでいるかわからないけど、代表が負けるなんてありえないからね

その提案受けるよ」

意外とあつさりと返事を受け取ることができた

これには驚きだ

「だって、あんな格好をした代表のいるクラスとやるなんて嫌だもん……」

あー……うん。確かに

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い七人ずつ選んで、一騎打ち七回で4回勝った方が勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

相手もなかなか頭が回るみたいだ。きつちり警戒している

「なるほど。こつちから姫路が出ることを警戒しているんだな？」

「それもある。でも、姫路さんじゃ代表が負けるとは思えない

でも、十六夜さんもいるし、何より危険なのはその吉井君」

「えっ？ 僕？ 僕は観察処分者だからそんなに警戒しなくても——」

「そう、BクラスもDクラスも『観察処分者』なんてただの肩書だけに惑わされたけど、ここはAクラス

貴方が本来どのくらいの成績なのかはある程度知ってる」

さすがAクラスだ。なかなかの警戒っぷりで：

「そうか。仕方ない、その提案は受ける」

「ホント？うれしいな♪」

雄二も意外とあっさり提案を受け入れた

でもまあ、まだ交渉しないといけない項目が残ってるから

「ただし、勝負する科目はこちらで決めさせてもらう。そのくらいのハンデがあってもいいよな？」

そう、戦う科目がまだ残っている

「えっ？うーん…」

また悩む木下さん。これもクラスの命運を握る選択だ

今回は少し長い

「…受けてもいい」

うわあ！

どこからともなく現れる霧島さん、この学校には距離を無視する能力を持つ人が多す

ぎないか？

「…雄二の提案、受けてもいい」

「あれ？代表、受けてもいいの？」

「…その代わり、条件がある」

「条件だと？」

霧島さんの言った言葉に、雄二が反応する

「…負けた方はなんでも一つ、言うことを聞く

それと、二回でいいから教科を選ばせてほしい」

霧島さんの提案は意外なものだった

「代表、そんな条件じゃなく、もっと面白いものにしませんか？」

その言葉とともに現れたのは、蓬萊山輝夜だった

彼女はクラス据え置き冷蔵庫の中から現れた

…何を思っつてそこから出てきたのだろう

「…輝夜？」

「負けた方はなんでも一つ、言うことを聞くのはクラス単位じゃなくて、一騎打ちの代表
同士にも当てはまるようにしましょう？」

輝夜はとんでもない条件を投げかけてきた

面白いもの好きの彼女らしいが…

「交渉成立、だな」

「…勝負はいつ？」

「そうだな…十時からでいいか？」

「…わかった」

決めることは決め終わった。意外とうまくいったな

「よし。交渉は成立だ。いったん教室に戻るぞ」

雄二の言葉で僕たちがAクラスを出ていこうとしたその時だった

「待ちな！」

Aクラスのドアから、学園長が顔を出した

「何やら面白そうな話をしてるじゃないかい」

「学園長か。あんたの所に行く手間が省けた。Aクラスとの戦争だが、一騎打ち形式で

やりたいが、いいよな？

それと、試召戦争に勝った時の報酬を変えてほしい」

「ほお？報酬の変更を望むとは珍しいね。なんだい？」

「Fクラスの生徒の振り分け試験の再試験を求める」

タイミングよく入ってきた学園長に、雄二はその言葉を投げかけた

「それは構わないが、こつちからも条件があるよ」

「条件だと?」

報酬を普通ならありえないようなものに変えてもらおうとしてるんだ。それなりの条件だろう

「来月行われる清涼祭で、召喚獣の大会があることは知ってるね?」

「ああ、そんな話があったな」

「実はその大会に、特殊なルールを設けようと思ってねえ、そのルールの試運転を、一騎打ちの中の一試合に組み込むっていうのなら、そつちの求める報酬をくれてやろうじゃないか」

まさかの条件だった

「…一試合でいいんだな?」

「そうさね。だが、戦う人間や教科はこちらから指定させてもらうよ」

「それはできない。こちらが勝つうえで、そんなところにあまり人員を割きたくない」

「それは逆だよ。慣れないルールでやるのに、初めてやるような人間で、勝てると思うのかい?」

それは確かにそうだ

「…確かにそうだな。で、そのルールと人選、科目はなんだ」

「試験運用するルールの通称は『スペルカードルール』。清涼祭の大会に合わせて、二対二の勝負にしようよ」

『スペルカードルール』だって!?! 学園長が何でスペルカードルールを知っているんだ!?!

「そしてルールだが、今からAクラスモニターに投影するから、それを見てもらおうかね」

た 学園長がそう言うのと、Aクラスのでかいモニターに、スペルカードルールの詳細が出

スペルカードルールによる対決の方法

・名前と意味、美しさを持った弾幕（これを、今後スペルカードと呼ぶ）という攻撃方法を主に使う

・スペルカードを使うことのできる回数は、総合科目では千の倍数、単体科目では百の倍数を参照する

- ・スペルカードとは別枠として、ラストスペルもしくはラストワードを保有する
- ・ラストスペルは腕輪未所持、ラストワードは腕輪を所有しているときに使える

- ・ラストスペル、ラストワードは未使用のスペルカードがない場合にのみ使用できる
- ・意味のない攻撃はしてはいけない。意味がそのまま力となる
- ・スペルカードは召喚獣と召喚者の特性な関係ないものは使えない
- ・絶対に避けることのできない攻撃はできないものとする
- ・物理攻撃を行う場合、スペルカードを伴う物理攻撃でないといけない
- ・スペルカード、ラストスペルを考えた場合、そのスペルカードの内容を教師に提出すること
- ・美しくないスペルを使用した場合、残りの点数が差し引かれる

召喚獣をベースにしているからか、僕らの知っているルールとは少し違うけど、かなり似たものだ

本当に、学園長はこのルールをどこから手に入れたんだ？

「なるほどな。大体わかった。で、学園長が指定する生徒と科目ってのはなんだ？」

「このルールを提案した先生から推薦された生徒は、Aクラス『蓬莱山輝夜』、『アリス・マーガトロイド』。Fクラス『吉井明久』、『藤原妹紅』の四名だよ。対戦科目だが、総合科目で行うよ

この四名はスペルカードを考えた後、担任の教師に提出すること
また、どちらかがストレート負けしてもいいように、この試合は中間の第四戦で行っ
てもらおうよ」

学園長から指定されたのは僕、妹紅、アリス、輝夜の四人だった
見事に幻想郷関係者だ。もしかして、提案したのは永琳かな？

学園長がここに来たのも、永琳が先読みをして学園長に伝えたなら納得できる…
「わかった。Fクラスはその条件を呑む」

「…Aクラスも同じく」

「これでこちらからの要件は以上だよ。また、試験運用のデータは学校内で公開するよ
清涼祭での大会の参考にもしてもらいたいからね」

どうやら、こういうのも含めての試験運用のようだ

「いいたいことを言い終えたのか、学園長はこの場を去って行った
「まさかこんなことになるとはな。とりあえずクラスに戻るぞ！」

明久と藤原はやらないといけないことが増えたからな」

学園長が去った後、雄二がそう残して去る

「僕たちも行くのか」

「だな」

「ええ」

僕たちも、後を追うようにAクラスの教室を出た
現代でのスペルカードルール、頑張らないと……！

選択と相談と奇跡の対峙

明久 side

「では、両名共準備はいいですか？」

今日はここ数日の試召戦争で何度かお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める

なぜ高橋先生なのかというと、高橋先生は学年主任という立場上、すべての召喚フィールドを展開できるので

「ああ」

「…問題ない」

そして、一騎打ちの会場はAクラス。Aクラスは広いし、見た目もいいから派手な勝負になっても見栄えはいいだろう

ちなみにFクラスからは

秀吉、島田さん、康太、僕と妹紅、咲夜、姫路さん、雄二の順で出る

科目の選択権は4つ、秀吉と島田さんには悪いけど、二人にはAクラスに匹敵する点

数を取れる科目がない

雄二の作戦だと、二人の試合で相手に科目の選択権を使わせて、残りで勝つ作戦だ。そして僕と妹紅はその光景を眺めながら、スペルカードの構成について悩んでいた。「学園長曰く、スペルカードのリストは僕たちの試合が始まる前に出せばいいらしいけど……どうしようか」

「そうだねえ、召喚獣でどこまで再現できるかも問題だよね」

そう、いくら召喚獣と召喚者の特徴が反映されるスペルカードが使えとはいえ、それがどこまで反映されるのかは不明だ

「それでは、第一試合を開始します。一人目の方、どうぞ」

妹紅とそうやって悩んでいると、第一試合を始めるといわれた

どうやら秀吉と秀吉のお姉さんの戦いのようだ

「明久、藤原、お前たちはそれを作ることに集中しておけ」

初めて実装されるルールだ。中途半端な出来だったら負けかねないからな」

僕の意識が少し試合にそれたのを察したのか、雄二がそうやって声をかけてくる

「あ、うん。わかったよ」

僕は雄二にそう返事をして、作業に戻る

「うーん、僕の召喚獣を使って再現できそうなスペルって、あまりないんだよなあ…」

武器も木刀だから、出来ることは限られるし：『妖夢』のスペルぱーどを模写したスペルがいいかな…」

『魂魄妖夢』は、幻想郷で知り合った半人半霊の剣士だ。

僕が知っている幻想郷の住人で刀を使っているのは彼女くらいしか知らない

鎌や弓などを使っている人はいるけど：僕の召喚獣で今は真似できない

そして僕がスペルカードルールで戦うとき、基本的に僕的能力である『学習能力を強化する程度の能力』で、ほかの人のスペルカードを真似ているのだ。もちろん、オリジナルもいくつかあるけど、僕の召喚獣では扱いつらい

「確かに、それはありかもね

私の方は召喚獣も私に似た特性を持つてるし、ある程度はできると思うんだけど…

『パゼストバイフェニックス』はできるかな？」

『パゼストバイフェニックス』妹紅の持つスペルカードの一つで、フェニックスを憑依させた魂を敵に憑依して攻撃する、耐久型のスペルカードだ

確かに、妹紅の召喚獣の腕輪は自己蘇生ができるけど、そこからあのスペルカードが使えるかどうか…

「そこは清涼祭の召喚大会の時にでも聞いてみようか。今回は、別で行こう」
「うん。そうだね」

「アリスも輝夜も、召喚獣の腕輪がどうなってるかわからない。今回は考えすぎず、普段使ってるので行こう」

雄二、秀吉の方はどう？」

方向性もある程度決まったので、一旦会話を終えて、少し離れたところに居る雄二に尋ねた

「そうだな…相手に科目選択をさせたのはいいが、点数が圧倒的だな。何とか粘ってはいるが、こりやもうすぐ負ける」

やはり、秀吉には荷が重かったようだ

それでも、僕たちの考えはある程度決まった。秀吉がある程度時間を稼いでくれたのだらう

「第一試合、勝者Aクラス」

雄二の予想通り、Aクラスの勝利を告げるアナウンスが聞こえた

「申し訳ないのじゃ…」

秀吉が、申し訳なきようにFクラス陣営に戻ってきた

「いや、大丈夫だ。お前は作戦通り時間を稼いでくれた。おかげで明久たちも方向性が決まったようだ

それに、予定通り科目の選択権も使わせた。それはお前の手柄だ」

「そうだよ！秀吉が時間を稼げてなかったら、僕たちはまだまだ悩んでいたからね」

「おぬしら…」

「秀吉はゆつくり休んどけ」

「わかつたのじゃ」

そう言つて、秀吉は奥の方へ下がっていった

「さて、僕たちもまとまったから、ここからは本格的に観戦させてもらおうよ」

「ん？もう大丈夫なのか？」

「うん、ルールが説明された時点で、どんな感じにするかは考えてたから、もう大丈夫！」

「そうか。さて、ここからの試合がどうなるかだな…島田には悪いが、数学の点数は高いが島田の点数じゃAクラスとは戦えない。ちゃんと相手に科目選択権を使わせられるかだが…」

島田さんは、帰国子女ということもあつて日本語（主に漢字）に弱い、だから彼女はあまり漢字を必要としない数学を得意としている。それでもAクラス下位に匹敵する

かどうかなので、Aクラスから選ばれるような人と戦うのは無理があるだろう

「では、第二試合を開始します。二人目の方、どうぞ」

そろそろ第二試合に突入するようだ。Aクラスは誰だろう…かといって、知らない人が多いんだけど

「島田美波、です。よろしく、お願いします」

島田さんが、相手に向かって挨拶をする。やはりまだ日本語に慣れてないのだろう

「東風谷早苗と言います！実家が守矢神社もりやという神社で、その守矢神社の風祝かぜはふりをやっています！よろしくお願いします！」

どうやら相手の人は、東風谷さんというらしい。どうも自己紹介が島田さんに向けたものというよりも、ここに居る全員に向けたものに聞こえた。

神社の名前も強調していたし…

「では、科目を選んでください」

お互いの自己紹介も終わったところで、高橋先生が二人に問いかけた。

「東風谷さん、どうぞ」

「えっ、いいんですか？では、化学でお願いします！」

どうやら東風谷さんは何も疑いもせずに科目を選んだようだ。Aクラス陣営が少し頭を抱えているのが見えた

「では、承認します！」

高橋先生が科目を承認し、召喚フィールドを展開する

フィールドを張り終えたところで、島田さんと東風谷さんがおなじみのワードを発した

『試^サ獣^モ召^シ喚^ン！』

Fクラス 島田美波 VS Aクラス 東風谷早苗

化学 93点 VS 462点

流石、自信をもって科目は選んだだけある。点数が高い

島田さんも、去年に比べると点数はかなり上がっている。日本語が上達したらもっと高くなるだろう

そして二人の召喚獣だが、島田さんの召喚獣は軍服にサーベル姿。東風谷さんの召喚獣は、巫女服？にお被い棒のような姿と、風祝と言っていたのは本当なのだろうと思う姿だ

「早速ですが行きます！腕輪発動！」

その言葉と同時に、東風谷さんの召喚獣が呪文のようなものを唱えだし、点数がどんどん減っていく。一体どんな腕輪なんだろう

「こつ、こつこれは……！」

島田さんが驚愕の表情をしている。僕も驚きが止まらない

島田さんの召喚獣を突風が包み込み、島田さんの召喚獣の点数をどんどん削っていく腕輪のない島田さんでは、この突風を切り抜けることは難しかったようで、あつけない点数は0になってしまった

「第二試合、勝者Aクラス」

そして、高橋先生からのアナウンスが入る

作戦通りとはいえ、Fクラスは二敗からスタートしたのだつた

三戦目と誤算と弾幕開始！

明久 side

Aクラスとの一騎打ちによる試召戦争は早くも第三試合へと突入しようとしていた

「それでは、第三試合を開始します。三人目の方、どうぞ」

高橋先生のアナウンスが入り、Fクラスからは康太が出ていく

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い紙をショートカットにした、ボーイツシユな女の子が出てきた

僕の関心が薄いだけなのか、先ほどの東風谷さんといいこの子といい、あまり見ない顔が多いような…

「二年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

「……土屋康太」

「どうやら工藤さんというようだ。一年の終わりに転校してきたのなら、あまり知らなくても無理はない(だろう)」

「では、科目を選んでください」

二人の挨拶を聞き終え、高橋先生が康太に問いかける

「……保健体育」

康太の唯一にして最強の武器が選択される

「土屋君だっけ?随分と保健体育が得意みたいだね?」

工藤さんが康太に話しかける。随分と余裕みただけ、転校生だし康太の実力をしたないのかな?

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ?」

「……キミとは違って、実技でね♪」

「……うん、この人はやばい」

「……そろそろ召喚してください」

工藤さんの若干危ない発言を聞いてか、高橋先生が召喚を促す
それはそうだろう

「はい。試獣^{サモ}召喚^{セン}つと」

「……試獣召喚」

Fクラス 土屋康太 VS Aクラス 工藤愛子

保健体育 572点 VS 446点

二人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手に持って現れる

康太の召喚獣は忍者のような恰好に、小太刀といったまるで忍者のような姿だ

工藤さんの召喚獣は、見るからに破壊力抜群な巨大な斧を装備している

そして、二人の召喚獣の共通点はお互いに腕輪を装備していること。お互いに高得点

者の証だ

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよー！」

工藤さんが艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた

巨大な斧に雷光を纏わせ、ありえないスピードで康太の召喚獣に詰め寄る

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん！」

そして工藤さんの召喚獣が剛腕で斧を振るい、康太の召喚獣を両断する――

「……加速」

と思った直後、康太の召喚獣の腕輪が輝き、その姿がブレた
「……加速終了」

康太の召喚獣の姿は、工藤さんの召喚獣よりも離れたところに立っていて、工藤さんの召喚獣は片膝をついている

これは勝負がついたのだろうか

「……と、思うよね?」

「……なに?」

工藤さんのつぶやきと同時に、康太の召喚獣が倒れる

Fクラス	土屋康太	V S	Aクラス	工藤愛子
保健体育	0点	V S	39点	

「第三試合、勝者Aクラス」

「……バカな」

「いや、腕輪の効果を斧だけじゃなくて召喚獣全体に残しておいてよかったよ」

どうやら、工藤さんは康太の腕輪を警戒して、武器だけでなく召喚獣本体にも腕輪の

効果を適用し、腕輪を使って斬りつけた康太にカウンターを入れていたようだ

：しかし、Fクラス陣営の空気は重い。それもそのはずだ。勝てると思っていた康太が負けたのだから

「……すまない」

康太が悔しそうにFクラス陣営へ戻ってくる。彼も絶対に負けられないと思っていたのだろう

「気にするな、康太。仇は俺たちが必ず取ってやるから、今はゆっくり休め」

雄二の言葉に、康太は頷いてFクラス陣営の奥へと消えていった

それにしても、これで三敗目。後がなくなったわけだ

「それでは、第四試合を開始します。第四試合の吉井君、藤原さん、マーガトロイドさん、蓬萊山さんは、スペルカードを私に提出し、ステージにお願いします」

高橋先生からのアナウンスが入る。僕たちの出番のようだ

「明久、藤原。絶対に勝てよ」

「わかってるって。絶対に勝つ！妹紅、行こうか」

「坂本は自分の試合に向けてのんびりしてな。私たちは絶対に負けないから」

雄二の激励を受け、僕と妹紅の二人は高橋先生の元へ向かった

数分後…

僕と妹紅は、ステージでアリスと輝夜に対面していた

「久しぶりね妹紅。まさかFクラスに居るなんて、よっぽど頭が悪かったのかしら？」

輝夜がいきなり妹紅を煽るような口調で口を開いた

『蓬莱山輝夜』。妹紅が恨んでる（？）相手で、その正体は『かぐや姫』本人である

たまに出る奇行は、彼女が月から来たお姫様（つまり宇宙人）だからなのかもしれない

「うるさいわね！ここで会ったが千と五百年目！あんたを絶対に倒す！」

妹紅も輝夜を前にしていつも以上に気合が入ってるようだ

「あの二人は相変わらずね…

それと明久、しばらくぶりね」

輝夜と妹紅を横目に見ながら、アリスが話しかけてきた

『アリス・マーガトロイド』彼女は幻想郷にある魔法の森に住んでいる魔法使いだ

人間が魔法を使っているのではなく、魔法使いという種族である

「アリス、久しぶりだね。ほんと、妹紅と輝夜は仲がいいとかなんというか……」
 「まあ、この二人は置いといて、私たちは私たちで楽しみましょ？」
 「いや、なんでバラバラに戦うような言い方なのさ。これはペアでの戦い！僕たちは絶対に負けないよ！」

「それでは準備ができたようなので、総合科目のスペルカードルール、承認します！」

僕たちの雑談もある程度済んだところで、高橋先生が召喚フィールドを展開する
 召喚フィールドを展開し終えたところで、僕たち四人はおなじみのワードを叫ぶ

『試獣^{サモシ}召喚！』

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 蓬萊山輝夜 & アリス・
 マーガトロイド

総合科目 4221点 & 4096点 VS 4089点
 & 4051点

僕たちの召喚獣が一斉に現れる

おなじみの姿の僕と妹紅の召喚獣

輝夜の召喚獣は、幻想郷にいる時の輝夜をデフォルメしたような姿で、蓬萊の球の枝のようなものを持っている

アリスの召喚獣は、こちらも幻想郷に居る時のアリスをデフォルメしたような姿で、一体の上海人形が隣に浮いていた

そして全員が腕輪を装備している。スベルカードルールとはいえ、これは召喚獣を用いた戦い。腕輪の有無はかなり重要な部分だろう

「さあ、楽しい楽しい戦いを始めましょうー!」

輝夜の言葉を合図に、僕たち四人の召喚獣は、一斉に動き出すのだった

人形と神宝と美しさ

明久 side

僕たち四人の中で、最初に札を切ったのはアリスだった

「先に行かせてもらおうわ！蒼符『博愛の仏蘭西人形』！」

アリスがそう叫ぶと、アリスの召喚獣が取り出したカードと腕輪が輝き、先程まで上海人形だったのが、仏蘭西人形へと変わる

腕輪も輝いたつてことはアリスの腕輪は人形を変化させるものだろうか

そんな余計なことを考えてると、仏蘭西人形が六体に増え、アリスの召喚獣の周りを回転する

そして、仏蘭西人形が回転しながら、弾幕を放ってくる

弾幕の第一波はまるで万華鏡のように分裂しながら、鮮やかに降り注いだ
僕と妹紅は弾幕の隙間を見つけて、滑るように躲しながら近づいていく

Aクラス　アリス・マーガトロイド

総合科目 3451点

アリスの点数は腕輪発動、武器（人形）の複製によつて500点削れていた
だけどこれだけの弾幕、普通の人だったら初見でかわすのは難しいだろう

「くっ、わかつてはいたけどなかなか躲しづらい！」

「まったくだ！私もそろそろ一枚目を切ろうかな！」

「それ以上は近づかせないわ！これは二対二だもの。神宝『ブリリアントドラゴンバ
レッタ』！」

輝夜も一枚目のスペルカードを宣言した

『ブリリアントドラゴンバレッタ』輝夜曰く、昔輝夜が欲した宝の一つ、『龍の頸の玉』が
人間によつて武器に変えられたもの、らしい

輝夜の召喚獣の周りから、無数のレーザー状の弾幕と、七色に輝く弾幕が飛んでくる
アリスの弾幕と重なることで、避ける道がかなり制限されるし、その隙間も召喚獣一
体分しかないから、かなり厳しい

「くうー！これは出し惜しみしてる場合じゃない！時効『月のいはかさの呪い』！」

躲す隙間のなくなつていくことにイライラした妹紅が、一枚目のスペルカードを切る
妹紅を中心に、ナイフ状の弾幕と米粒状の弾幕が回転するように飛んでいき、輝夜と

アリスの弾幕を少しずつ相殺していく

「明久！いまよー！」

そしてそれにより、僕の召喚獣の前にアリスの召喚獣への道ができる

「妹紅、ありがとう！模倣『現世斬』！」

僕はスペルカードを宣言し、妹紅が相殺したことによってできた穴に召喚獣を突進するように移動させ、アリスの召喚獣に向かって斬撃状の弾幕を数本放った

模倣『現世斬』、妖夢の使っていたスペルである人符『現世斬』を真似したスペルである。真似と言ってもほぼ同じだけど…

「その程度の攻撃、甘いわよー！」

アリスは僕の放った攻撃を華麗に躲す。やっぱりこれじゃダメか…

だけど、アリスが僕の攻撃を躲すと同時に、一枚目のスペルが終了する

それにしてもこの戦い…とても楽しい！（のんき）

そんなことを思っていると、妹紅と輝夜のスペルも終了したようだ

「皆スペルが終わったみたいだし、第二ラウンドと行きましょう！紅符『紅毛の和蘭人

形』！」

アリスが二枚目のスペルを唱えると同時に、仏蘭西人形が和蘭人形へと姿を変える

そして、和蘭人形は一体ずつ弾幕を放ち、姿を消していき、また姿を現すと再び弾幕

を放つと、姿を消すというのを繰り返していく

僕は慌てて召喚獣をバックステップで後ろに下げる

さつきより弾幕の密度は薄いけど、相手がいったん消えるからそれが厄介だ

そして、僕と妹紅が回避とある程度の反撃を繰り返したところで、輝夜が口を開いた
「では、そろそろ第二波にしましょう！神宝『ブディストダイアモンド』！」

輝夜が二枚目のスペルカードを宣言した

『ブディストダイアモンド』輝夜曰く、昔輝夜が欲した宝の一つ、『仏の御石の鉢』が地味だからと寶石に格上げしたもの、らしい

輝夜の召喚獣の周りから、無作為にレーザー弾が放たれ、アリスとの弾幕の隙間を少し埋めるように星状の弾幕が放たれる

また隙間が無くなった

僕と妹紅はスペルカードをできるだけ節約するという作戦を立てていたため、防戦一方だ

避けるのに疲れたのか、ここで妹紅が行動を起こした

「やっぱり守ってばかりじゃつまらないから今度は火力を出す！不死『火の鳥―鳳翼天翔―』！」

妹紅が宣言したのは、妹紅の十八番とも言えそうなスペルカードだった

妹紅の召喚獣を中心に、火の鳥を模した炎の弾幕が、アリスと輝夜の召喚獣をめがけて飛んでいく

「っ…なによこの弾幕、やっぱあなたはいろいろとデタラメね!」

「さすが妹紅だけど、それはいつも見てるから効かないわ!」

いろいろ言いながらアリスも輝夜も回避する

でも、妹紅の弾幕は止まらない。一気に形勢逆転と行きたいから、僕も新たにスペルカードを発動する

「一気に畳みかける! 慧音直伝、国符『三種の神器 剣』!」

僕が幻想郷で慧音に教わったスペルカードの一つ、『三種の神器 剣』は日本神話に登場する三種の神器のうちの一つ、『天叢雲剣』をモチーフにしたスペルカードだ

僕の召喚獣を中心に、細かい斬撃状の弾幕が螺旋状に飛んでいく

「ここでそれがくる!? 余計躲し辛くなるわね…召喚獣でのグレイズはあまりうまくいきそうもないし、ここは温存なんて考えてられないわね! 咒詛『魔彩光の上海人形』」

アリスが三枚目のスペルカードを宣言し、和蘭人形は上海人形へと姿を変える

そして、アリスは僕と妹紅のスペルカードを広範囲の攻撃で相殺していく

「くっ…さすが三枚目のスペルカード…威力が違う…!」

僕らの召喚獣を用いた弾幕ごっこは、後半戦へと進んでいく…

明久 side out

雄二 side

俺たちFクラス陣営は、明久たちの攻撃の華麗さに、衝撃を受けていた派手ながらも、その中に美しさがあり、攻撃を回避する姿も優雅だ確かに、こんな戦いなら清涼祭の大会で使いたがるのはわかる

「すげえな……」

「ええ。さすが明久たちです」

俺の近くに立っていた十六夜が、俺のつぶやきに反応した

コイツは明久たちの知り合いだし、何か知ってるのかもしれないと思い聞いてみることにした

「なあ、明久たちはこのルールのことを知っていたみたいだが、十六夜はなぜだか知ってるか？」

「そうですね……こんな遊びがあつたらいいなと考えていたことがあつた……という感じですかね？」

「なるほどな…考えたことがあるから最初からある程度想像できていたというわけか」
「なんだか少し誤魔化されたような気がしたが、まあいい」
「今はこの美しい戦いに見惚れておくとしよう」

炎と応酬とラストワード

明久side

僕と妹紅、アリスと輝夜のスペルカードルールによる試召戦争は、後半戦へと突入した

妹紅の不死『火の鳥―鳳翼天翔―』と、僕の国符『三種の神器 剣』と、アリスの咒詛^{じゅそ}『魔彩光の上海人形』が激突し、美しい火花を散らしてお互いの弾幕が消滅していく

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 蓬萊山輝夜 & アリス・マーガトロイド

総合科目 2111点 & 1985点 VS 2301点
& 1835点

僕たちの点数をちらりと確認すると、全員の点数は既に初期点数の半分近くとなっていた

やはり点数を消費して弾幕や腕輪を扱う分、点数の消費が激しい

「二人とも、よそ見は厳禁よ！神宝『ライフスプリングインフィニティ』」

アリスの弾幕を相殺するのに気を取られている間に、輝夜が三枚目のスペルカードを宣言する

『ライフスプリングインフィニティ』詳しいことはよく知らないけど、無限に沸く生命の泉らしい

輝夜の攻撃は、僕たちの後方から円を中心とした全方位へのレーザー攻撃だった。それが一定間隔を空けて繰り返される

アリスの弾幕はいったん諦めて、僕と妹紅は緊急回避を行った

これでまたアリスと輝夜の弾幕を同時に捌かないといけない

相手の点数が減っていくのはありがたいが、三枚目のスペルカードだ。この攻撃を捌き続けるのはかなり難しい

「勝手に点数を減らしてくるのは有り難いけど、これじゃ気を抜いたら負けかねない！次の弾幕はさつきよりも熱いよ！蓬萊『凱風快晴―フジヤマヴォルケイノ―』!!」

少し広めの空間を見つけた妹紅は、三枚目のスペルカードを宣言した

妹紅の召喚獣が紅く光り輝き、莫大な点数を消費して噴火する火山のような弾幕がアリスと輝夜の召喚獣に降り注いだ

さつきの鳳翼天翔も凄い威力だったが、それよりも凄い勢いだ

「もうっ！ほんとに嫌になるわ！第三スペルだからって火力出すぎじゃない!?」

「それかっ！妹紅の腕輪は一度も光り輝いてないし、もしかして点数が0になっても蘇ったりして」

「なによそれっ！絶対対に嫌よ!」

先程までの余裕も束の間、アリスと輝夜が苦虫を噛み潰したような表情になる

それにしてもさすが輝夜、妹紅の腕輪をきつちりと予想している

回避に集中したため、輝夜とアリスの弾幕は消滅する

次第に、妹紅の攻撃も弱くなっていたところで、僕も三枚目のスペルカードを宣言した

「使うなら……かな！模倣『未来永劫斬』!!」

弾幕が先程まで度比べて薄くなったタイミングで、スペルカードを宣言しながら木刀を複製し、二刀流の状態で召喚獣を移動させる

『未来永劫斬』、妖夢が使っていた人鬼『未来永劫斬』を真似したものだ

攻撃の方法自体は最初に使った『現世斬』同様、突進切りのようなものだが、『現世斬』と違い、斬撃も、突進の回数も数が違う

僕は腕輪『模写』で康太の腕輪の効果をコピーし、超スピードで召喚獣を縦横無尽に動かし、斬撃状の弾幕を作っていく

「は、早いっ！使えるスペルカード一回と、点数とは関係なしに設定されているラストワードの計二回……点数的にも、ここはスペルを使うしかないの……!?!」

「アリス、ここはいったん私に任せてもらおうわ！神宝『蓬萊の玉の枝——夢色の郷——!』僕（の）というかベースは妖夢の（だけ）スペルカードに対抗するように輝夜が四枚目のスペルカード宣言した。これで、輝夜の点数による追加分のスペルカードは無くなり、残るはラストワード（人によってはラストスペル）のみとなった

輝夜の放った攻撃は、輝夜を中心として大量の七色に輝く弾幕を放ち、僕の放った弾幕を次々と消し去る

それに加えて、僕たちを追尾する弾幕もあり、僕はスペルカードを中断して、その攻撃の回避に移る。やっぱり早すぎるのは良いことだらけではない

追尾する弾幕は基本的に追尾というよりも僕のいる座標をめがけて攻撃するというもので、正確には追尾ではないが、それでも回避し続けなさいといけないというのは、このルールにおいてスペルカードを宣言しにくくすることを意味する

ある程度時間が経ったところで、妹紅が動いた

「よし、輝夜のこの弾幕は面倒だ！私の召喚獣の一回分の命、くれてやる！惜命『不
死身の捨て身』!」

妹紅が四枚目のスペルカードを宣言した

妹紅の召喚獣の点数はみるみる減っていき、その点数を使って妹紅の召喚獣の纏う炎がどんどん大きくなっていき、被弾をもともせず輝夜の召喚獣に向かって突っ込んでいく

「そうはさせないわ！呪詛じゆそ『首吊り蓬莱人形』!!」

妹紅の捨て身の攻撃を輝夜にあてさせまいと、アリスも四枚目のスペルカードを宣言した

上海人形は蓬莱人形に変化し、小さきまざまな弾幕が妹紅めがけて放たれる

「こつちこそ、させると思う？模倣『レーヴァテイン』！」

妹紅に攻撃を当てさせないために、僕も四枚目のスペルカードを宣言する

『レーヴァテイン』、幻想郷で『フランドール・スカーレット』が使うスペルカードだ。本来、僕の召喚獣はこのスペルカードを扱えない（と思う）けど、腕輪があるなら確実に使える。木刀をベースに『模写』で姫路さんの熱線を使って、レーヴァテインを再現して、僕はレーヴァテインをアリスの召喚獣と人形めがけて振り下ろした

『ドオン!!』

僕の攻撃がアリスの人形に当たると同時に、妹紅と輝夜の方からも大きな爆発音が聞

こえてきて、フィールドが煙で覆われる

煙が収まり、僕たちはフィールドを確認した

どうやらアリスの召喚獣には回避されてしまったみたいだ

妹紅の召喚獣の姿はなく、輝夜の召喚獣は残りの点数がわずかだが生存していた
「なんとか妹紅は倒せた…」

「これで二対一よ、明久!」

アリスと輝夜が妹紅を倒したと少し喜んでるようだ。でも、それは少し甘い
「まだまだ!不死鳥は甦るものよ!ラストワード、『フェニックス再誕』!!!」

妹紅が消滅した召喚獣に向けてラストワードを宣言する

すると、妹紅の召喚獣は炎の羽根を生やし、召喚フィールドに舞い戻った

Fクラス 藤原妹紅

総合科目 2098?点

「さあ、最終ラウンドと行きましょう!」

自身の召喚獣がフィールドに戻ったことを確認した妹紅は、高らかに宣言した

激突と圧倒と天然発動

明久 side

妹紅の召喚獣がラストワードの宣言と共に復活し、火の鳥を模した弾幕を混ぜた大量の弾幕をばらまく

腕輪による蘇生もあるので、先程までとは桁違いの火力だ

「点数的に被弾したら即アウトなら、私たちもラストワードをぶつけてやろうじゃない！ラストワード、『グランギニョル座の怪人』！」

「そうね！最後は単純なぶつかり合いと行きましよう！ラストワード、『蓬萊の樹海』！」
「だったら僕も、そうさせてもらおうよ！ラストワード、『待宵^{まつよいはしやえいせいざん}反射衛星斬』!!」

アリスの言葉をきっかけに、輝夜、僕と続けてラストワードを宣言する

美しく法則性をもって放たれる弾幕、七色に光る優雅な弾幕、熱く燃え上がる火の鳥の形をした弾幕、木刀から放たれる無数の斬撃と衝撃波による弾幕

四種類の弾幕が次々と激突し、爆発して儂く散っていく

「負けてたまるものですかっ！」

「負けないわよ！」

「それはこっちのセリフだっ！」

「すべて燃え尽きろっ!!」

『ドオオン!』

僕たちの繰り広げる弾幕は、次第に勢いが強くなっていき、やがて爆発した煙で何が起きたのかよくわからない

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 蓬萊山輝夜 & アリス・
マーガトロイド

総合科目 21点 & 19点 VS 0点
& 0点

煙が晴れて姿を現したのは、0点と表記されたアリスと輝夜の召喚獣と、何とか耐え抜いていた僕と妹紅の召喚獣だった

「そこまで！第四試合、勝者Fクラス！」

場に出ている点数を確認して、高橋先生がアナウンスを入れる
何とか勝てた…

『ウオオオ!!』

Fクラスからも、Aクラスからも凄い量の歓声が飛び出る

どうやら観客のボルテージは最高潮だったようだ

「はあー負けちゃった…二人とも強すぎない？」

「特に妹紅の腕輪、復活とかありえない…」

「いやいや、それでも僕たちの方もかなり危なかったよ…」

「特にアリスの弾幕の隙間から輝夜がレーザー撃つやつ。二対二の弾幕ごっこなんてよくわからないからかなり焦った」

「そう言いながら、僕たちは集まって話す

「とにかく、お疲れ様」

「そうだ。今度永遠亭でパーティをしましょう。進級パーティまだやってなかったで

しよう?」

「それはいいね。今度やろう!」

「咲夜にも伝えておくよ。とにかく、これは楽しかったよ!」

そんな会話をした後、僕たちはFクラス陣営に戻った

「明久!よくやった!これで一勝三敗だが、まだまだ勝機はある!それに、とても綺麗な戦いだった!」

Fクラス陣営に戻りそんな言葉をかけてきたのは、雄二だった

「ありがとう。それにしても雄二が綺麗って言うなんて、なんか似合わないね?」

「悪かったな!とにかく、お前たちのおかげでストレート負けは無くなった!今は休んでおいてくれ」

「まあ、ゆつくりと観戦させてもらおうよ」

雄二にそう返して、僕と妹紅は近くにあつた席に腰掛ける

「それでは、第五試合を開始します。五人目の方、どうぞ」

タイミングよく高橋先生からのアナウンスが入る。Fクラスからは咲夜が出ていく
「十六夜咲夜です。よろしくお願いします」

「佐藤美穂です。よろしくお願いします」

Aクラスの代表は佐藤美穂さん

「では、科目を選んでください」

二人の挨拶が終わったところで、高橋先生が咲夜に質問する

「そうですね…本気を出させてもらいます。家庭科でお願いします」

咲夜はどうやら本気で勝ちに行くらしい。咲夜の最も点数が高い科目を選択した

「では、承認しますー！」

高橋先生が家庭科で承認する

少し間をおいて、咲夜と佐藤さんが同時に叫んだ

『試^サ獣^モ召喚^ン！』

Fクラス 十六夜咲夜 VS Aクラス 佐藤美穂

家庭科

598点

VS

362点

『なにっ!?!』

咲夜の点数が表示された後、FクラスとAクラスの両陣営から驚きの声が聞こえた

『もう少しで600点だと!?!』

『もう少しで教師レベルじゃないか!!』

『い、十六夜さん…貴女そんな点数を…!』

『私の最高点数は家庭科なので、他の科目はそんなに点数は出ませんよ』

相手の佐藤さんもちかなり驚いている

『そして、そんなに驚いてる時間はありませんよ?速攻で終わらせます!腕輪発動!』

咲夜が腕輪を宣言し、佐藤さんの召喚獣の動きが止まる

『なっ!?!召喚獣が…操作できない…!』

「私の召喚獣の能力は『時間停止』。腕輪を発動していた時点で触れていた物質以外の時間
間は止まります」

時間が止まっている物に干渉できないのと、点数消費が尋常じゃないことは問題です

が…私の武器だと問題はありません！」

そう言って、咲夜は大量のナイフを複製し、四方から佐藤さんの召喚獣をめがけてナイフを投げつける

投げつけたナイフは、あと少しで佐藤さんの召喚獣に当たるかと思われたところで停止した

「これでゲームオーバーです。腕輪解除！」

「そつ、そんな…」

佐藤さんは何とか回避しようと試みるも、四方から飛んでくるナイフに対応できず、召喚獣は串刺しになった

Fクラス 十六夜咲夜 VS Aクラス 佐藤美穂

家庭科 83点 VS 0点

ナイフの雨が止んだ後、表示された点数は咲夜の勝利を告げるものだった

「第五試合、勝者Fクラス！」

結果を確認した高橋先生がアナウンスを入れる

これで二勝三敗、まだまだ分からないところまで来た

「咲夜、お疲れ様」

咲夜がFクラスの陣営に戻ってきたので、僕は咲夜に声をかける

「ありがとうございます。これくらい、どうってことありません

それに、明久たちの戦いの後なので、なんとも味気ない試合になりましたが…」

「いやいや、それは僕たちの試合が特殊だったからであって、本来はアレが正常な試合だからね？」

咲夜は僕たちの試合の後だから美しさが足りなかったかと思ってるようだ

「それに、スペルカードの有無ってだけで、咲夜（の攻撃）はいつも綺麗でしょ？」

「そ、そうですか？…ありがとうございます」

僕の言葉に、咲夜は少し恥ずかしそうに返事をする

僕は何かおかしなことを言っただろうか

「藤原…明久の奴相変わらずだな…」

「ほんつと…明久は言ったつもりだろうけど一言抜けてるし…」

雄二と妹紅がひそひそと話している。なにかあったのかな？

「んーでも、確かに普通の戦争でスペルカードっていうのもあり…なのかな？」

「少なくとも、試召戦争の優雅さは変わりますね？」

「まあ、そこを考えるのは学園長だから、学園長が普通でも使っていていいって思うかどうかだよー」

「そうですね」

「お前たち、そろそろ次の試合が始まるぞ。とりあえず応援するぞ」

「わかったよ」

僕と咲夜の会話に、雄二が割り込んできた。どうやら六回戦がもうすぐ始まるようだから、僕たちの戦いは終盤戦に突入した

強さと失望と決着

明久 side

Aクラスとの試召戦争もに二勝三敗で、残り二試合と終盤に突入してきた

「それでは、第六試合を開始します。六人目の方、どうぞ」

高橋先生がアナウンスを入れる。六回目ともなると、高橋先生がbotなんじゃないかと思つてきてしまう

「あ、は、はいっ。私です」

少し緊張したような足取りで、姫路さんがステージに出た

「僕が相手だ」

対戦相手は、久保利光。今年の学年次席だ

彼は同性愛者なんて噂があるけど、どうなのだろうか

「さて、ここが勝負どころだな……久保も姫路も次席争いをしていた二人だ。実力はほぼ

互角だろう」

雄二がそう呟いた。確かに、二人は学年次席争いをしていた。つまり、点数はほぼ同じくらいという意味だ

「では、科目を選んでください」

高橋先生が姫路さんに問いかけた

「…総合科目でお願いします！」

姫路さんは、少し迷いながら総合科目を選択した。今回のテストが全体的に良かったのだろう

「では、承認します！」

『試^サ獣^モ召^シ喚^ン！』

高橋先生が承認し、一息ついて久保君と姫路さんがおなじみのワードを宣言する

Fクラス	姫路瑞希	V S	Aクラス	久保利光
総合科目	4409点	V S		

3997点

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……』

点数差400点オーバー!?!

いつの間にか、姫路さんは次席争いどころか、首席争いできるレベルまで成長していたらしい

「ぐっ…姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ…?」

久保君が悔しそうに姫路さんに尋ねる。つい最近までは拮抗していた実力がここま
で離れたんだ。気になるのも当然だろう

「…私、クラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんが口にしたのは、予想外の言葉だった

…Fクラスの皆が好き、か

「…姫路さん、君には失望したよ」

久保君から、そんな言葉が聞こえた

「っ！どういふことですか！」

「そのまんまの意味だ。君にとつてFクラスの生徒はそんな存在かもしれないが、それは君がFクラス生徒を美化して見ているだけだ！」

「どうしてそんなことを言うんですかっ！」

久保君の言葉に、姫路さんは召喚獣を突進させ、持っている大剣を振り回す

「そのまんまの意味だよ。君にはそういう風に見えるのかもしれないが、彼らは学校の風紀を乱しすぎる存在だ！」

「そんなことありませんっ！皆さんに謝ってください！」

「君が勝つたら謝ろう。まあ、Fクラスに毒された君に負けるつもりは無いけどね！」

姫路さんの攻撃を、久保君は冷静に回避し、捌き続けて、隙だらけの姫路さんの召喚獣の首を刎ねた

Fクラス 姫路瑞希 VS Aクラス 久保利光

総合科目 0点 VS 2497点

「そん…な…」

「悪いけど、Fクラスを好きだなんていう君に負けるわけにはいかないよ」

「第六試合、勝者Aクラス！この結果を持ちまして、この試召戦争はAクラスの勝利となります」

ただし、ラウンド毎の命令権があるので、五分後に第五ラウンドを行います」

久保君がステージから降りたタイミングで、高橋先生がアナウンスを入れた

…負けちゃったか

「クソツ…」

悔しそうにする雄二

「すみませんっ…私のせいで…」

「姫路よ、あまり気負いすぎる出ない」

「…勝ちの計算に入ってた俺が悪い」

『そうだ、姫路さんは気にしなくていい』

そして、申し訳なさそうにする姫路さんに、Fクラスの皆からはそんな声がかかる

「皆聞いてくれ。俺たちは負けてしまった。残るは俺の命令権をかけた勝負だけだ

我が儘を言う。クラスとしての負けは決まっているから、どうか悔いの残らないように全力で勝負をしてきてもいいだろうか」

『もちろんだ!』

『代表がここまで連れてきてくれたんだ!あとは自分の好きにしてくれ』

雄二の質問に、Fクラスの皆はそう答えた

「皆…ありがとう!」

「時間になりましたので、第七試合を開始します。七人目の方、どうぞ」

高橋先生が、最終戦の合図告げる

「翔子…試召戦争には負けたが、この戦いには勝ってみせる!」

「…負けない」

「では、科目を選んでください」

雄二に、高橋先生が問いかけた

「総合科目でお願いします！」

雄二が選んだ科目は、総合科目だった。小細工なしの全力で挑むためだろう

「では、承認します！」

高橋先生が、本日最後の承認の合図を告げる

『試^サ獣^モ召^{モン}喚！』

一息ついて雄二と霧島さんがおなじみのワードを叫ぶ

Fクラス	坂本雄二	V S	Aクラス	霧島翔子
総合科目		4075点	V S	
				4579点

雄二の点数は、霧島さんに及ばないがかなりの高得点だった

雄二の召喚獣は改造学ランにメリケンサックといった装備、霧島さんは全体的に武士のような装備だった

「行くぞ、翔子！」

雄二はそう叫ぶと、召喚獣を突進させて殴り掛かる

「…っ！早い」

霧島さんはなんとかガードしようだが、少し点数が減る。雄二の召喚獣は比較的軽い装備なので、そのスピードに対応しきれなかったようだ

「まだまだ行くぞ！」

近距離に持ち込んだ雄二は、そのまま両手のメリケンサックで連打する

霧島さんは防戦一方だ

「…見切った！」

と思ったたら、霧島さんは雄二の一瞬の隙をつき、カウンターを入れ、雄二の召喚獣を突き飛ばす

「ちっ、そう簡単にはいかねえか！だったら！」

雄二は先ほどとは違った動きで、霧島さんに接近する

「腕輪発動！『強化』！」

先程とは違う動きの攻撃を霧島さんはなんとかガードしたが、霧島さんの剣が折れた
召喚獣の武器はかなりの強度だけど、それを折るなんてどうやったんだろう

「…っ！なんで…」

「俺の腕輪『強化』は単純に攻撃力を強化するものだ。消費点数によつては、さつきみたいに武器を壊すなんて簡単だ。ま、武器は複製できるから壊したところで気休めにしかならんがな」

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子

総合科目 2875点 VS 2579点

雄二の言葉通り、さつきの連撃でカウンターを食らつたとはいえ、かなりの点数を消耗している

「まだまだ行くぞー！」

「……！腕輪発動」

攻撃を続ける雄二、それに対して霧島さんが腕輪を使って反撃に出る

「なっ……俺の召喚獣が凍つただと……!？」

雄二の召喚獣は凍り付き、急所の部分だけが凍っていない状態だった

「……私の召喚獣の能力は『凍結』。なんでも凍らせることができるし、こんな風に剣も作れる」

そういうと、霧島さんは氷の剣を作り出し、丸出しになっていた雄二の召喚獣の急所

に突き刺した

Fクラス

坂本雄二

V S

Aクラス

霧島翔子

総合科目

0点

V S

968点

あと一歩かもしれないというところで、雄二の敗北が決定した

終戦と説得と命令

明久 side

Aクラスとの一騎打ち最終戦も雄二が敗れて、最終スコアは二勝五敗となった

「…雄二、私の勝ち」

「クソツ、負けちまったか」

勝負が終わった霧島さんが雄二に近づき、僕たち代表として戦った皆も近づいて行つた

「…とりあえず、戦後対談。個人の命令はその後で。クラス単位での命令というよりも、こちらの要求を呑んでくれたら、設備のダウンはしなくてもいい」

「…要求は何だ」

霧島さんの言葉に、雄二はそう返した

「…私たちAクラスと三カ月間、和平条約と同盟を結ぶこと、Aクラスからのある程度の命令に従うこと」

「代表、待ってください！僕は反対です！」

霧島さんの発言に、久保君が反発する

「…大丈夫。Fクラスの一部生徒の問題行動も、Aクラスが監視して、ペナルティを与え
るといい。それに、雄二はきつと戦争のために野放しにしていただけ」

「そうだな。これが終わったらきちんと言い聞かせておこう」

「…だったら、いいです」

久保君は意外とあっさり引き下がった

「…交渉成立。まず一つここでお願いをしておきたい」

「なんだ？」

「…清涼祭はAクラスとFクラスの合同で行いたい」

霧島さんのお願いは、意外なものだった

「Fクラスとしてその提案はうれしいが、いいのか？」

「…Fクラスは男子が多いから力仕事を任せられるし、咲夜に吉井も居るから喫茶店み
たいな催しをするなら、それがいい」

霧島さんは僕と咲夜の家事スキルを知っているようだ。まあ、咲夜とは一年のころに
何度か話したことがあったみたいだし、輝夜辺りが霧島さんに言ったのだろう

「そういうことか。Fクラスは構わないが…高橋先生、教師としてはどうなんだろう」

「そうですね…普通は許されませんが…一応、学園長に聞いておきます」

「その必要はない。話は聞かせてもらったよ」

雄二が高橋先生に質問し、高橋先生がその質問に返事をすると同時に、学園長がAクラスの教室に入ってきた

「データの整理が終わったからここに来たんだが、いいタイミングだったようだね」

「…学園長。AクラスとFクラスの合同での清涼祭出店の許可をもらいたいです」

「そうだね…普段なら却下だといいたいところだが、実験に付き合ってもらった借りがあるからねえ…Fクラスに報酬は用意したがAクラスには用意してないからねえ…Aクラス全員が納得するなら、許可しようじゃないか」

学園長の返答は、少し予想外のものだった。てつきり、規則だから却下の一点張りだと思ってた

「…みんなはどう思う？Fクラスが手伝ってくれれば、規模も大きくできるし、喫茶店系をすればしたら、シフト等もかなり楽になる」

『そうだな…』

『Fクラスって大丈夫なのか？』

『そうだよな』

『でも、吉井君と十六夜さんの作る料理は絶品だって聞いたことがあるよ！』

『それ私も聞いたことがある！』

Aクラスから様々な意見が飛び交う。というか、僕と咲夜の料理、そんなに噂になっているの？

「…学園長、少し時間をもらってもいいですか？」

「構わないよ。AクラスとFクラスだ。いきなり満場一致なんてなるわけないからね」

「…吉井、咲夜。簡単なものでいいから何かデザートを作ってほしい」

材料と調理器具はAクラスに備え付けてある」

なるほど、霧島さんは僕と咲夜の料理を実際に食べてもらおうつもりか

「わかったよ。いいよね、咲夜」

「ええ。任せてください」

「…雄二は、Fクラスを説得して、Aクラスの皆に納得するよう話をしてほしい」

「任せとけ」

雄二はFクラスとAクラスの説得役のようだ

「作るの…簡単だしシュークリームにしようか」

「それはいいですね。そうしましょう」

僕と咲夜は、料理をするために、雄二はまずFクラスを説得するためにその場を離れた

明久side out

雄二side

さて、ここからが俺の腕の見せ所だな

「お前たち、聞いてくれ。Aクラスから同盟の提案と、清涼祭での合同出店が提案された」

『そうなのか』

『それがどうかしたのか』

まずはこいつらの問題行動を辞めさせないとな

「そこでお前たちに聞いておきたいが、この中でカップルを襲った人間がいると聞いた。なぜそんなことをした？」

『決まっているだろう！男とは、愛を捨て、哀に生きるもの！異端者を排除しようとしただけだ！』

『そうだそうだ！』

はあ……こいつらは全く……

「……お前らは、モテたいと思ってるのか？モテたくないと思ってるのか？」

『モテたいに決まってる!』

「だったら、お前たちがやっていることは間違いだ。お前たち、モテたいと思うなら他人を攻撃するのはNGだ」

『なぜだ』

「どうやら、そういうこともわかってないらしい」

「逆に聞くが、もしお前たちに彼女がいるとして、その彼女と一緒に居るところを襲撃されたとして、お前たちはどう思う」

『そんなの嫌に決まってるじゃないか』

『何当たり前のことを』

「お前たちはそういう、人の嫌がる事をやっているんだ。そんな奴がモテるわけないだろう」

『そうだったのか…』

『俺たちはなんてことを…』

『モテるにはどうしたらいいんだ』

「どうやら、意外とこいつらは聞く耳を持っているらしい。これなら、何とかなるだろう」

「簡単なことだ。とにかく嫉妬で攻撃をするな。それだけでも好感度は違う、アピール

しすぎるのもだめだ。明久の周りには女子が多いが、あいつはどうだ？自分からアピールしているか？」

『そうか！』

『しつこすぎるのもだめなのか』

「それもだが、あいつは自分自身のためじゃなく他人のために行動できる。他人へのやさしさが重要なんだ。わかったか？」

それと、ある程度勉強ができるときつとモテるぞ？」

『わかりました！代表！』

『俺たち、心を入れ替えます！』

物わがりのいい奴らで助かった。これで、Fクラスが危害を加えるなんてことは当分ないだろう

あとはAクラスの説得だな

俺はAクラス生徒の元へ行った

「Aクラス生徒の皆、Fクラス代表の坂本雄二だ。今からFクラスとAクラスが清涼祭で合同出店するメリットを伝えようと思う

まず最初に、お前たちの中で力仕事が得意なのは何人くらいいる？」

『力仕事か…』

『あまり自身がないよね』

そんな言葉がちらほらと出る。やはりな、Aクラスは勉強がメインで体育会系は少ないから、力仕事が得意な奴は少ないだろうと思っただが、正解だったようだ

「だから、Fクラスは力仕事をできるやつが多いからそれは利点になるはずだ」

『だが、Fクラスの間問題は起こす奴がいるんだろう』

『それは大丈夫なのか？』

やはり、そう来たか。だが、それはさつき解決した

「そこも心配しなくていい。俺がさつきFクラスの連中には説得してある。問題行動は起こさないはずだ」

『そうなのか？』

『信用できるのか？』

「俺を信じてくれ！この通りだ！」

俺はそう言っただけで頭を下げる

『そこまで言うなら…』

『少しくらいなら…』

「それと、さつき翔子が言ったように、明久と十六夜の料理は絶品だ。俺の予想だともう

すぐできるだろう…つと、来たな」

「おまたせー、待った？」

明久が、少しのんきそうな声でこっちに来た。いいタイミングだ

「明久、出来はどうだ？」

「うん、ばっちりだよ！」

「皆さん、こちらから一つずつお取りください」

そう言つて、十六夜がAクラスの連中にシュークリームを配る

『なんだこれっ…！』

『こんなおいしいシュークリーム…食べたことがない…！』

どうやら好評のようだ

「これが明久と十六夜の実力だ。清涼祭で出店するなら、もってこいの味だろう」

『確かに、そうだな』

『Aクラスに悪いことはないな！』

『その話、賛成だ！』

Aクラスからそんな声上がる。どうやら全員納得したようだ

「と、いうわけだ。学園長」

「わかったよ。二年Aクラスと二年Fクラスの合同出店を認めようじゃないか。じゃ、

「アタシはここで失礼するよ」

学園長はそう言うのと、Aクラスから出ていった

雄二 side out

明久 side

AクラスとFクラスの合同出店も決まり、個別の命令権行使の時間に入った
「それでは、第一回戦の方からどうぞ」

高橋先生が、木下さんと秀吉を呼ぶ

「そうねえ……あまりないんだけど……とにかく勉強を頑張りなさい。それだけよ」
「わかったのじゃ」

「ここは一瞬で話がついた。双子だから、あまりないのだろう

「それでは、第二回戦の方はどうぞ」

そう言つて、島田さんと東風谷さんが出る

「そうですねえ……うーん……これからは守矢神社をよろしくお願いしますね！」

「え、ええつと……」

東風谷さんから飛び出したのは宗教勧誘だった。それはアウトだろう

「東風谷さん、流石に命令での宗教勧誘は…」

「ですよねえ…：だったら、これから仲良くしましょう!」

「はい!よろしく、お願いします」

どうやらうまくまとまったようだ

「では、第三回戦の方」

「ボクも特に思いつかないし…：これから仲良くしてね!」

「……（コクコク）」

うん、輝夜の思い付きだったからなのか、皆案外なものもないようだ

「では、第四回戦の方。これはペアでの試合なので、ペアで一つの命令をお願いします」

二人で一つか…

「妹紅、どうする?」

「ん…：よし、また今度遊ぼう!」

妹紅から出た言葉は、そんなことだった

「遊ぼうって…：そんなことでもいいの?いつも遊んでるような気がするけど…」

「よねえ…：まあ、いいわ。今度遊びましょう」

どうやら、アリスたちは納得してくれたようだ

「決まったようですね。では、第五回戦の方」

「そうね…どのくらい関わるかはわからないけど、仲良くしてね？」

「そ、そんなことでいいなら。お願いします」

咲夜と佐藤さんもすんなり決まったようだ

「では、第六回戦の方」

「…姫路さん、これからもお互い、切磋琢磨して実力を高めあっていこう」

「…はいっ！」

久保君と姫路さんも特に何もなかったようでよかった

「では、第七回戦の方」

「…雄二、私は何度でも言う。私と付き合って」

「…悪いが翔子、もう少し考えさせてくれないか。あと少して、答えが出そうなんだ」

「…そう。わかった」

霧島さんが同性愛者だって噂の理由は雄二だったのか。雄二、君が答えを出せるように祈っておくよ

「それでは、これでAクラスとFクラスの試召戦争を終了します」

高橋先生はそう伝えると、Aクラスを出ていった

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

突然、僕たちFクラス陣営から西村先生の声が聞こえてきた

「西村先生、どうされたんですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明しようと思つてな」

うん？我がFクラス？

「おめでとう。お前たちは戦争に負けたおかげで、上白沢先生から俺に担任が変わり、上白沢先生は副担任に代わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強ができるぞ」

『なにい!?!』

クラスの男子生徒全員が悲鳴を上げる

「いいか。確にお前たちはよくやった。Fクラスがここまでやるなんて正直思わなかった

だが、お前たちの学力はまだ足りない。だから明日から授業とは別に補習の時間を二時間ほど設けてやろう

だが、科目の点数によっては補習を免除してやつてもいい。お前たち、頑張れよ」

雄二の説得で心を入れ替えた（？）とはいえ、Fクラスの生徒からしたら地獄の宣言だろう。点数によっては補習免除つてことが少しもの救いだらう

試召戦争が終わり、Aクラスの教室にはFクラス生徒の絶望の音が響き渡った

「ねえ、妹紅」

「?どうした、明久?」

「::やっぱり、このクラスは馬鹿ばかりだね」

「:::だなぁ」

試召戦争によって大変な期間だったが、かなり楽しかったな
僕は改めてそう思うのだった

キヤラクター設定②

十六夜咲夜

所属

Fクラス

容姿

原作と同じ

点数

Aクラスレベル

得意科目

家庭科

苦手科目

現代国語、現代社会、情報

咲夜は得意科目というよりも、苦手科目以外はほぼ同じ点数で、その中でも家庭科が突出しているのです。得意科目は家庭科のみ

召喚獣の容姿

メイド姿の咲夜をそのままデフォルメした感じ

ナイフ

腕輪

『時間停止』

腕輪詳細

自分の召喚獣以外の同じ召喚フィールド内の召喚獣、召喚された武器の時間を止める時間を止める前に触れていたものや召喚獣、停止中に複製した武器の時間は止まらず、手を離れたら時間が止まる

消費点数は、一秒につき一点。ただし、フィールド内の召喚獣が増えれば増えるほど、点数消費が増える（計算式でいえば、フィールド内の召喚獣×秒÷消費点数）

設定

幻想郷にある『紅魔館』でメイド長をしている

明久とは、紅霧異変で敵として初めて会う

明久に惚れているが、明久にあまり無理強いをしたくないのと、紅魔館でのことを優先していることで、あまり言い出せない

文月学園へ入学の話が八雲紫から来たときは迷ったが、レミリアが「行ってきた外の世界について学んできなさい」と言ったことがきっかけで入学を決意する

ただ、その恩もあるおかげで、レミリアの我が儘を余計断りにくくなり、学校よりもレミリアの我が儘を優先している（その結果Fクラス入り）

メイドということを隠しているわけではないが、日本でメイドは一般的ではないので、出来るだけ口調を崩すように言われた結果、少し口調が迷子になることがある

能力

『時間を操る程度の能力』

文字通り、時間を操ることができる。

時間を止めて移動する、時間の流れを遅くして超高速で動く、時間を進めて物質を変化する（ジューズを酒にする等）、時間と密接に関係する空間も操作でき、紅魔館の内装などは咲夜の能力によって拡張されている

ただし、壊れたものを元に戻したり、他人を未来に送るようなことはできない

蓬莱山輝夜

所属

Aクラス

容姿

原作と同じ

点数

Aクラスレベル

得意科目

全体的に同じなので突出している物は特にない

苦手科目

化学、現代国語、現代社会、情報

召喚獣の容姿

幻想郷での輝夜をそのままデフォルメした感じ

蓬莱の玉の枝を持っている（それで殴るのか？）

蓬莱の玉の枝からは弾丸が出る（もしかしたら蓬莱の弾の枝なのかもしれない）

腕輪

『難題』

腕輪詳細

点数を消費することによって、相手を妨害する物体が現れる

点数消費はランダムで、消費点数によって物体が変化する

また、その物体が出ている間、相手は点数が少しずつ減る（物質によって減る点数は

変わる)

設定

迷いの竹林にある『永遠亭』に住むお姫様

その正体は『かぐや姫』本人で、月に住んでいるころ日常に興味を持ち、『蓬莱の薬』を飲むことによつて、罪人として月から追放された

つまりは宇宙人で、稀に常識では考えられないような行動をする（参照『宣戦布告と乱入と特殊ルール』）

明久との出会いは、永夜異変の際に敵として知り合い、後に妹紅とも知り合いだろ言うことが判明する

妹紅とは殺しあうほど仲がいいと自称している

文月学園入学のきっかけは、面白そうだから

また、本来幻想郷から出ると、月の使者に見つかり月へ連れ戻そうと月の使者がやってくるのだが、地上の穢れの影響をかなり受けていることと、八雲紫が『博麗大結界』と似たような性質を持つお守りを輝夜に渡しているため、見つかる心配はあまりない

能力

『永遠と須臾を操る程度の能力』

永遠とは不変であり、未来永劫全ての変化を拒絶する。永遠を持ったものはいつまで

も変わる事が無く、干渉もされない

須臾とは、認識出来ない程の僅かな時間の事。言葉としては10000兆分の1であることを示す数の単位だが、この場合では認識不能の時間の最小単位

輝夜はこの二つを操ることができ、ある意味で咲夜と似た能力の持ち主である

アリス・マーガトロイド

所属

Aクラス

容姿

原作と同じ

点数

Aクラスレベル

得意科目

数学、科学、生物、家庭科（ただし裁縫関係に特化している）

苦手科目

現代国語、現代社会、情報

召喚獣の容姿

幻想郷でのアリスをそのままデフォルメした感じ

上海人形を操る

腕輪

『人形変化』

腕輪詳細

武器の人形を違う人形に変化させることができる

消費点数は100点。人形を複製する場合、変化している人形と同じものが増え、複数の人形が存在する状態で腕輪を使うと、すべての人形が変化する

ある意味明久が『模写』によってコピーできない腕輪

設定

幻想郷にある『魔法の森』に住む魔法使い

魔理沙が人間の里で知り合った明久をアリスの家に連れてきて紹介したのが出合い
文月学園入学のきっかけは、外の世界に興味があったから

どちらかというとき常識人にカウントされ、永琳にある意味での輝夜の監視を頼まれて
いる

能力

『主に魔法を扱う程度の能力』

『人形を操る程度の能力』

文字通り、魔法を操ることができる。本人が人形に拘っているが、人形に拘らなければかなり強力な魔法を使うことができるらしい（魔理沙談）

2章 清涼祭編

準備と試着と見える影

明久 side e

散っていた桜も姿を消し、新緑が芽生え始めたこの時期：僕達が通う文月学園は新学期最初の学校行事である学園祭：通称『清涼祭』の準備が始まっていた

お化け屋敷のためにクラスの改造を行うクラス、料理のために調理器具を手配するクラスなど、学園祭準備の為に ロングホームルーム H R の時間は、どの教室を見ても活気があふれている

そんな中、我々がFクラスはAクラス教室で、Aクラスとの合同出店のための準備を始めていた

「さて、お前たち。Aクラスとの戦争が終わった後で行ったことは覚えてるな？あのことは一時的にやるんじゃない、継続的にやるのが大切だ。モテたいなら、彼女が作りたいなら、一生懸命頑張るんだ。そして、利益もAクラスとの分配が決まっている。そのクラス利益を使って、設備をよくすることを学園長に交渉する予定だ！だからお前た

ち、働けよ！」

『オオオー！』

雄二のおかげで、Fクラスのモチベーションも特に低下することなく、準備も順調に進んでいた

ちなみに、AクラスとFクラスの出店は、Aクラスからの案により「メイド&amp;執事喫茶『ご主人様とお呼び！』」に決まっている。Aクラスの人には悪いけど、このネーミングはどうなのだろうか：

ちなみに、担当の配分だが、僕と咲夜はホールも厨房も両方やることになっており、両方のトップにされている。こんなわけのわからない担当配分、絶対輝夜のせいだ

とりあえず、責任者として僕と咲夜はメニューの調整をしていた

「うーん、こんな感じかな？」

「メニューの組み合わせも、このくらいでいいでしょう」

それもかなり終盤に来ているのだが

「明久、十六夜ちよつといいか？」

「雄二、どうしたの？」

雄二が僕たちを呼ぶなんてどうしたのだろう

「康太が衣装の準備ができたから、一度試着してほしいらしい。違和感がないか確かめたいそうだ」

なるほど、そういうことか

「わかったよ。その衣装はどこに？」

「その更衣室に置いてあるそうだ。試着したら一回ここに出てきてくれ」

「了解、行こう、咲夜」

「わかりました」

僕と咲夜は、作業していた場所を離れて、それぞれの更衣室へ向かった

数分後

「雄二、康太これでいいかな？」

「私も準備できました」

僕と咲夜はほぼ同じタイミングで着替え終わり、雄二に声をかける

「おお、準備できたか……って、十六夜がメイドだということは知ってたが、こう見るとクルスの男女が一人ずつメイド服と執事服なのに、なんと……空間的な違和感が全く

ないな」

「……………（コクコク）」

どうやら、何も問題はなかったようだ

「そう、それならよかったや。そうだ雄二、メニューの確認をしといてもらってもいいかな？」

「わかった、それは任せろ

そうだ、明久。放課後、学園長のところに設備の交渉に行くから、藤原と一緒に放課後待っててくれ」

「わかったよ」

雄二はそう返すと、僕の元を離れる

それにしてもさすが雄二だ。うまく統率がとれている

そのおかげで、今のところAクラスとFクラスの間の特に問題も起きていない

それにしても、学園長室か。ちようどいいし、スペルカードルールに関して詳しく聞いておこう

「あら、明久。なかなか似合う格好をしてるじゃない」

「ほんとだ。こういうのも見れるなら、この出店は既に成功だな」

ふいに話しかけてきたのは、輝夜と妹紅だった

この二人も、去年は喧嘩が多かったけど、学校に通い始めたおかげか、学校での喧嘩は減ってきた（たまに煽りがヒートアップして喧嘩になったりするが）

「そういうえば、妹紅はメイド服を着るの？」

「いや、執事服にする。そうするように坂本と土屋には頼んできた」

「そうなのか。妹紅がスカートとか、そういうのを身につけないのはわかっていただけ、すでに手をまわしていたのか」

「あら、明久は妹紅のメイド服姿を見たかったの？」

「いや、妹紅は嫌がるだろうから、どうするのかなーと想着って」

「そういうことね」

流石に、本人が嫌がってるのを無理強いはできない

「そうだ、雄二が放課後に学園長のところに行くから待っててほしいって言ってたよ」

「坂本が？わかった」

輝夜、私たちはあっちの作業に行くぞ」

「そう言いながら妹紅は別の場所へと移動していった」

「そろそろこれは脱いでもいいのかな…？」

「どうでしょう…坂本君も土屋君も何も言っていなかったですし…着替えてもいいんじゃないですか？」

「よし、そうしようか」

「咲夜は見慣れてるけど…明久がそんな恰好をするなんて、珍しいじゃない」

咲夜と着替えるか着替えないかを話し終えたところで、また声をかけられた

声の主はアリスだった

「採寸…というよりも、見た目に違和感がないかのテスト試着をしてほしいと言われたからね」

「そう、それにしても土屋君、裁縫スキルがすごいわね。私もいつしよに裁縫作業をしてたけど、かなり早かったわ」

そういうえば、アリスは趣味の人形作りを生かして衣装製作チームに居るんだった

康太の裁縫スキルを見て驚いたみたいだけど、アリスが驚いたのだからよっぽどのものなのだろう

「康太って行動力が若干常人の斜めを言ってるからね…」

「ま、そんなことを言ったら、私達は常人に入るのかしらね？」

僕の言葉に、アリスは笑いながらそう返してくる

確かにそうだ

「確かにね」

「とりあえず…それ、似合ってるわよ、明久。私はまだ作業があるから、戻るわ」

「ありがとう、アリス」

僕の返事を聞いたアリスは、元の作業場に戻っていった

その後は特に何もなくて一日が過ぎていき、放課後…

僕と妹紅と雄二は、学園長室前に来ていた

『……賞品の……として隠し……』

『……(´)そ……勝手に……如月ハイランドに……』

扉の向こうからは、誰かが言い争っている声が聞こえた

賞品？如月ハイランド？何の話だろう

「雄二、中でだれか話してるみたいだけどどうする？」

「そうか、だったら無駄足にならなくて済んだな」

そういうと、雄二はノックをして、返事を待たずに学園長室の中に入っていった

いや、何してるのさ雄二

「ちよっ、坂本!？」

妹紅もさすがにその行動は読めなかったようだ

というか、今から交渉しに行く人に対しての行動か…？

「失礼なガキだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

学園長もあきれ顔だ

「雄二コイツがすみません……」

とりあえず謝っておこう

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません」

……まさか、貴女の差し金ですか？」

眼鏡をいじりながら学園長を睨み付けたのは教頭の竹原先生だ。この人は少し怪しい噂も多く、僕はあまり好きじゃない

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか、学園長は隠し事がお得意のようですから」

どうやらさつき言い合ってたのは僕たちの前ではできないような話で、竹原先生も学園長もお互いに牽制しあっているようだ

「さつきから言ってるように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそう言うことにしておきましょう」

そう告げると、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送り

「それでは、この場合は失礼させていただきます」

学園長室を出て行つた。どうしたのだろうか、何かを確認したようだったけど：

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

竹原先生との会話を中断されたことを気にする様子もなく、僕らに話を振る学園長

「本日は、学園長にお話があつて来ました」

学園長の前に立ち、雄二が話を切り出す。以外にも敬語を使つてる

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に聞きな

……と、普段なら言つているところだが、気が向いたから話くらいなら聞いてやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

学園長は追いつ返すのかと思いきや、意外にも話を聞くといい選択肢を取つてきた。意外だ

「Fクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで何よりだね」

「今のFクラスの教室は、壁は穴だらけ、窓もひび割れており、畳に関しては腐っている。

それだけじゃなく、黒板もボロボロでほかの設備も今にも壊れそうなものばかりです」
「…なんだって?」

うん? それは予想してない反応だ

「このままでは、Fクラスの生徒は体調を崩してしまう恐れがあるので、設備の改善、もしくは勝手に設備を改善することを要求しに来ました」

「坂本、アンタ今、Fクラスの設備では体調を崩しかねないといったね? 写真かなにかはあるかい?」

「これです」

「これがFクラスなのかい?…竹原の奴、こんな設備を用意していたのかい」

雄二が写真を見せると、学園長は信じられないといった顔になる

「わかった。学園からある程度の支援をしようじゃないか。だが、支援するのは畳、壁、窓、黒板、教卓だけだよ。それ以外は、あんたたちのクラスの売り上げを使いな」

「ありがとうございませす!」

意外にも、あっさりと要求が通った。何か学園長は企んでいるのだろうか

「ただし、こちらからも条件があるよ」

「…条件?」

「なに、簡単なことだ。ちよつとそこの二人を借りただけさ」

そうやって、学園長は僕と妹紅に目を向ける

「…それいっつらは俺たちのクラスが出店するにあたっての重要な戦力だ。特に何も不利なことがないならいいだろう」

「それなら交渉成立だよ。要件はその二人に直接言うから、坂本は下がりな」

「わかりました。またな、明久に藤原」

「あ、うん。じゃあね」

「またな」

雄二は学園長の言葉に対して、素直に引き下がる

「で、あんたたちに頼みたいことだが、清涼祭で行われる召喚大会は知ってるね？」

「はい。前回の☒試召戦争でのスペルカードルールが楽しかったので、妹紅と二人でエントリーをしています」

「そうかい、それなら話は早い。その大会の賞品である『如月ハイランド プレオープン プレミアムチケット』によからぬ噂を耳にしてね、出来れば回収したいのさ」

『如月ハイランド』確か、如月グループが経営するオープン間近遊園地の名前だった気がする

それが景品に出るということは、如月グループとの正式な契約だし、覆せないということだろう

「そのチケットが何か？」

「どうやら如月グループは如月ハイランドにジnkクスを作ろうとしているようなんだよ
『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

ふむ…：そういう噂が悪い噂として流れる。そしてプレミアムチケットの回収…：ということは

「もしかして、プレミアムチケットを使って行つたペアを強引にでも結婚させて、外には『ここに来たことがきつかけで結婚出来た』みたいなお話を流すっていうことですか？」
「吉井は頭の回転が速いと聞いていたが、まさかここまでとはね。まあ、大体その通りだ。だからそれを阻止したいんだよ」

なるほどね…

「わかりました。そういうことであれば、協力します。いいよね、妹紅」

「そうだな私も、協力します」

「そうかい。ありがとう」

つと、聞きたいことが色々あるんだつた

「あと、これは別件なんですけど、スペルカードルールってどのくらいのことができるのか気になって、それを聞こうと思つていたんですけど…」

「ほお？何が聞きたいんだい？」

「スペルカードは召喚獣と召喚者に関係のあるもの以外は使えない…つて項目、僕の召喚獣は武器が木刀なんですけど、点数を消費してビームを撃つ…みたいなことはできませんですか？」

「そういうことかい。そのくらいだったら可能だよ。点数を消費して弾にする。それがつながつてないかつながっているかの違いくらいにしかないからねえ」

なるほど、出来るのか。これで戦いの幅がある程度変わる。前回は剣を主軸にした戦いって考えに囚われたおかげで、少し戦いにくかったけど、これならいろいろできそう
だ

「私からもいいですか？実はこういうのほ考えていて、こういうのは可能かなって思っ
て…」

そう言つて妹紅は、『パゼストバイフェニックス』についての大雑把な説明を始める
「なるほど、腕輪の復活で召喚獣そのものを復活させるのではなく、憑依という形で味方の召喚獣に装備させる…時間が経てば憑依は解けて召喚獣が復活する…面白いじゃないかい。これは当日までにできるように調整しておくから、遠慮なく使いな」

「ありがとうございます！」

どうやら、現時点では使えないけど、学園長が使えるように調整してくれるようだ
「それでは、失礼しました！」

「失礼しました！」

「ああ。いい結果を期待しているよ」

こうして、僕と妹紅は学園長室を出て行く

波乱だらけの清涼祭が、まもなく幕を開ける

開幕と初戦と営業妨害

明久 side

「Fクラス代表の坂本雄二だ。AクラスとFクラスが手を取り合うことで、これだけの準備が整った

あとは開始のアナウンスを待つだけだ。この清涼祭を経て、お互いのクラスの友好関係が、さらにいいものになればいいと、俺は思っている。目指すは売り上げ学年一位、張り切っていくぞー！」

『おおおーー!!』

清涼祭初日の朝、雄二と霧島さんの号令によつて、僕達のお店はもうすぐ開店というところまで来ていた

僕達のクラスは「メイド& amp ;執事喫茶『ご主人様とお呼び!』」、飲食店だ。Aクラスの協力もあつてクラスは広いし、二クラス分の人員もあるからシフトもある程度

自由になっている

姫路さんが料理を作ろうとする事故もあったが、何とか説得してここまで来ることができた

「さて、僕と妹紅の初戦は開始直後だったよね？」

「うん、確かそうだった。坂本、悪いけど私と明久は召喚大会の一回戦があるから、抜ける」

雄二が近くに來たこともあって、妹紅が雄二を呼び止める

「ん？お前たちも大会に出るのか。わかったが、明久の担当の時間は最初から…とかほほ休みなしじゃなかったか？」

「そういえばそうだ。僕は厨房の責任者とされているのはいいけど、なぜかほほフルでシフトが組まれてた。ブラック企業もいいところだ」

「…咲夜、お願い！」

「…はあ、わかりました。いつかこの貸しは返してもらいますよ！」

「ありがとう！よし、妹紅行こう！」

「わかった…って、明久着替えないのか!？」

妹紅に言われて気が付く。僕はなぜか執事服を着ていたことに。というか、いきなり召喚大会があるのに何で着替えたんだろう

「うーん……いいんじゃないかな？初戦は対戦相手にしか見られないだろうし……」

一般公開は四回戦からだから、別にいいだろう

「ん？明久は執事服のまま出るのか？」

少し悩んでいると、雄二から声をかけられた

「うん、今から着替えるのが面倒臭いからそのつもりだよ」

「だったら頼みがあるんだが、四回戦以降もその服のまままで出場して、ウチの宣伝をしてくれないか？実際に衣装を着てるやつがいると、宣伝の効果は大きいだろう」

なるほど、確かにそうかもしれない

「任せといて！」

「話は終わったか？明久、急ごう」

雄二次とも話し終えた僕は、妹紅と共に一回戦のステージへと向かった

少年少女移動中……

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される

「三回戦までは一般公開はありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会人を務めるのは数学の木内先生きのうち

つまり、科目は数学だ

「頑張ろうね、律子」

「うん」

対戦相手の女子二人は頷きあう

どこかで見たような気がするけど……どこだっけ

「では、召喚してください！」

「試験サ召喚モン！」

相手二人がおなじみとなった声を上げると、魔法陣が足元に表れて、召喚者をデフォルトメしたような召喚獣が現れる

Bクラス 岩下律子 & 菊入真由美

数学 179点 & 163点

向こうは二人とも似たような装備の召喚獣だ。西洋風の鎧と剣を装備している。姫

路さんの装備の普通バージョンといったところか

「さて、僕らも召喚しようか」

「そうだね」

「サモ試獣召喚！」

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅

数学 421点 & 311点

「なっ!?二人とも高得点者!」

「Fクラスでしょ!?嘘ツ!」

相手は点数を見て随分と驚いているようだ。まあ、何も知らない人がFクラス相手に取る反応なんてこんなものだろう

「と、とにかく行くわよ!」

「受けてみなさい!私たちの合体スペルカード!」

「」合技『ビギナーズシユーティング』」

相手が二人でスペルを宣言する。そういえば、召喚大会では少しルールが変わったん

だっけ

相手二人を中心として、大量の弾幕が作られる。しかし、スペルの名前も『初心者達のシューティング』だからか、そこそこスペルカードルールになれている僕たちにとつて、回避するのは簡単だった

「全部避けられてる!」

「そんな…!」

「悪いけど、すぐに終わらせるよ! 魔理沙直伝…恋符『マスタースパーク』!!」

木刀を相手の召喚獣に向けて構え、木刀の先端から極太のレーザービームと、その周りを漂う星状の弾幕を発生させた

木刀で扱うようなスペルじゃないだろうけど、幽香も傘の先端からビームを出してるし、大丈夫だろう()

「ちよつ、何よそれ…!」

「は、早く避けないと!!」

『ドオオン!』

僕の放ったマスタースパークは爆発を起こし、辺りに煙が舞う

Bクラス 岩下律子 & 菊入真由美
数学 0点 & 0点

煙が晴れて表示されていたのは、相手の召喚獣の0点という表示だった

「そ…そんな…」

「私たちが…負けた…」

「勝者、吉井・藤原ペア」

点数を確認した先生が僕たちの名を告げる。とりあえず、一回戦は僕達の勝ちだ！

「明久、私何もしてないぞ」

妹紅が少し不服そうに僕に声をかけた

「ごめんごめん。マスタースパークがどのくらいのものか試してみたくて…消費点数を150点くらいにしてみましたけど、まさかあんなに高威力になるとは…」

「ま、いいか。相手もあまり操作に慣れてなさそうだったし。次は私がやる！」

「うん、頼りにしてるよ」

「さて、教室に戻ろうか」

妹紅は次の戦いを楽しみそうなイントネーションで、そう言った。クラスの方は大丈

夫かな？

少年少女移動中…

「営業妨害？」

教室に戻った僕達が最初に説明されたのは、クラスに営業妨害が現れたとのことだった

「ああ、実は…」

クラスに戻った僕達に、雄二は説明を始めた

明久side

時は遡り数分前…

雄二side

一旦休憩をしていると、控え室へ秀吉が困った様子で俺の方へ来た

「雄二、急いでホールに来てくれぬか？」

「どうした秀吉？ 厄介事か？」

AクラスはFクラスと合同で出店するということで、少し広めのスペースで出店をしているため、ホールをAホールとBホールの半分に区切り（それぞれが厨房を中心として別々の部屋として配置されているため、外から見たら同じ店が二つあるようにも見える）、翔子と明久がそれぞれの責任者、そして俺は全体的な責任者という分け方をしている。ちなみに、明久がいないときの責任者は秀吉で、何かあつたら俺のところに来るよ
うに言つてある

「Bホールで営業妨害が居ての。少々厄介なのじゃ」

「営業妨害だあ？ たかだか学園祭の出店程度で営業妨害をするなんて、暇な奴もいるもんだな

で、相手は誰だ？」

「うちの学校の三年じゃな」

よりによつて三年か。なんてバカなんだ全く

「とりあえず案内してくれ。俺が対応する

秀吉は営業妨害の客の記録をしておいてくれ」

「こつちじゃ！」

秀吉に案内されてBホールに入ると、大声が聞こえてきた。アレが妨害の客か

「まったく、俺たちはずいぶん前に注文したのに、全然来ねえし」

「いざ来たと思えばくそ不味いしな！」

かなりうるさいな。とにかく、なんとかするか

「責任者はいないのか！このクラスの代表ゴベツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でもございましたか？」

とりあえず坊主頭を殴り飛ばす

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」

殴っていない方のソフトモヒカンは困惑したように返事をするが、どうでもいい

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒瀆ぼうとくですか？」

「こんなこと言つとけば大丈夫だろう」

「ふ、ふざけんよこの野郎……！何が交渉術ふぎやあつ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だ

ぞー！」

「ちよ、ちよつと待てや常村！お前、俺を売ろうというのか！」

うるさい二人組だ

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

「い、いや、もう十分だ。退散させてもらう」

モヒカンが撤退を選ぶが、関係ないな

「そうか、それなら——」

そう言いながら俺は坊主頭の腰を抱え込む

「おいっ！俺もう何もしてないよな!? どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「——これにて交渉は終了だ」

「お、覚えてろよっ！」

倒れた相棒を抱えて走り去っていくモヒカン。これで一つの問題は去った

後はこの場の対応だな

「見苦しい場をお見せして申し訳ありませんでした。お詫びとして、ただいまご来店されている方々は全商品を二割引きで提供させていただきます」

『あんたのおかげですつきりしたよ』

『こんなにおいしいものを不味いなんて、おかしいんじゃないの?』

『料理もそんなに待たずに来たよな』

どうやら、特に問題ないようだ

「ふう。こんなところか」

そう呟いて、俺は控え室に戻っていった

雄二 side out

時は戻り現在

明久 side

「と、言うわけだ」

うん、相変わらず雄二らしいやり方だけど、何とかなったなら問題ないね

「さて、二回戦が始まるまで、僕達も働きますかね！」

「そうだな。私はホールに行って誰かと交代してくるよ」

そう言っつて、僕と妹紅は仕事へと向かった

来店と対応と次の時間

明久 side

雄二から営業妨害の話聞いて、僕と妹紅はホールで仕事をしていた

僕は最初、厨房の助太刀に行こうとしたのだが、咲夜から「今は厨房に私とアリス、注文をまわしてくれている輝夜しかいません。つまり裏技が使えるので、明久はホールをお願いします」と断られた

つまり、咲夜とアリスが能力を使って厨房をあり得ない速度で回転させて、輝夜がホールから厨房、厨房からホールへのつなぎ役なのだろう

そして、ホールで仕事を始めて数分後：

来店が女性だということを確認して、挨拶を入れる

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「ホントに明久と妹紅がこういうことしてるのね」

「いや〜意外だぜ」

…なんだか聞いたことあるような声が聞こえたけど、気のせいだろうか（現実逃避）

そう思いながら、僕は顔を上げた

「…霊夢に魔理沙? どうしてここにいるの?」

「紫が今日だけは明久達の学園祭とやらに行っていていいと言っていたから、来てみたのよ」
「しかもやるのが執事っていうじゃないか。それなら行くしかないな! ってことだぜ」

…やっぱり紫か

「ハア…やっぱり八雲紫か…」

妹紅も少し呆れ顔だ

「あら、お客様にその表情はないんじゃない?」

僕は霊夢と魔理沙にしか目が行ってなかったけど、紫も一緒にいた。まあ、当然か
「まあいいか。お席にご案内します」

そう言っ僕と妹紅で案内を始める

「それにしても、なかなか繁盛してるじゃない。博麗神社でもやってくれない?」

いや、それは無理でしょ

「霊夢、それはあきらめろ。あんな神社に人は集まらないから損するだけだぜ」

魔理沙の言い方は言い方でだめだと思う

「こちらの席になります、メニューをどうぞ。お決まりになりましたらお呼びください」

そう言つて僕はその場を去ろうとした

「明久、少し話をしない?」

「いや、僕は仕事だ」

紫に呼び止められて失敗したが

「いいじゃない。こんな機会はないんだし」

「…まあいいか。妹紅は仕事をやってて」

「わかつた」

妹紅がその場を去つて、僕は話をはじめた

「話つて言つても特に自分から話すことはないんだろうし、僕から先に聞いてもいい?」

「あら、わかつてるじゃない」

いつもの少し胡散臭い顔で肯定する紫

うん、すごくむかつく

「霊夢と魔理沙意外に来たりするの?」

「それはないわ。貴方の友達、ここに連れて来たら面倒くさそうなもの」

否定できない。小鈴も阿求も、ここに来たらすごく面倒くさそうだ

…主に知識への欲求が

「紅魔郷や白玉楼、永遠亭の関係者も少しね…」

「うん、皆には悪いけど少し否定できない…」

「というわけで、連れてきたのは霊夢と魔理沙だけよ」

人選的にはいい判断だと思う

「それで、どのくらいいるの？」

「とりあえず今日は一日居る予定よ。向こうは藍に任せてきたけど、一日くらいなら問題ないでしょう」

だろうと思つた

「それで、ご注文はお決まりですか？」

「そうね、明久のおごりで」

「いや何言ってるのさ」

本当に何言ってるのさ

「いや、私と魔理沙はここのお金持っていないわよ。紫が『明久におごってもらいましよ』って」

「ゆゝかゝりいゝ？」

まったく、こいつは何を言ってるのかな？

「ちゃんと返すから、今回は払っておいてちょうだい。いつも幻想郷でサポートしてあげているでしょうっ？」

うぐつ…それを出品されると言い返せない

「…わかったよ。好きなものを頼みなよ」

「やったー！だったら私は『カレーライス』、『ふわふわシフォンケーキ』、『シュークリーム』、『緑茶』…あとはまた後で頼むわ！料理は咲夜か明久でお願い」

「私はこの『キノコグラタン』、『ふわふわシフォンケーキ』、シュークリーム、『緑茶』にするぜ！調理するのは咲夜か明久で頼む」

「私は『シュークリーム』と『緑茶』にするわ。料理は言うまでもないわね？」

「『カレーライス』が一つ、『キノコグラタン』が一つ、『ふわふわシフォンケーキ』が二つ、『シュークリーム』が三つ、『緑茶』が三つ、調理担当は咲夜でよろしかったでしょうか？」

霊夢も魔理沙も、注文に容赦がないな…

「それでいいわ」

「では、少々お待ちください」

ふう、ようやく三人から解放された

僕はとりあえず厨房に向かう。とりあえず輝夜に事情を伝えておこう。あの三人のことだ、運ぶのが僕じゃなかったら異様な雰囲気を出してそれこそ営業妨害だと思われる（ウエイトレスを一つの場所に固定している時点で営業妨害のようなものだが）

「輝夜ー、注文ー」

「明久がわざわざ声を出してまで注文を言いに来るなんて、どうしたの?」

僕の声を聞き、瞬時に輝夜が現れる。こいつ、僕の声だからって目の前に突然現れるのは驚くからやめてほしい

「はいこれ。霊夢と魔理沙とスキマ妖怪」

「…普通の魔法使いはともかく、なんで博麗の巫女と妖怪の賢者が来てるのよ」

「そんなの僕が知りたいよ。とりあえず、この三人は名指しで僕か咲夜って指定してきたからそれを伝えようと思って」

「まあ、わかったわ。あの三人のことだから、『なんで明久が運んでこないんだー』とか言いそうだと思っただってことね。出来たら呼ぶわ」

理解が早くて助かるよ

「じゃあ、よろしく!僕は別のお客様の対応をしてくるよ!」

そう伝えて僕はその場を離れようとする

「あ、お茶だけはすぐ用意できるから、それだけ先に出してきてくれる?」

そう言いながら輝夜がお茶を渡してきた

「早っ…」

僕はお茶を受け取り、その場を離れた

数分後

「明久、出来たわよ」

僕が注文を置いていこうとすると、輝夜に声をかけられた。どうやら霊夢たちの注文ができたようだ

「わかった、持っていくよ」

輝夜から霊夢たちの注文の品を受け取り、商品を運ぶ

「お待たせしました、こちら『カレーライス』、『キノコグラタン』、『ふわふわシフォンケーキ』二つ、『シュークリーム』三つになります」

「来たわね！待ちくたびれたわ！」

「明久ー二回戦の時間だぞー」

料理を出すのと同時に、妹紅が僕のところを駆け寄ってくる

「あ、もうそんな時間？悪いね三人とも、ゆっくりしていつてー！」

「ん？今から何かあるのか？」

「ああ、三人は知らないよね。僕達、召喚大会っていうのに出てるんだ。この学校の独自システムを使った大会！しかも、そのルールに弾幕ごっこが使われてね…仕向けたの

は永琳みただけど」

魔理沙にそう説明した

「あの宇宙人…何やってるのよ…私たちのルールを外に持ち出すなんて」

「へえ、私たちも観戦できるのか？」

霊夢は少し怒り気味に、魔理沙は面白そう！といった感じで反応する

「四回戦からは一般公開があるみたいだから、それまで待つてよ。ちゃんと勝つてくるから」

「おう！応援してるぜ！ま、明久と妹紅がペアを組んでるなら、負けることなんてないだろうけどな！」

「うん、頑張ってくるよ！それと紫、これが僕の財布。問題だけは起こさないでよね？」

「わかってるわよ」
そして僕と妹紅は召喚大会の会場へ向かった

卑怯と彗星と女の子

明久 side

僕と妹紅は召喚大会二回戦のために、ステージに来ていた

「さて、対戦相手は予想通りだね」

「ま、BクラスとCクラスの代表が簡単に負けるわけないよな」

対戦相手はBクラス代表の根本君と、Cクラス代表の小山さんだ

「よ、吉井に藤原!?!お前らが相手か!」

「ちよつ、あの二人かなり点数高かったわよね!?!」

かなり警戒されてるみたいだ。当然だろう、根本君はBクラス戦でぼこぼこに、小山

さんはその決着を見ていたのだから

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

今回の立会人は、英語担当の遠藤先生だ。英語は可もなく不可もなくって点数だったけど……何とかなるだろう

『試^サ獣^モ召喚^シ！』

この場に居る四人の生徒の召喚獣が出現する

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Bクラス 根本恭二 & Cクラス
 小山優香

英語W 269点 & 233点 VS

199点 & 165点

点数差は太太100点くらいか。これくらいなら何とかなるだろう

「先手必勝だ！卑劣『卑怯者の戦術』」

根本君のスペルカードは、自らを卑怯だというような名前だ

そんなスペルはまるでレーザー状の弾幕が鳥籠のように僕達の召喚獣を囲み、レーザーの隙間を埋めるように小さな弾幕が中へと飛んでくる

回避が大きすぎるとレーザーに当たり、動かないと小さな弾幕にやられるということ
 みたいだ

尚且つ、小さな弾幕も普通の召喚獣のスピードだと、間をすり抜けて外に出るのは難

しそうだ

「というか、このレーザー状の弾幕…どうやって作ってるんだろう

「さて、なかなか回避しにくいけど、どうしようかな」

「今回は腕輪も発動してないし、下手に動くと負けかねないよねえ」

僕と妹紅は召喚獣に回避行動をとらせながら、作戦を考える

「随分と余裕そうね！はいきゆう排球『弾丸サーブ』！」

小山さんがスペルカードを宣言すると、少し大きめの弾幕がすごい早さで飛んでくる

スペルカードの名前に、バレーボールのサーブのようだ

「むう、多少の被弾は覚悟するしかないね！妹紅、僕の召喚獣につかまって！」

「わかった！」

妹紅の召喚獣が僕の召喚獣にしがみつくのを確認すると、木刀を召喚獣の後方に構

え、スペルカードを宣言する

「タイミングは…今!!さあ、ぶっ飛ばすよ！魔理沙直伝…すいせい彗星『ブレイジングスター』!!」

木刀の先端からマスタースパークを後方へと噴出し、ものすごい勢いで進んでいく。

この移動速度は並みの召喚獣じゃ出せないような速さだ

そしてこのブレイジングスターは突進での物理攻撃がメインなので、消費点数はかな

り控えめにしてある

「ぐっ…でも、今だよ、妹紅！」

多少被弾はしたけど、このくらいは想定内だ

「わかってる！ さあ、あんたたちにこの弾幕が避けれるかな！ 蓬菜^{ほうらい}、

『瑞江浦嶋子と五色の瑞亀』
みずのえのうらしまことしきのずいき

妹紅がスペルを宣言すると、妹紅を中心として亀の甲羅を描くように五色の弾幕が放たれる

「なんだよこれ！ どうやって避けるんだ！」

「弾が多すぎるでしょ！」

根本君も小山さんも弾の多さに動揺を隠しきれてない

そこで僕が追撃をかける

「これで終わりだよ！ 恋符『マスタースパーク』！」

相手が妹紅の弾幕を回避することに必死になっているところに、僕は一回戦でも使ったスペルカードを発動する

「まずいつ、回避をつ！ しまった！」

「この二人…ほんとにでたらめじゃないっ！」

Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山優香

英語W

0点

&

0点

根本君がマスタースパークを回避しようとして妹紅の弾幕に、小山さんは妹紅の弾幕に気を取られすぎてマスタースパークに被弾し、点数が0になる。これで僕たちの勝利だ

「勝者、吉井・藤原ペア」

根本君たちの点数を確認した先生が僕たちの勝利を告げた

「やったね妹紅！」

「最初の相手の攻撃は驚いたけど、何とかなったな」

「じゃ、教室に戻ろうか」

「だな」

勝利のハイタッチをした僕と妹紅は、ステージを降りて教室へ戻った

少年少女移動中…

「ふう、ただいまー……って、なんだかお客さんが少くない？」

「ホントだ。なんだか少ないな」

教室に戻った第一印象は、なんだかお客さんが少ない。だった

なにかあつたのだろうか

「二人とも、戻ったようじゃの」

「秀吉、一体何があつたのさ。それに、雄二は？」

「むう…それがよくわからないのじゃ。雄二は少しトイレに行くと言っていたぞい」

「つてことは、外で何かが起きてるのかな？」

なにかあつたのだろうか

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビツ子』

『チビツ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「うん、そうみたいだね。それにしても妹紅、葉月って子の声、どこかで聞いたことない

？」

「確かにあるけど…どこだったかな…」

うーん…思い出せない

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

雄二の姿は見えるが、話し相手は小柄なのかあまり見えない

『えっと：優しいお兄さんと優しいお姉さんの二人組ですっ』

『それだけか？つて、家族じゃないのか？』

『はい…』

『そうか、このクラスに居るのは間違いないんだな？』

『はいですっ！いろんなクラスを見たけどどこにもいなくて、このクラスが最後です！』

名前がわからなくても相手を探してやろうという雄二の温かい気遣いが見える

『それで、優しいお兄さんと優しいお姉さんの二人組だったな？』

そこそこ限られる特徴だ

『うちのクラスでその組み合わせだと、もう一択だな。明久、藤原、お前たちに客だぞ』

『いや雄二、なんでその特徴で僕と妹紅なのさ！』

『そうだぞ坂本、私達にそんな小さな知り合いはいないぞ。人違いだろう』

雄二の思い込みも酷いものだ

『あつ！優しいお兄さんと優しいお姉さんだっ！』

小さな子が駆けてきて、僕達に飛びついてきた

『人違い、がどうした？』

『…人違いだと、いいなあ…』

「…そうだな」

はて、こんな小さな女の子、僕の知り合いにいただろうか
「お兄さんたち、覚えてないですか？」

女の子は、涙目になって僕たちの方を見つけてきた

「ま、待つてて！すぐに思い出すから！」

「そ、そうだ！少し待つててくれ！坂本、少し私を殴れ」

「いや、女子にそんな物騒なことができるか。焦りすぎだ」

どうやら僕も妹紅も少し焦りすぎたようだ

深呼吸をして女の子の顔をもう一度見る

この顔…この声…葉月…

「ああ！あの時のぬいぐるみの子か！」

「あ、そういえばそんなこともあったな」

「ぬいぐるみの子じゃないですっ！葉月ですっ！」

葉月ちゃんは思い出してもらったことが嬉しいのか、元気に訂正してきた

「そっか、葉月ちゃんか。元気にしてた？」

「はいですっ！」

「そうか。それで、私達がこの学校だって、よくわかったな？」

「お姉さんたちが着ていた制服がお姉ちゃんの制服と同じデザインでした！」
僕達の制服が葉月ちゃんのお姉さんと同じデザイン？

「あ、葉月、どうしてここに？」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

そうすると、島田さんがこつちに来て、葉月ちゃんに声をかける。島田さんが葉月ちゃんのお姉さんだったのか。確かに、よく見ると似てるような…

「吉井さん達は、葉月と知り合いなんですか？」

「うん。去年ちよつとね。まさか島田さんの妹だとは思わなかったけど…」

「とりあえず、明久も戻ってきたことだし、この客の少なさをどうにかしないと…さつき外に出てみたが、噂が出てるがその出所がわからん」

雄二は話を無理やり切り替えたけど、確かにそうだ。広い教室が二割ほどしか埋まっていないなんて、おかしすぎる

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？」

雄二は屈みこんで葉月ちゃんの目線に合わせる

「ここは対応が悪いしご飯は不味いから行かない方がいいって」

葉月ちゃんの言葉に驚いた。そんな話が…って、そんな話をするのはおそらく雄二が

言っていた営業妨害の人だけだろう

「ふむ…例の連中だろうな、丁度いい。休憩がてらその場所に行ってみるか。で、チビツ子その場所はどこだ？」

「えつと…隣の大きな教室でした！」

『お店的には同じお店じゃないか!!!』

僕達の声が重なった。ええ…なんで実質同じクラスで営業妨害をしてるんだ…っていうか、それで効果が出るんだ…

「…意外な場所だな。お前たちは休憩室でゆっくりしてくれ。迷惑な奴らは俺と明久で何とかしてくる」

「確かに…隣のクラスってAホールだから客としてはいる必要がないからね」

『わかった』

皆の了承を得てから、僕達はAホールへと向かった

迷惑と羞恥と鉄拳制裁

明久side

僕と雄二は、外での営業妨害の対応のためにAホールへ来ていた

「…雄二、もしかして妨害の客？」

雄二が来たことで、手の空いていた霧島さんがこっちにやってきた

「なんだ、知ってたのか？」

「…何度か注意したけど、何度も入店して同じことを叫んでいるから、そろそろ雄二を呼びに行こうとしていた」

どうやらAホールの方でも、かなり迷惑をかけていたようだ

「なるほどな、そいつらは今どこにいる？」

「…今はいない」

なるほど、既に移動済みだったか

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう、二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

と、話している途中で新規の客の声が聞こえてきた

『それにしても、この喫茶店はいいな!』

『そうだな。さつき行った隣のクラスは酷かったからな!』

『店員は暴力的だし、遅い不味い高いの三拍子がそろっていたからな!』

人の多い喫茶店の中央で、わざわざ大声で叫び合う。アレが噂の常夏コンビか

「…あの二人」

「そうだな…俺は顔が割れてるし、どうしたものかな」

迷惑客の対応を考える雄二、すると僕の方を見て、いたずらを考え付いた子供みたいな笑みを浮かべた

「なんだか嫌な予感がする…」

「翔子、メイド服の予備を貸してくれないか?これを明久に着せてあいつらを撃退する」

「…わかった。今、持ってくる」

「待った雄二!なんで僕がメイド服を着る必要があるんだ!」

嫌な予感がしたけど、なんでそうなるのさ!

「俺は顔が割れてるし、翔子は攻撃出来ないからな。メイド服を着てもらうのも、奴らに警戒されないようにだ」

「うぐっ…仕方ない、貸し一つだからね?」

そう言つて僕はメイド服を受け取つてその場を去つて着替えに行く
とりあえず目的は厨房だ

「輝夜ー、咲夜に用があるんだけど、入つてもいい?」

「明久じゃない。まあ、今はFクラス側があまり人が入つてないおかげで仕事は少ないから、いいわよ」

どうやら今は少し暇らしいから、すんなり通れた

「それで、用つてどうしたのよ。そんな大きな荷物を持つて」

「…笑わない?」

「内容によるわ」

うん、これは絶対に笑われる奴だ

「じゃあ絶対に言わない!」

「笑わないように善処するから、教えてくれない?その中にある『メイド服』のことも知りたいわあ〜」

…能力を悪用して僕のカバンの中を見たな?

「わかつたよ言うよ。実は…」

事情説明中…

「営業妨害の対処のために明久にメイド服を着せるなんて、考えるじゃない、貴方達の代表は」

「僕も雄二の頭の回転の速さは認めてるんだけどね」

たまにこんな作戦を立てるのは困る

「ま、とりあえず中に入って用を済ませてきなさい」

「引き留めたのは輝夜だったよね？」

一応突っ込みを入れて、僕は厨房の奥の方に入っていった

「アリスー、咲夜ー、ちよつといい？」

「どうしたの？こんなところまで」

「実はね…」

事情再度説明中…

僕はアリスと咲夜に輝夜にした説明と同じものをして、お願いも伝える

「なるほど、営業妨害の対応をそれを着てさせられるから着付けを私に」
「それで、見た目を整えるのを私にお願いしたいということね」

咲夜とアリスが続けて返事をする。二人とも理解してくれたようだ

「わかりました。そのままじつとしていてくださいてね」

そう言うと、咲夜の姿がブレる

次に咲夜の姿を認識した時には、僕は執事服からメイド服へと変わっていた

「着替えは終わりましたので、私は仕事に戻りますね。この服はどうでしょうか？」

「うーん…対応が終わったらここに戻ってくるから、ここに置いておいて」

「わかりました。それでは、後は頼みますよ、アリス」

「わかったわ。さ、明久そこに座ってじつとしててね？」

「わかったよ」

アリスに言われるままそこに置いてあった椅子に座り、僕のメイクが始まった

数分後…

「これでよしと、できたわよ（パシヤッ）」

アリスはそう言いながら、僕に鏡を向けてくる。ついでに写真も撮られた

「これが僕……完全に別人だね……って、何するのさアリス！」

「保存用よ。とりあえず行つてきなさい。貴方召喚大会にも出てるんでしよう？早くしないと、その格好で召喚大会に出る羽目になるわよ」

「さらつと流された。でも、この格好で召喚大会に行くのは嫌だし、とりあえず行こう
「あら、明久？似合ってるわよ」

「……男としてそういわれると複雑な気持ちだけどね」

雄二の元へ向かう途中で輝夜とすれ違った。弄られるとは思ってたけど、やっぱり……
輝夜にも事情を説明していたから、それ以上の追及がないのは助かった

「雄二ー終わったよー」

「おお、終わった……か……お前、明久か？」

「……別人に見える」

僕は背後から雄二に声をかけると、雄二と霧島さんが唖然とする。そんなにおかしかったのだろうか？

「まあいい。とりあえず、作戦を開始するぞ」

「了解」

あの常夏コンビ……必ず潰す

『俺達は普通に飯食つてただけなのにいきなり殴ってきたもんなん！』

『ありえないよな!』

あの二人、まだこんな話をしているのか。本当に迷惑を…

「お客様」

しずしずと歩き、このクラスのウエイトレスであるかのように声をかける

「なんだ?——へえ。こんなコもいたんだな」

「結構かわいいな」

なめるような視線が僕にまとわりつく。ものすごく気持ち悪い…

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか?」

「掃除? さっさと済ませてくれよ?」

二人が席から立ち上がる

「ありがとうございます。それでは——」

「ん?なんで俺に抱き着くんだけ?まさか俺に惚れて」

「くたばれええっ!」

「ごばああつ!」

バックドロップ成功。雄二の分と合わせてこの坊主頭は本日二度目の脳天痛打だ

それにしても、なんてことを言うんだコイツは!

「オイ!何をするんだ!」

チツ、まだ生きてたか。時間も惜しいし、応援を呼ぼう

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

「ちよつと待て！ バックドロップするためにあててきたのはソツチだろう——ぐぶあつ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治という大義名分を得て雄二が登場

「何を見ていたんだ!?! 明らかに被害者はこつちだろ！」

倒れている坊主頭に代わり、モヒカンが雄二に食って掛かる

「黙れ！ たった今、コイツはこのウエイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！ 俺の目は節穴ではないぞ！」

いや、完全に節穴だろう

「さて。痴漢行為の取り調べのため、ちよつと来てもらおうか。安心しろ。既に鉄人は呼んである」

指を鳴らしながらモヒカンに近づく雄二。鉄人まで呼んでいるとは、流石だ

「くっ！ 行くぞ夏川！」

状況を不利と見て、坊主頭を引きずって逃げるモヒカン

「あつ！ 待てつ無銭飲食！」

あいつら食い逃げしやがった!

「坂本に呼ばれてきてみたが、後輩の出店を妨害する上に無銭飲食とは、何をしているんだ貴様らあ!」

いいタイミングで鉄人登場

「さて、お前たちにはじつくりと話を聞こうか。坂本、お前も来い」

「わかりました。じゃ、あとは任せたぞ」

そう言つて常夏コンビを連行する鉄人と雄二。とりあえず、この場のアフターケアを考えないとね

「霧島さん、あとはお願いしていい? 僕、この後召喚大会が…」

「…わかった」

僕は急いで着替えようと厨房に戻ろうとする

「明久ー、そろそろ行かないと召喚大会に間に合わないぞー…つて、どうしたんだ、その格好?」

い タイミング悪く妹紅が来てしまった。それに、召喚大会までの時間もあまりないらしい

「ちよつといろいろあつてね…取り合えず着替えてきていい?」

「なにがあつたのかわからんが…着替える時間はないぞ! 今から行つてもぎりぎり間に

合うくらいだ……とにかく行くぞ！それに、次の試合まで観客はいないから見られるのは相手と先生だけだ！」

妹紅は僕の手首をつかんで、移動し始める。ぐっ……かなり力が強い……これはあきらめよう……

「わかった！せめて引つ張るのをやめて！あきらめるから！」

「わかった。その格好のことについても、ゆっくり聞かせてくれないか？」

「ステージに向かいながらね」

僕は妹紅に今までであった出来事を伝えながら、召喚大会のステージへと向かった

連携と接戦と星の魔砲

明久side

「さて、相手は誰かな」

僕と妹紅は召喚大会三回戦の為にステージに来ていた

「もしかしたらだけど、姫路と島田も私と同じタイミングで出ていったから、その二人かも…」

「えっ、クラスの人にはこの格好を見られたくなかったのに…」

僕は雄二に着せられたメイド服のままだから、出来ることなら他のクラスの人の方が良かった…」

「でも、あの二人なら物分り良さそうだし、変に別のクラスの人に見られるよりマシなんじゃ？」

あ、それは確かにそうだ

「あれ、藤原さんと…吉井君ですか？」

「あ、ほんとですね。それにしても、吉井君…その格好は…」

ゆったりとしてると、対戦相手側から聞き覚えのある声が聞こえてきた
やっぱり相手は姫路さんと島田さんのようだ

「お、やっぱり対戦相手は姫路と島田か。明久には触れないでやってくれ」

「わ、わかりました」

「わかりました」

少し気になったようだが、姫路さんと島田さんは何も聞かないでいてくれた。ありがとう、姫路さんと島田さん

「それでは、試験召喚大会三回戦を始めてください」

僕達の話がある程度終わったのを確認して、今回の試合の立会人の福原先生がアナウンスをする

三回戦は現代社会、僕も妹紅も苦手としている科目だ。今回の試合はかなりの山場になるだろう

『試験召喚！』

だったらその間をくぐらせるようにして弾幕を放てばいい！」

「……だ！」

姫路さんの弾幕を掻い潜り、僕は弾幕と弾幕の間から少量の弾幕を生み出して攻撃しようとした

「っ！美波ちゃん！」

「任せて！『ベルリンの壁崩壊』！」

島田さんは迷うことなくラストスペルを宣言した

すると、姫路さんを守るように壁のような弾幕が作られ、その壁がまるでガラスが砕けるかの如く割れて僕の方へ小さな弾幕となって襲い掛かる

僕は召喚獣をバックステップさせ、ひたすら回避し続ける

「くっ！流石ラストスペル、弾幕の量が桁違いだ……！せつかく姫路さんの近くまで行けたのに、また遠くなってしまった……！」

「だけど、この間に姫路のスペルは切れて、島田もラストスペルを使い果たした。少しは攻めやすくなる……はずだ」

相手のスペルカードはあと二枚、ラストスペルが一枚、スペルを使えるのは一人だけなら、勝機が見えてくる

「出来るだけ、ラストスペルは発動させたくないから、一撃で決めよう」

「だったら私が動きを制限させる！その為のこのスペルカードだ！『蓬莱人形』！」
妹紅が姫路さんの動きを制限するためにスペルを発動する

召喚大会のステージの端から、姫路さんを狙って弾幕が回転するように繰り出される
「こんなの、なんてことありません！姫！——」

姫路さんは冷静に避けながら、次のスペルを発動しようとする

「まだまだ！こんなものじゃないよ！」

妹紅はさらに、自身を中心として弾幕を放ち更に姫路さんの行動を阻害する

「——か、回避をつ……っ！」

時間が経過することに弾幕は増えていき、設置型の弾幕も置かれて姫路さんは混乱し始める

ここで僕の出番だ

「悪いね姫路さん、僕達は負けるわけにはいかないんだ！恋符『マスタースパーク』!!」
僕の召喚獣は木刀を姫路さんに向けて構えて、極太のレーザーを発動する

「っ！危ないっ！」

その瞬間、弾幕の間隙を見切った島田さんが、姫路さんを弾幕の外へ突き飛ばし、島田さんが身代わりになる

Fクラス 島田美波

現代社会 0点

島田さんの点数は0になったが、そのおかげで僕と妹紅のスペルカードの効果は切れる

「美波ちゃんっ！ありがとうございます…：それでは、改めて行きます！姫路
『ばんしゅうさうやしき播州皿屋敷』！」

姫路さんが二枚目のスペルカードを宣言すると、僕と妹紅の召喚獣を囲むように弾幕が発生し、皿状の弾幕が飛んでくる

『播州皿屋敷』、俗に言う日本三大怪談の一つだったはずだ

皿状の弾幕事態は回避しやすいが、僕達を囲んでいる弾幕の高さは、超えることができないような高さだ

でも、僕は一人じゃない…妹紅となら超えられる！

「妹紅！」

「わかってる…：よー！」

弾幕の密度自体は薄い。その隙間を掻い潜ることは簡単だ。その隙間めがけて、妹紅は僕の召喚獣をつかんで投げ飛ばした

「よし、外に出た！姫路さん、これで決めるよ！これが今の僕の召喚獣にできる、最速にして最高のスペル…魔砲『ファイナルスパーク』！」

空中で、木刀を姫路さんの召喚獣に向けて構え、木刀の先端から『マスタースパーク』を超える大きさのレーザーを発生させ、僕の召喚獣を中心に星形の弾幕も作る

「っ！回避が…追いつかない…！」

最初は回避していた姫路さんも、『ファイナルスパーク』は『マスタースパーク』と違って何回も発動するし、途中で向きを変えることもできる

星の弾幕にも気を取られた姫路さんの召喚獣は、『ファイナルスパーク』に飲み込まれた

Fクラス 姫路瑞希

現代社会 0点

姫路さんの召喚獣の点数が更新される。ふう、何とか勝てたようだ

「勝者、吉井・藤原ペア」

姫路さんの点数を確認した福原先生が、アナウンスを告げた

「姫路さん、島田さん。とても強かったよ！」

「そうだな。三回戦となると、二回戦までとはいかないな」

「吉井君…藤原さん…次は負けません！」

「私も、です！」

戦いが終わって、僕達はお互いに言葉を贈った

これで三回戦も突破。僕たちの戦いは、ここからさらに激しくなるのだった

喧嘩と宣伝と四回戦

明久 side

召喚大会三回戦が終わり、今回は何事もなく仕事が終わった僕たちは、四回戦の会場へ向けて移動していた

「次の相手は誰だろう…」

「さっきの試合でも思ったけど、ここまできると厳しくなってくるな…相手もルールに少しずつ適応しているって感じがする」

「それは…確かに」

妹紅の言うとおりだ。一回戦も二回戦も、相手がまだ周りを見切れていないという感じがした

三回戦の姫路さんと島田さんの戦いも、姫路さんが冷静さを欠いたから勝てたようなものだ

四回戦ともなると、相手はもっと冷静になるだろう

「あら、明久達じゃない。仕事は終わったの？」

話しながら歩いていた僕達に話しかけたのは、聞き覚えのある声だった

「あ、霊夢。そろそろ召喚大会も四回戦だからね、会場に向かっていたんだよ」

声の主は霊夢だった。霊夢の後ろを見ると、魔理沙と紫の姿も見える

「なるほどね。私達も試合を観戦しに行くところよ。絶対勝つてよね!」

「それと、さつきはごちそうさま。財布、返しておくわよ」

霊夢の激励の後、紫に差し出された財布を受け取る

「んで、召喚大会…だったか? スペルカードルールだつてんなら、絶対勝てよな! 応援してるぜ!」

ま、明久が負けるわけがないと思うけどな!」

「どこかの誰かさんのおかげで、明久も強くなったからな」

「だから! あの時は悪かったつてずつと言ってるだろう!」

「私はまだあんたを許す気はないからな!」

魔理沙の言葉に妹紅が食いつき、魔理沙と言い合いになる

妹紅と魔理沙は少し仲が良くないらしい。その理由は、数年前に幻想郷で起こった異変と魔理沙が関係してるんだけど…これはまた別の話だ

「二人ともストップ! 妹紅も、応援の言葉くらい素直に受け取ればいいのに…」

「いくら明久に言われても、私はまだこいつを許すことができないから無理だ」

はあ……この二人の仲はもうちよつと治ればいいんだけど……

「とりあえず、僕と妹紅は急ぐね！客席で見えて！魅せる試合にするから！……多分」

「おう！頑張れよ！」

そう言つて僕たちは別の方向に向かつて歩き出す

「……ごめん。私はまだ、霧雨魔理沙を許せない」

「……うん、わかつてる。輝夜とだつて千年たつてようやく関係が良好になってきたんだから、そんなに早く仲良くなれるとは思つてないよ。でも、僕は早く仲良くなつてくれるといいと思つてる」

「明久……」

妹紅は輝夜ともいまだに喧嘩をすることがあるし、そんなに早く仲直りできるとは思つてないけど、二人の関係が早く良くなる方がいいな

「さ、話が暗くなつたね！そんなんじや次の試合に勝てないし、切り替えて行こう！」

「……ああ！」

霊夢たちにあれだけのことを宣言したんだ。負けるわけにはいかない！

僕は心の中で決意しなおした

少年少女移動中……

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』

流石は一般公開…審判の布施先生に呼ばれ、僕と妹紅はステージに上がる

対戦相手の方に見えるのは、Aクラスの東風谷さんと、輝夜だった

外部からの来場客のために作られた見学者用の席は満員の状態で、四回戦が始まろうとしていた

「相手は東風谷さんと輝夜か…相手としては不足なしだね！」

「というよりも、輝夜が出ているとは思わなかったな…というか、いつの間に出場してたんだ？ずつと厨房にいたように見えただけ…」

「まあ、それは色々とあるのよ。詳しくは秘密だけどね」

「私は試召競争の時に見た試合が忘れられずに、輝夜さんをお願いして一緒に出場してもらいました！」

どうやら輝夜の参加は東風谷さんの要望らしい

それに、二人とも仕事のためのメイド服姿だ。宣伝するなら二人にも手伝ってもらおう

『さて、四人とも準備はいいですか？』

布施先生が僕たちの会話に一区切りついたので見て、話しかけてきた

そういえば、布施先生は化学の教師だったな。ということは輝夜の点数は低そうだし、そして東風谷さんの得意科目でもあつた気がする…

「わかりました。それじゃあ——」

先生に返事をして大きく息を吸い、召喚獣を呼び出す

『試獣^サ召喚^{モン}！』

僕ら四人の声が綺麗に揃い、足元に魔法陣が展開される

この様子だけで観客席からは小さな歓声上がる。この様子を初めて見た人にすれば、それだけでも十分に物珍しい光景なのだろう

ちなみに、毎度お馴染みの点数はまだ表示されない。特別に設置されているディスプレイに表示するため、少し時間がかかっているのだろう

『では、四回戦を——』

「ちよつと待つてください」

「はい？何かありますか…？」

「すみませんが、少しマイクを貸してもらってもいいですか？」

「それはいいですけど…」

布施先生が開始の合図をしようとするのを遮り、マイクを借りる

「妹紅、輝夜、東風谷さん、協力してもらってもいい？こつちに来て」

僕は話す前に、妹紅たちを僕の近くに呼ぶ

『清涼祭にご覧の皆さん、こんにちは』

ここに居る僕たち四人は、二年Aクラスと二年Fクラスの合同出店をしています。AホールとBホールに分かれています。どちらも基本的に同じものを提供しています。よろしければどうぞお立ち寄りください』

そう言つて僕はお辞儀をする

『よろしくお願ひします！』

妹紅と輝夜、東風谷さんも僕に合わせてお辞儀をする。これである程度の宣伝にはなるだろう

「先生、マイクをお返しします」

僕は先生に頭を軽く下げてマイクを返した

『———ということだそうですね。ご見学の皆様。お時間に余裕がありましたら出場選手たちのいる二—A、二—Fに立ち寄ってみてください』

先生は僕達の宣伝に協力してくれる。祭りの余興として乗ってくれたようだ

『さて、それではCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。良い試合をお願いします』

先生がそう言うと、僕たちは元の立ち位置に戻る

それと同時に、召喚獣の点数が表示された

輝夜
Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 東風谷早苗 & 蓬萊山

化学 428点 & 313点 VS
487点 & 115点

案の定、輝夜の点数は低い

東風谷さんは点数が高いな…

「申し訳ないわ。化学は苦手なの」

「大丈夫です！きつと何とかかなりますよ！」

「申し訳ないけど、僕達も負けられないからね、全力で行かせてもらおうよ！魔符『スターダストレヴアリエ』！」

僕はそう宣言した。観客席では魔理沙が見ているというから：最初は魔法の師匠に最初に教えてもらったスペルだと決めていた

こうして、後に『清涼祭史上最も美しかった戦い』として名をとどろかせることになる戦いが始まった

星と奇跡とギリギリの戦い

明久 side

「魔符『スターダストレヴァリエ』!!」

僕は真つ先にスペルカードを宣言する

僕の召喚獣を中心として回転するように魔法陣が現れ、そこから七色の星状の弾幕が発生する

そして発生した弾幕は流星群のように輝夜達の召喚獣をめがけて飛んでいく

「へえ、今回はそんな感じなのね。早苗、しばらく任せるわ！まだ私がスペルカードを使うのは惜しいもの」

「任せてください！さあ、行きますよ！星には星です！秘術『グレイソーマタージ』！」

そう言つて輝夜の壁になるように東風谷さんの召喚獣が立ちはだかり、スペルカードを宣言する

東風谷さんの召喚獣を中心に星の形に並んだ粒状弾幕が現れ、僕の弾幕を相殺するよう飛んでくる

『おぉー!!』

観客席からは、そんな声が聞こえてくる

星の弾幕と星の形に並んだ弾幕、その激突は僕達から見ても綺麗なのに、初めて見る観客が心を奪われないわけがなかった

次々と生み出される星々の輝きは次第に消滅していき、回避行動から攻撃の体制に切り替えた妹紅が、追撃をする

「このタイミング！不滅『フェニックスの尾』！」

妹紅の宣言したスペルカードにより、小さな炎の弾幕が相手に向かって降り注ぐ

さて、これはどうなる。今までの試合だったら相手は焦って被弾しただろうけど…

「炎のスペルカードなら、次はこれです！開海『海が割れる日』！」

東風谷さんは焦ることなく、次のスペルカードを唱える

僕達の召喚獣の横を波のようなレーザー弾の壁が出来て、東風谷さんの召喚獣から槍のような弾幕が発射される

その弾幕は降り注ぐ炎の弾幕を撃ち落としながら、僕達の召喚獣にも迫る

「っ！流石ここまで上がってくるだけはあるね…！対応力が今までと変わってくる…

！

弾幕を避けることは簡単だが、波のような壁、まだスペルカードを発動していない輝夜を警戒しながら回避しないとイケないから、集中が切れたら一気に持つていかれそう
だ

相手がどのくらいの時間と点数を設定してるか分からないし：

「仕方ない、相手も強いし、出し惜しみはなしだ！恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

僕は二枚目のスペルカードを宣言した

僕の召喚獣を中心として十個の魔法陣が設置され、外側に向かって五個の魔法陣から五色のレーザー弾が発射され、それが交互に発射され、魔法陣は僕を中心として回転する

そして僕の召喚獣からは七色の大小様々な星状の弾幕を発射する

僕の放った弾幕と東風谷さんの弾幕は相殺し合い、少しずつ消滅していく

ここで、妹紅と輝夜が同時に動いた

「今だ！『蓬莱人形』！」

「貴女ならそう来ると思ってたわ！神宝『蓬莱の玉の枝——夢色の郷——』！」

妹紅は赤と青の弾幕を、輝夜は七色に輝く弾幕を撒き散らす

二人の弾幕は火花を散らしていく

『わあああ!!!』

客席から声が聞こえてくる。観客のボルテージは最高潮のようだ

「意識をそらしましたね！奇跡『客星の明るすぎる夜』!!」

東風谷さんは僕の一瞬の気の緩みに気づき、スペルカードを宣言する

そのスペルカードにより、空中に大量の魔法陣が現れ、そこから眩しく光り輝くレーザー弾が飛び出してくる

「っ！しまった！」

「明久！危ない！」

妹紅は召喚獣を走らせて、僕の召喚獣を突き飛ばし、無数のレーザー弾に貫かれる

「っ！妹紅！」

「明久！腕輪は発動している！次行くぞ！『バゼストバイフェニックス』!!」

甦るはずの妹紅の召喚獣は、炎の塊となり、僕の召喚獣へと憑依した

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅

僕の召喚獣には炎の翼が生え、それぞれの点数が表示されるはずの点数は、僕と妹紅の点数の合計が表示されていた

「…ほんつと、腕輪の効果と言いつ、それと言いつ、でたらめよね、貴女」

「でも、炎の翼、かつこいいです!!」

輝夜は呆れたように、東風谷さんは目を輝かせながらそう言ってきた

「さあ、行くよ…このために用意してきた、僕達の!」

「私達の!」

「二人で一つのスペルカード!流星『火の鳥——不死伝説——!!」

清涼祭の試験召喚大会のスペルカードルールにある特別なルール、二人分のスペルカードと点数を消費することによって、ラストワード並みのスペルカードを発動する方法だ(一回戦でも使われたけど、慣れてなきすぎるのか威力は低かったけど)

妹紅の『火の鳥——不死伝説——』をもとに、流星群を追加したスペルカードになる

東風谷さんのスペルカードの効果は切れ、空から無数の炎と流れ星の混じった弾幕が降り注ぐ

「…悔しいけど、美しいわね。早苗、あとは任せたわよ!『永夜返し——世明け——!」

「…輝夜さん…」

僕達の弾幕に抵抗すべく、輝夜はラストスペルを宣言する

輝夜を中心に、紫の蝶弾・赤い中玉弾・青いナイフ弾・緑の小星弾・緑の大米粒弾・黄色の御札弾の混ざった弾幕が飛ばされる

本当は何段階かに分けて飛ばす弾幕のはずだけど…ラストスペルということで飛ばしたのだろう

そして僕と妹紅のスペルは『パゼストバイフェニックス』ありきの弾幕だというのも読んでいるのだろう。どちらもいわゆる耐久弾幕だ

お互いのスペルカードが切れる瞬間に、輝夜が叫んだ

「早苗、今よ…」

「わかりました！準備『サモンタケミナカタ』」

東風谷さんがスペルカードを宣言する。最初の『グレイソーマタージ』のように星形に並ぶ粒状弾幕を出現させる

でも、その数は最初のスペルカードの非じゃない

そして、弾幕がこちらに飛んで来ようとした瞬間に、僕達と輝夜の弾幕の制限時間が切れ、僕と妹紅の召喚獣は分離してしまう

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅
化学 129点 & 39点

分離後の点数配分を決めれるとはいえ、かなり厳しい点数になってしまった。でも、バラバラに攻撃するよりは僕と妹紅の二人で東風谷さんに攻撃した方がいいだろう

そう思って僕は妹紅に向かって叫んだ

「妹紅！ここは二人で行くよ！」

「わかった！」

「恋符『マスタースパーク』!!」

「『フェニックス再誕』!!」

僕は木刀を東風谷さんの召喚獣に向けて構えて最後のスペルカードを叫び、妹紅はラストスペルを宣言する

妹紅のラストスペルで星形に並ぶ弾幕を相殺し、僕はマスタースパークを東風谷さんに向けて発射する

東風谷さんは何とか緊急回避をして、攻撃が課する程度に留めたけど、お互いに残すはラストワード一枚ずつ、最終局面だ

『うおおお!!』

そんな戦いに観客も盛り上がる

「っ！流石、やりますね吉井さん！」

「東風谷さんこそ、ここまで楽しくて、心が躍る試合になってるなんて驚いたよ！」

「残るはお互いにラストワードのみ、悔いの残らないようにやりましょう！」

「うん、行くよ！」

「大奇跡『八坂の神風』!!」

『『ブレイジングスター』!!』

僕と東風谷さんは同時にラストワードを宣言する

東風谷さんの召喚獣の周りには、風を意味しているであろう粒状の弾幕が発生し、それが回転しながら僕に向かって飛んでくる

さらに、大きめの弾も放出されて、抜け道が少ない……

僕は木刀を後方に構えて、じつと弾幕の動きを見ていた

「……タイミングは大体わかった……あとは……ここ！」

僕は一気にマスタースパークを後方へと発射し、粒状の弾幕を掻い潜りながら東風谷さんの召喚獣へと突進する

消す
 辺りそうになる弾幕は僕の召喚獣を中心と少しずつ放射している星状の弾幕で打ち

「いつけえええええ!!」

「…っ！これは…早すぎて…回避がっ…!」

東風谷さんの召喚獣に衝突して、ステージで小規模の爆発が発生する
 煙が晴れて、特設のモニターに点数が更新される

輝夜
 Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 東風谷早苗 & 蓬萊山

化学 1点 & 0点 VS 0

点 & 0点

『うおおおおお!!』

点数が教示されて湧き上がる歓声

勝てた…のか…?」

「やったな明久!」

「…うん、やったね!」

僕は勝ったと実感して、妹紅とハイタッチをする

『見事な勝負をありがとうございます！最高に美しい試合を魅せてくれた勝者は、吉井君・藤原さんペアです！拍手をお願いします！』

『パチパチパチ』

布施先生がそうアナウンスを入れると、観客からは湧き上がる拍手が送られた
拍手を聞きながら、僕はステージを降りる

「あの、吉井さん！」

ステージから降りた僕は、東風谷さんに声をかけられる

妹紅は輝夜に声をかけられていた

「東風谷さん、どうしたの？」

「あの、楽しかったです！またいつかやれたらいいですね！」

「うん、そうだね！」

確かに、試召戦争でのアリス達との戦いも楽しかったけど、今回の召喚大会もなかなかだった

「それと…明久さんって呼んでもいいですか！」

東風谷さんからさらに告げられたのは、意外なことだった

「うん、好きに呼んでよ。僕も早苗って呼ばせてもらうね」

「ありがとうございませす！このこと…一生忘れません！」

東風谷さんは何やら嬉しそうにしていた

「はあ、やられたわ。私達に勝ったのだから、優勝してよね？」

「頑張ってください！応援してます！」

丁度、輝夜も妹紅との会話が終わったのか、僕達に激励を飛ばしてきた

「輝夜…早苗…うん、頑張るよ！」

「ああ。絶対に優勝する」

そんなやりとりをして、僕達は教室へと戻っていった

火力と相性の準決勝

明久 side

「そろそろ準決勝の時間だから、行ってくるね！」

召喚大会の四回戦から一時間ほどが経過し、準決勝が始まる時間となったことを雄二に報告していた

「ん？もうそんな時間か。明久、次の相手は俺と翔子だ。絶対に負けないからな」

「やっぱり？トーナメント表を見たときから、そんな気はしてたんだよね。僕だつて負けないよ！」

僕はトーナメント表で雄二と霧島さんが別ブロックに居ることを知っていたので、なんとなく上がってくるだろうとは思っていたけど、本当に来るとは

「と、いうわけだ。しばらく任せたぞ、秀吉」

「うむ。承知したのじゃ」

「行こうか、妹紅」

「わかった」

僕と妹紅は一足先に教室を出た

数分後、召喚大会のステージ：

『お待ちせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います！では、出場選手の入場です！』

まるで闘技場のようなアナウンスが流れ、僕と妹紅は、ステージに上がる

向かいからは雄二と霧島さんが出てくる

「明久！俺はおまえを倒して優勝する！」

「望むところだよ雄二！かかって来な！」

突然雄二に宣戦布告されたから、僕は大声で返事をする

『四人とも、召喚をしてください！』

審判の向井先生がそう言ってくる。審判の向井先生は古典の先生だ。つまり、僕と妹紅の得意科目ということだ

『試獣^{サモシ}召喚^{モン}！』

四人の声が響き渡り、僕達の召喚獣が出現する

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 V S Aクラス 霧島翔子 & Fクラス
 坂本雄二
 古典 528点 & 413点 V S
 446点 & 341点

今回はディスプレイの調整も少しずつアップデートされているのか、すぐに点数が表示された

僕と妹紅は500点越え（妹紅は自動で腕輪が発動しているから——100点から始める）

霧島さんが400点越え、雄二も300点越えと、Fクラスが三人もこの場に居るなんて信じられないような点数だ

『それでは、準決勝を開始します！』

向井先生が、試合開始の合図をした

「さあ、点数もあるし、一気に行かせてもらおうよ！魔空『アステロイドベルト』！」

僕は開始の合図と同時に、スペルカードを宣言する

僕の召喚獣を中心として、星状の弾幕が無数に放たれる

『スターダストレヴアリエ』とは違い、動きは少し単純だが、こっちは最初から弾幕の密度も、動きも速い

「ちっ、いきなりこれかよ…翔子！俺が突っ込むから援護を頼む！」

「…わかった」

「神童『一番第三楽章』！」

「…氷結『フリーズドライ』」

雄二と霧島さんが一枚ずつスペルカードを宣言する

雄二の召喚獣からは音符のような形をした弾幕が揺れ動くような不規則な動きで放たれ、霧島さんの召喚獣からは氷の弾幕が僕の弾幕を相殺するように放たれる

雄二のスペルカードの起源は『神童』と呼ばれた『モーツァルト』、霧島さんは『腕輪』だろうか。この大会、いろんなスペルカードが入り混じるから、それだけでも楽しい

「星に音符に氷の弾幕…だったらそれに炎を追加してやろうか！不死『火の鳥——鳳翼天翔——！！』」

妹紅が対抗するように、スペルカードを宣言する

妹紅の放つ炎の弾幕と鳥の形に並んだ弾幕は、雄二と霧島さんの弾幕を飲み込みながら、雄二達の召喚獣に迫る

弾幕が消えたことにより雄二と霧島さんのスペルカードの効果は切れる

「くっ！試召戦争でも思ったが、お前の攻撃は火力が高すぎるだろ！」

「そりゃあ、そこそこ点数を火力重視に割いてるからね！」

妹紅の言うとおり、僕は一部のスペルカード以外は点数と時間の配分を短すぎず高すぎず程度にしているけど、妹紅のスペルカードは持続時間を少し短くして、火力を高めるように配分している

「なるほどな！だが、俺はまだやれるぞ！突貫『鍛え上げたこの拳で』！」

雄二は二枚目のスペルカードを宣言すると、僕の召喚獣へともものすごい勢いで突進してくる

だけど、それは雄二らしくない攻撃だ

「…それは雄二らしくない攻撃だね。まっすぐ突っ込んでくるなんて」

「ハッ！だったら、この攻撃が避けられるかな！」

雄二の召喚獣はあと数センチのところまで迫っていた

でも、僕はもう木刀を構え終わってる

「この世に、光より速いものなんて存在しないだよ。そして、僕は既に準備は終わっている…魔砲『ファイナルスパーク』！」

僕は雄二の召喚獣に向かって、第二のスペルカードを宣言する

『ファイナルスパーク』はラストスペルとしても使えるスペルカードだけど、点数設定さえできれば、ラストスペル相当のスペルカードも普通に扱える（消費点数が300点近いから、500点を超えたが故に発動しているけど…）

そして、数センチ程しか離れていなかった雄二の召喚獣は、僕のファイナルスパークに飲み込まれた

「っ！嘘だろ…あの距離で反撃が来るなんてな…」

「ま、僕じゃなかったら無理だろうけどね」

数センチでのスペルカードによる反撃なんて、観察処分者として磨いた操作技術と普段の弾幕ごっこで鍛え上げた僕くらいだろう

「悪いけど、これで二対一だよ。霧島さん」

「…それでも、私は負けられない！凍結『ダイヤモンドダスト』」

霧島さんは二枚目のスペルカードを宣言した

霧島さんを中心として小さく煌めく氷の弾幕が展開される

弾幕の密度は相当なもので、弾の一つ一つが小さいから、回避も難しそうだ

だけど、僕達が相手だと霧島さんの弾幕は相性が悪い

「悪いね、あんたの弾幕は、私と相性最悪なんだ！『火の鳥——不死伝説——！』」

妹紅が二枚目のスペルカードを宣言すると、霧島さんの弾幕を上書きするように、無数の炎の弾幕が空中を漂い、霧島さんに向かって飛んでいく

「……つ、相性が悪すぎて……回避が……そんな……」

霧島さんは何とか対処しようとしたが、氷と炎、二つの弾幕は相性が悪すぎて、霧島さんはなすすべなく被弾してしまう

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 霧島翔子 & Fクラス
坂本雄二

古典 178点 & 156点 VS

0点 & 0点

ディスプレイには、霧島さんと雄二が0点になったと表記された

『そこまで！勝者、吉井君・藤原さんペア！』

勝利を告げるアナウンスを聞いて、僕と妹紅はハイタッチをして、ステージを降りたくそつ、熱くなっちまった」

「…勝てなかった」

悔しそうにする雄二達、だけど僕達にも負けられない理由があるんだ

「…霧島さんの目的って、『如月ハイランド』のチケット？」

「…そう」

やっぱりそうか。学園長はああいつてたけど、この二人だったらチケットを渡しても問題ないだろう

「僕達が優勝できたら、チケットは渡すから、雄二と二人で行ってきなよ」

「…いいの？」

霧島さんは目を見開いて驚く

「うん、大丈夫だよ」

「…ありがとう。吉井はいい人」

霧島さんは、嬉しそうにそう返してくる

「明久、いいのか？」

「この二人にだったら、学園長も納得してくれるはずだよ」
僕と妹紅はこそこそと話す

「雄二は早く答えを出して、霧島さんと幸せになりなよ？」

「ハッ、余計なお世話だ」

僕達は笑い合いながら教室に戻った

事件と真相とみなぎる覚悟

明久 side

「ウエイトレスが連れていかれようとした!？」

召喚大会準決勝が終わり、教室に戻った僕と妹紅、雄二は秀吉にクラスで起こった出来事を説明された

「うむ…突然変な連中が来て、ウエイトレスをどこかへ連れて行こうとしたのじゃ

十六夜とムツツリー二のおかげで捕縛済みじゃが…」

秀吉によると、時間的にも少しずつ閉店の準備をしていると、怪しい連中が数人入ってきて、丁度働いていた姫路さんや島田さん達を連れ去ろうとしたけど、咲夜と康太の活躍によって阻止されたらしい

咲夜も康太も目に見えないほどの速さで動いていたとか言ってたけど…咲夜はともかく康太は本当に人間なのかな…

「その連中は今どうしてるんだ？」

「鉄人が連行して事情聴取をしているのじゃ。ちらつと聞いたことじゃが、明久や藤原、

竹原教頭の名前を話していたようじゃ」

僕と妹紅、竹原先生か……これは学園長がらみで間違いないね……

一日目の営業は終わったし、これは学園長に直接聞かないね

恐らく学園長の本当の狙いはチケットなんかじゃなくて、もつと別のもののはずだ……
「この事件に関係がありそうな人に心当たりがあるから、僕と妹紅はその人のところに行つてくるよ」

皆は先に解散してて？」

「……はあ、お前がそこまで言うんなら何か事情があるんだろう。言葉に甘えて、俺たちはここで解散とするか」

お前たち、二日目の働きにも期待してるぞ！」

雄二は何も聞かずにいてくれた

そして、僕達の一日目の清涼祭はお開きとなった

少年少女解散中……

「明久、原因が何かわかったみたいだけど、何が原因なんだ？」

解散して、学園長室に向かう途中で妹紅が質問してくる

学園長室でわざわざ学園長に言うことでもないし、妹紅にはここで説明しておこう
「歩きながらにはなるけど……疑問に思ったことは色々あるんだ。最初に、学園長が持ち
掛けてきた交渉。タイミングが良かったのかもしれないけど、如月グランドパークのチ
ケットくらいなら優勝者を買収すれば済むことだし、僕達が学園長室に行ったときに竹
原先生と言い合うこともしなくていいはずだ」

「それは確かに……」

それなのに、学園長はわざわざ僕達を指名してまでチケットの回収を依頼してきた
「それと、僕達が学園長室に行ったときに退室した竹原先生は学園長室の隅にある植木
鉢を見ていた

あの時は何とも思わなかったけど、わざわざ僕達のクラスに対して妨害行為が繰り返
されているってことは、あの時の学園長室での会話を誰かが聞いていたってことになる
んだけど……そう考えると竹原先生は盗聴器を学園長室に設置している可能性が高い」

「……なるほど、だから学園長が何かを隠しているっていうことになるのか」
「そういうこと」

さて、妹紅に説明しているうちに学園長室の前にたどり着いた

「(コンコン) 二年Fクラスの吉井明久です」

「同じく藤原妹紅です」

『入りな』

「失礼します」

僕は学園長室の扉をノックし、学園長の返事が来たことを確認して部屋に入る

「何の用だい——」

「ああー！足が滑ったあー！（棒読み）」

僕は学園長室に入り次第、学園長室の隅にあつた植木鉢を蹴り上げる

「——って何をするんだい！」

「すみません。実は、これが……」

僕は植木鉢の残骸を漁って取り出した盗聴器の破片を学園長に見せる

「盗聴器？……竹原の仕業かい

それで、何の用だい？」

「実は、一時間ほど前に僕達のクラスのウエイトレスが何者かに連れ去られようとしてしました

それに、何度か営業妨害もあつたので、学園長との交渉に何かあるのかと思つて話を聞きに来ました」

「…そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか…すまなかったね」

僕の言ったことを聞き、学園長が頭を下げる

やっぱり、学園長は何か知っているのか

そしてわざわざ召喚大会を条件に出してきたということは…おそらく狙いはもう一つの景品…

「僕達のクラスは優秀ですからね、被害は最小限で食い止めました

それで、学園長の真の目的を教えてくださいませんか？と言ってもある程度予想できていますか…」

「…噂には聞いていたが、ここまで頭が回るやつだとは思わなかったよ

私の目的はペアチケットなんかじゃない。もう一つの優勝賞品『白金の腕輪』だよ
やっぱりそうだったか…

「やはりそうでしたか…それで、白金の腕輪の回収を僕達に頼んだ理由は？」

「白金の腕輪は二つあるんだよ。一つは教師の代わりに召喚フィールドを展開できるというもの。もう一つは、点数を分離して二対の召喚獣を出すもの…って、あんた達は元から召喚大会に出ようとしていたなら知っているだろうが…」

もちろん知っている。僕達の目的は楽しみたかったことなのは間違いないけど、白金の腕輪にも興味があったからだ

「もちろん知っています。それで、どのような不具合が？」

「代理召喚には不具合はないんだが、問題はもう一つの方さ。召喚獣の同時操作なんて、普通に扱える代物じゃないし、致命的な不具合は『観察処分者』にしか扱えないということだよ」

『観察処分者』にしか扱えない。つまり、この学園の歴史上で僕しかいないのだから、実質僕にしか扱えないということか

「…なるほど。そしてそんな不具合がある腕輪を大会後のデモンストレーションで使ったら、何が起こるかわからないから、文月学園のイメージや存続にかかわるってことですか」

「そういうことだよ。そして、あんた達を騙したような形にしたのは悪かったが、改めてお願いがあるよ。どうか、白金の腕輪をあんた達に回収してほしい。あんた達なら暴走は起きないから、回収したらそのままあんた達が持つていいよ」

「そう言いながら頭を下げる学園長。騙される形にはなつたけど、学園の危機だ。なんだかんだこの学園のことは気に入ってるし、ここで協力しないなんてこと、あるわけがない」

「頭を上げてください、学園長。僕達は大丈夫ですし、事情は知らないものの、頼もしい仲間がいます。あんな奴らに、学園を渡せるわけなんてありません！」

「明久の言うとおりで。私達はこの学園のことが好きなんです。この日常を奪われてたまるか！」

「あんた達…ありがとう…明日は頼んだよ」

「はい！」

こうして、僕達の長い清涼祭一日目が終わった

二日目と睡眠と決勝戦

明久 side

清涼祭二日目の朝、僕と妹紅は決勝戦に向けて補充試験を受けて、教室に待機していた

「…眠い」

「なんで徹夜なんてしてしまったんだろうな、私達」

「そう、僕と妹紅は徹夜して今日の補充試験を対策して受けたから、かなり点数は出るけどものすごく眠い」

「はあ…お前ら、そんなので大丈夫なのか？」

「そんな僕達を見て雄二が声をかけてくる」

正直、大丈夫じゃない

「悪いけど、召喚大会に向けて寝てきてもいい？召喚大会が終わったら午前の分を取り返すくらいには働くから…」

「私も頼む。決勝戦は散々妨害してくれた二人組みみだから、完膚なきまでに叩きの

めすつもりだったから全力を尽くしたが…」

そう、決勝戦の相手は常夏コンビなのだ

昨日散々やられたから、コテンパンにしてやろうとおもって補充試験を受けてきたのだ

「仕方ない。午後はきつちり働いてもらうからな。それと、決勝戦はモニターで中継されるらしいから、俺たちは画面越しに応援してるから、だらしない試合はするなよ！」
「こちらは私たちに任せてください。寝不足で負けたなんて言われたらたまりませんから」

雄二と咲夜からそう返事が返ってくる

本当にありがたい

「それじゃ…ひと眠りしてくるよ…ほわあ…」

あくびをしながら僕と妹紅は教室を出た

少年少女移動中…

僕と妹紅は保健室に来ていた

「失礼しまーす」

「あら、明久と妹紅じゃない。どうしたの？」

「実は……」

僕は永琳に事情を説明した

「そういうことね。ベッドなら空いてるから、そこに寝てちようだい。十二時半に起こせばいいのね？」

「うん……よろしく……」

「さて……寝るか……」

僕は、永琳に案内されたベッドに倒れこむようにダイブした

「あの二人……同じベッドに飛び込むなんて……どれだけ仲いいのかしら（ボソツ）」

永琳が何かいていた気がするけど、よく聞き取れなかった

少年少女熟睡中……

僕達が寝て数時間が経ち、永琳に起こされて僕達は召喚大会決勝戦の入場口に来ていた

「それにしても、観客が桁違いだね……流石決勝戦」

「ああ。これは……余計負けられないな」

最初から負ける気はないけど、余計気が引き締まる

『さて皆様。長らくお待ち致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

会場の方から、大きなアナウンスが聞こえる。聞いたことのない声だったけど、プロでも雇ったのかな？

『出場選手の入場です！』

「さ、入場してください」

そのアナウンスを聞き案内役の先生がそう言うってくる、僕と妹紅はお互いに頷いてステージへと上がる

『二年Fクラス所属・吉井明久君と、同じくFクラス所属・藤原妹紅さんです！皆様拍手でお迎えください！』

盛大な拍手が雨のように降ってくる。ものすごい量だ

『なんと、決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を改めなければいけないかもしれません！それに、この二人は昨日の投票での試合の美しさランキング堂々の一位！これは素晴らしい試合が期待できそうです！』

か
この視界の人はうれしいことを言ってくれる。それに、ランキングなんてやってたの

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川俊平君と、同じくAクラス所属・常村勇作君です！こちらもお拍手でお迎えください！』

ンビだ
コールを受けて僕達の前に姿を現したのは、昨日散々迷惑をかけてくれた例の常夏コ

『出場選手の少ない三年生ですが、それでもきつちりと決勝戦に食い込んできました。

さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか!」

同じように拍手を受けながら、二人は僕達の前にやってきた

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した――
』

アナウンスでルールの説明が入る。僕達はもう知っているのに、それを無視して先輩たちを睨み付ける

「先輩達、もう小細工はネタ切れですか?」

「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな。Fクラス程度のオツムじゃあ理解できなかつたか?」

そうやって僕に返してくる坊主先輩。顔が少しイラつく

「残念ながら、あんたらの言葉なんてAクラスの生徒でも理解できないよ。日本語を覚えなおしてくるんだな、サル山の坊主先輩?」

「て、テメエ、先輩に向かつて…」

観客に聞こえない程度の小声で妹紅も先輩を煽る。相当ストレスがあつたのだろう

「先輩。一つ聞きたいことがあります。竹原先生に協力している理由は何ですか？」

そう聞くと、坊主先輩は一瞬驚いたような顔をした

「…そうかい、事情は理解しているってコトかい」

「大体は。それで、どうなんですk？」

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりや受験勉強とはおさくらばだ」

…なるほど

「そうですか。そっちの——常村先輩も同じ理由ですか？」

「まあな」

「…そうですか」

そんなくだらない理由で、皆に迷惑をかけたのか

「本当は小細工なんていらなかったんだよ。Aクラスの俺達とFクラスのお前らじゃ、そもそもの実力が違いすぎる」

「そうですか。その割には手を込んだやり方で迷惑をかけてくれましたね。そんなに僕達が怖かったんですか？」

「ハッ！言ってる！どうせFクラスのお前達は相手の弱みにでもつけこんで卑怯な手でも使って勝ち進んできたんだろうよ！俺達には何もできないさー！」

この人たちは、何も見てこなかったのだろうか。妄想が過ぎる

『それでは試合に入りましょう！選手の皆様さん、どうぞ！』

説明も終わり、審判の先生が僕達の間立つ

今回の審判は慧音。つまり日本史だ

『試^サ獣^モ召喚^シ！』

掛け声を挙げ、それぞれが自身の分身を呼び出した

向こうの召喚獣の装備はオーソドックスな黒都鎧。高得点者の召喚獣らしく、質は良
さそうだ

Aクラス 夏川俊平 & 常村勇作

日本史 209点 & 197点

確かにAクラスに所属しているだけはある。点数は高い方だといえるだろう
この二人、本当に勉強ができるみたいだ

「どうした？俺達の点数を見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな」

そう言つて煽つてくる二人。この二人は本当に何も知らないのだろうか。僕達の点数を

そして、この二人はこれだけ勉強ができるにも関わらずに他人を妨害し、この二人は関わつてないだろうし未遂には終わつたけど、誘拐して、皆を傷つけようとしたのか

「ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ」

「観察処分者だ、貧相な点数をしているんだろう？そっちの女も、どうせ口だけでしょばい点数をしているんだろうな！」

ククツとモヒカン先輩が趣味の悪いような笑いをする

そして、こいつは妹紅のことを侮辱した…そんなのは許さない

「先輩方…僕は…僕達は怒っているんです」

「あ？」

僕の言葉に、何を言っているかわからないような顔をする坊主先輩

「自分が楽をするために、周りを蹴落とそうとした。私達のクラスメイトを貶した——」

僕の言葉に妹紅が続ける

「——そして、妹紅（明久）を侮辱した！あんた達は絶対に許さない！」

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅

日本史 671点 & 534点

「なっ!?!」

点数が表示されたディスプレイを見て、二人の顔色が変わった

「無様な負け様を公衆の面前に晒すのはあんた達だ！」

「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に、死んで死の終わりに冥しくら

死を知らない私は闇を超越する。暗い輪廻から解き放たれた美しい弾幕を見よ！」

召喚獣が獲物を構える。決勝戦の幕は開かれた

醜態と勝利と公開終了

明久 side

「テメエら…Fクラスの癖にそんな点数を…！」

「カンニングでもしやがったな！」

常夏コンビがそんなことを叫んでくる

「そんなわけないじゃないですか。それより、話している暇はないですよ！今日の僕達は本気なんですから、少しくらいは張り合ってくださいよ？黒魔『イベントホライズン』！」

先輩が叫んでいるのを聞き流して、僕は一枚目のスペルカードを宣言する

『インベントホライズン』は、四回戦で使った『スターダストレヴアリエ』の強化版のよ
うなスペルだ。七色の星状の弾幕を発射する魔法陣の数は増え、弾幕の密度もすごいこ
とになっている

「ちっ、なんだよこれ！」

「避ける場所がねえじゃねえか！審判！これは反則だろ！」

常夏コンビは慧音に向かってそうやって叫ぶ

この人たちはルールもあまり理解していないのか？それともそれだけ簡単に勝ち上がれるブロックだったのだろうか

「反則ではありません。ルールの『絶対に避けることのできない攻撃はできない』というものは、『相手が避けることのできない』ではなく、誰かが避けることができればいいということです。それに、彼はちゃんと教師の審査を通つてこのスペルカードを使用しています」

そうやって常夏コンビを一蹴する慧音。ルールには相手が避けることができないといけないとは書いてないのだ。どこも問題ない

「ちっ、教師もテメエらの味方つてわけか！だつたらやってやるよ、卑劣『目くらまし戦法』！」

「二つ同時ならよけきれないだろうよ！卑劣『ゲスの極み』！」

…根本君といい常夏コンビといい、この学校の卑怯者は自分で自分を卑怯だと認めているらしい

常夏コンビの弾幕は小さきまざまな大ききの弾幕があり、大きな弾幕の陰から小さな弾幕が出てきたりする

僕の弾幕と衝突しながら、少しずつ僕の召喚獣へと迫つた

「残念だけど、これはお互いに二人のペアだ。二つ同時なら防げないと思うかもしれないけど、それはあんた達も同じさ！不死『火の鳥——鳳翼天翔——!!』」

僕のスペルカードの効果が切れたタイミングで、妹紅が最早お馴染みと言ってもいいスペルカードを宣言する

妹紅によると、今回は点数がいいからってかなり火力寄りに設定したらしいそのスペルカードは、常夏コンビの弾幕をもともせず常夏コンビの召喚獣へと向かって飛んでいく

「くそつ、あいつらおかしすぎるだろ！」

「火力といい弾の量といい、でたらめじゃねえか！」

常夏コンビが何か言っているけど、僕達にとつては誉め言葉だ

「あんた達の野望はここで打ち砕く！光撃『シユート・ザ・ムーン』！」

僕は二枚目のスペルカードを宣言する

常夏コンビの召喚獣が経っている近くの足元に、複数の魔法陣が発生し、そこからレーザー弾が発射される

そして、僕の召喚獣からは小さな星状の弾幕が常夏コンビめがけて飛んでいく

「くそが！夏川、あとは任せるぞ『卑怯者の自爆』！」

モヒカン先輩は坊主先輩にそう言い残して、たまたま近くにいた妹紅の召喚獣をつか

み、自爆系のスペルカードを宣言した

「あんた達のことだから、そんなスペルを仕込んでると思ったよ！しやくみょう惜命『不死身の捨て身』！」

妹紅はとつさに第二のスペルカードを宣言する

妹紅の召喚獣は腕をつかまれたまま、坊主先輩の方へと突っ込んでいった

「おま、それはやめろ！」

「俺まで巻き込むつもりか！」

「はっ！自爆攻撃ってのは、味方も巻き込まれてこそだろう？」

妹紅：…かなり悪役のようなセリフを…

『ドオン！』

そんなことを考えていると、三人の召喚獣は派手に爆発した

Fクラス 吉井明久 & 藤原妹紅 VS Aクラス 夏川俊平 & 常村勇作

日本史 371点 & 317点 0点 &

0点

妹紅の召喚獣は炎と共に舞い戻り、常夏コンビの点数は0になっていた
随分とあつけない最後だったけど、なんだか不完全燃焼だなあ…

『吉井・藤原ペアの勝利です!』

『オオオオオ!!』

ディスプレイに点数が表示されて、実況は僕達の勝利を告げ、観客席は盛り上がる
意外と盛り上がっていたようで何よりだ

「やったね、妹紅」

「ああ、少し不完全燃焼感はあるけどな」

うん。あの二人、咬ませ犬オーラがすごかったからな…

『それでは、賞品の授賞式を行います——』

歓声がある程度収まるところで、賞品の授賞式が始まった…

一時間後、Fクラス出店エリアにて：

「やったな、明久、藤原」

クラスに戻ると、雄二から声をかけられると同時に、お客様達からも大量の拍手が飛んできた

「雄二、これは一体…」

「朝言っただろう？『このモニターで中継される』って。それで見ていたお客様は実際にお前たちを見て拍手を送りたいってな。それ以外にもお前たちの試合を見てここに来たって客もいる」

そういえば、そんなことを言ってた気がする。眠くてあまり覚えてないや

「それと、我らがFクラスを代表した二人が優勝したんだ。優勝記念で一般公開終了までセール中だから、きっちり働いてもらうからな！」

本当に、雄二のこの性格はきっちりとしている。僕達の優勝に合わせてセールまでやるなんて

「わかってるって、さーて、清涼祭もラストスパートだし、全力で働かせてもらうよ！」
色々あった清涼祭ももうすぐ終わるし、頑張ろう！

そう思って僕はホールへと急いだ

数時間後…

『ただいまの時刻を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「ふう…終わった…」

「疲れた…」

放送を聞いた途端、足の力が抜けるのがわかる

あの後、僕と妹紅はホールでフル稼働していた。しかも、名指しでの氏名がかなり多かった気がする…かなり疲れたよ…

「お疲れ様です。ドリンクでもどうぞ」

「ありがとう、咲夜」

「助かる…」

そんな僕達を見てか、咲夜が僕達に飲み物を渡してくる

咲夜は僕達以上に働いているはずなのに、ぴんぴんしている。これが本業か…

「明久、藤原、疲れているかもしれないが学園長室に行くぞ」

そんな僕達に雄二が話しかけてきた。多分だけど、交渉の件だろう
「わかった」

「咲夜、ありがとう。これ片付けといて」

「わかりました。それにしても、学園長室で何かあるのですか？」

妹紅は雄二に返事をして、僕は咲夜に容器を渡す。咲夜は学園長室に行くのを不思議に思ったのか、そうやって聞いてきた

「ああ、ちよつと取引をしててな」

「なるほど。何かあったら私に連絡をください。力になりますので」

「そうか、助かる。行くぞ、二人とも」

「わかったよ（ああ）」

雄二と咲夜はそんなやり取りをして、僕達は学園長室に向かった…

騒動と捕縛と清涼祭終結

明久 side

僕と妹紅、雄二の三人は学園長室に来ていた

「学園長、明久達を貸したんだ。約束通りクラスの設備は変更していいよな？」

「ああ、好きにしな」

雄二の言葉にあっさりと学園長は許可を出した

それはそうだろうけど

「ところで、明久達は何を頼まれたんだ？」

「学園長、言ってもいいですよ？影響はあまりなかったにしても、雄二達は今回の事件の被害を受けています」

「…はあ、勝手にしな」

学園長は渋々許可をくれた

「実は…」

「待て明久！そこにいるのは誰だ！」

許可が取れたから雄二に事情を説明しようとしたとき、妹紅が制止して、学園長室の扉の奥に向かってそう叫びながら扉を開けた

「どうしたの妹紅！」

「さっきの会話を聞かれてた！後ろ姿しか見えなかったけど、たぶん常夏コンビ！」

どうやら常夏コンビはまだあきらめてなかったようだ

「さっきの会話、大事なところを聞かれてないとはいえ、放送されたりしたら不味いよ！」

「とにかく、なんだかわからんが分かれてあいつらを探すぞ！明久と藤原は屋上に、俺は放送室に向かう！」

雄二の状況判断は素晴らしいもので、ただ巻き込まれただけなのに的確な指示を飛ばしてから包装室に向かう

「わかった！僕は咲夜に電話するから、妹紅は先に追って！学園長、失礼します！」
「わかった！」

妹紅は屋上の方へと走っていき、僕は携帯を取り出して咲夜に連絡する

『どうかしましたか？』

「咲夜！助けてほしいことがあるんだけど、昨日僕が言っていた迷惑行為の二人組が何か企んでるみたいなんだ！場所は屋上か放送室…放送機材がある場所だと思う！見つけ

たら捕まえて！」

『わかりました。では』

そう言つて咲夜は電話を切つた

電話が切れたのを確認して、僕は妹紅を追つて屋上へと向かつた

少年移動中……

屋上にたどり着いた僕は勢いよく屋上の扉を開けた

「明久、捕まえたぞ。咲夜が」

「的確な指示のおかげですぐに捕まえることができました」

そこには、妹紅と咲夜。そして縛られて転がっている常夏コンビがいた

「この場は西村先生に報告済みなので、西村先生に引き渡し次第、私達は打ち上げにでも向かいますよ。学園長室に向かつた三人以外は買い出しに行つて、近くの公園に集まつてると思いますよ」

なんと、クラスの皆は既に全て済ませて打ち上げの準備を始めているらしい

「それは急がないといけないね！雄二にもそうやつて連絡しておこう！」

「私は慧音に連絡しておくよ。打ち上げがあるから帰りは遅くなるつて」

こうして、雄二と慧音に連絡した後、西村先生に常夏コンピを引き渡して、僕達は打ち上げ会場に向かった

少年少女移動中…

「わぁお…これは…」

「そうか…Fクラスだけだと思ってたけど、Aクラスも合同で打ち上げをしてるのか」
「そういえば、それは伝え忘れてましたね」

公園に着いた僕達は、AクラスとFクラスが合同で打ち上げをしているのを見て、少し驚いていた

試召戦争では少し渋ったような感じでこうなったAクラスだけど、かなり打ち解けているようだ

「三人とも、ようやく来たか。先に始めてたぞ」

「雄二こそ、随分と速いね」

そんな僕達に雄二が話しかけてきた。西村先生が来て少し事情を話していたとはいえ、雄二も連絡を入れたときにはまだ校内にいたはずだ

「まあな。とりあえず、今回の出店は大成功だ。これであの教室もある程度まともな設

備になるはずだ」

「へえ、そんなに……あ、霧島さん！約束のこれ」

たまたま近くに通りがかった霧島さんに、僕は如月ハイランドのチケットを渡した

「……吉井、ありがとう」

「どういたしまして。実はこのチケット、二人一組の召喚大会なのにペアチケットが二枚賞品だったみたいで……」

そう、学園長の間違いだったのか、ペアチケットが二枚あったのだ。二人で大会に出て優勝して二回け行かせるつもりだったのだろうか

「あ、明久じゃない！やつと来たのね！さあ、こつちよ！」

「えっ、ちよ、輝夜!?雄二、霧島さん、また！」

「あつ、輝夜、待て！」

「あ、ああ……」

突然現れた輝夜に引つ張られて（引きずられて）、僕は雄二と霧島さんの元を離れる

「三人とも、大変だったみたいねえ……はい、飲み物」

「ありがとう、輝夜。いや……いろいろと大変だったよ……」

「それにしても、いつの間にか輝夜が召喚大会に参加してるのは驚いたわ……」

「ホントだよ！つてか、そんな感じでどうやって仕事してたんだ……」

「それは企業秘密よ☆」

輝夜に引つ張られてたどり着いた場所にはアリスが居て、今は僕、妹紅、咲夜、輝夜、アリスの五人で話している

「まあ、あの厨房は私達以外は入れないようにしていた時点でどうやったかわかるとは思いますが…」

厨房にはこの五人（幻想郷関係者）しか入っていないので、多分能力を多用したのだらう

咲夜と輝夜は時間に関係する能力を持つているし、アリスは人形を動かすことができ
るから、厨房はこの人数で回せるというわけだ

「ふう…って、これお酒じゃない？」

「…ほんとだ。誰かが間違えたのかな…」

「大丈夫よ、きつと。それに、幻想郷ではいつもの事じゃない」

幻想郷には未成年飲酒なんて存在しないに等しいので、たまに口にはいるけど…
ここでは別だと思う

「…それもそうだね。今日はこのまま、こうやってゆつくりしておこうか…」

「そうだな。明久、お疲れ様！」

「妹紅も、お疲れ様！」

こうして、僕達の長いようで短かった清涼祭は幕を閉じた

2. 5章 如月ハイランド編

俺と僕と私の気持ち

雄二 side

清涼祭が終わって数日が経った朝、俺は翔子と一緒に『如月ハイランド』へと行くことになった

全く明久の奴、翔子に優勝賞品のプレミアムチケットなんて渡しやがって…

まあ、確かにペアで優勝したのにペアチケット二枚が商品にあるなんてのもおかしい話だが…

俺は翔子からの告白の返事をできていないから、そのあと押しのもりなんだろうが…

ええい、もう決まったことだ！告白の答えだって、焦りすぎなくていいはずだ！ここは覚悟を決めて翔子と一緒に行くしかねえ！

そう思つて、俺は家の外へと出た

「…雄二、おはよう」

家の外で俺を待ち構えていたのは、翔子だった

上は白い長袖のカーディガンで、その下に薄いピンクのカットソーを着ている。下は薄手の膝上程度なので、下着が透けない為のインナーが中に見える。ペチコートとかいうやつだったか？とにかく、翔子はかなり気合が入ってるようだ

俺が適当な服なのが少し気の毒なくらいだ

「ああ、おはよう翔子。それとその格好…似合ってるぞ」

「…ありがとう。今日は楽しみ」

翔子は俺がそんな言葉を言うなんて驚いたのか、一瞬驚いたような顔をする

「ああ、俺も楽しみだ。さあ、行くか！」

「…うん」

俺は翔子と如月ハイランドへと向かった

雄二 side out

明久 side

今日は咲夜と一緒に如月ハイランドに行く予定になってる

本当は妹紅を誘う予定だったんだけど、妹紅が『咲夜にいろいろ貸しを作ってただろう。それで返せるかどうかはわからないけど、咲夜を誘った方がいい』と言われたから咲夜を誘ったんだ

咲夜を誘った時、少し顔を赤くしていたけど、どうかしたのだろうか？

それにしても、妹紅も慧音も休日だというのに朝から用事があると言って出かけて行ったし、どうしたんだろう

そんな些細なことを考えながら、僕は如月ハイランドに行く準備を終わらせた

『ピーンポーン』

僕の準備が終わったタイミングで、家のチャイムが鳴る

インターホンを覗くと、そこには咲夜の姿があつた

「おはよう、咲夜」

「おはようございます。あの…少し早かったですでしょうか？」

「そんなことないよ！僕も出発する準備はできてるから、さっそく行こう！」

「はいー」

こうして、僕と咲夜は如月ハイランドに向かった

明久 side out

妹紅 side

「はあ、明久…ちゃんと咲夜をエスコートしてるかな…」

「それは…明久を信じるしかないだろう

…と、言いたいけど明久だからなあ…」

私と慧音は如月ハイランドに来ていた

目的はもちろん明久と咲夜の仲の後押し…と言いたいけど、本来の目的は坂本と霧島の後押しだ

明久は明久で色々心配だけど…坂本はもう一押しって感じなんだし…

明久たちの方も少しやればなーとは思うけど…

「それにしても、良かったのか？せつかくペアチケットがあつたのに、明久と一緒に行くかなくて」

慧音がそうやって聞いてきた。確かに、私と明久は一緒に暮らしてはいるけど…

「うーん…明久の場合、私はどちらかというと親？みたいな感じだから…」

うん、恋愛対象というよりも保護者の方がじっくりくるな

「…そうか。まあ、妹紅がそういうならそれでいいんだろが…後悔はしないようになる？」

「それに…いざそういう関係になった時のことを考えると、怖いんだ…明久は普通の人間だから、数十年後には寿命が来る。そうなったときに、私は私でいられるのか…」

「妹紅…」

私は死なないけど、明久には寿命がある。死んでしまう。その日が来た時、恋愛関係だったらと思うと…

「さ、暗い話はそこまでにして、坂本の幸せのために頑張るぞー!」

「…そうだな。協力してくれるFクラスの人たちももうすぐ来るし、もうすぐ開園だ。頑張ろうじゃないか」

こうして、私達は準備に入った

到着と受付と写真撮影

雄二 side

電車とバスで二時間ほどかけ、俺と翔子は如月ハイランドの目の前までたどり着いた
…意外と長かったな

「…やっかついた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子
ここまで長距離移動だったからか、少し感動するな

「よし。それじゃ、行くか翔子」

「…うん」

こうして俺達は如月ハイランドに入ろうとしたが、そこで見覚えのある二人組を見つけた

「明久と十六夜じゃないか。お前らも来てたんだな…」

おかしい、なんだか違和感を感じる気がするが、気のせいかな？

いや、確かに違和感を感じるが原因はこれかな？

「つて明久、藤原はどうした？お前のことだから藤原と一緒に来ていると思ったんだが……」

違和感の正体はこれか。明久はいつも藤原と一緒に行動しているからここに来るのも藤原とだと思っていたが……

「……僕ってそんなに妹紅と一緒にイメージがあるかな……？」

なんだか妹紅は用事があるし、こういうのには興味ないみたいで……

なるほどな、藤原はそう言ったんだろうが、おそらく明久と十六夜の仲を縮めようとしているな？

俺から見た感じ、確かに明久と藤原は家族のような印象が強いし、十六夜は明久に惚れているからな……

「そうか、引き留めて悪かったな。お互い楽しもうぜ？」

「うん、それじゃあね」

明久はそう言っつてその場から離れて行った

「俺達も行くか」

「……うん」

ここうして、俺と翔子も入場ゲートへと向かった

少年少女移動中…

「いらっしやいませ！如月グランドパークへようこそ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺達に笑顔を振りまいた。顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが

「本日はプレオープンなの데すが、チケットはお持ちですか？」

「…はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺達の顔を見ると、笑顔のまま固まった

「…そのチケット、使えないの…？」

翔子がそんな係員の顔を見て、不安そうに表情を曇らせる

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？デスが、ちよつとお待ちくだサーイ」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺達に背を向けて電話をし始めた

「——私だ。例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始める。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

この係員、急に眼の色が変わりやがったぞ

「…ウエディングシフト？」

翔子が首をかしげている。明久が言つてた気がするが、例のジंकウスを作るとかいうやつか？

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

取り繕つたように元の雰囲気に戻るか係員。あからさまに怪しい

「アンタ、さつき電話で流暢に日本語を話してなかつたか？」

「オーウ。日本語むつかしくてワカリませーン」

コイツむかつく

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで、向こうのやろうとしていることはよくわかつた。だが、そんなものに乗る気はない！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまっ！」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓に上げるだろう。なんて恐ろしい脅迫をしてくれるんだ、この似非外国人め……！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……（ポツ）」

翔子は似非野郎の言葉に仄か頬を赤らめていた

「お待たせしました。カメラです」

そこに、帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを手に表れた

なんだか見覚えのあるヤツだな。声も、地面まで付きそうな白髪も……

「藤原、何をやっている？」

「はて？私は藤原ではありませんが？」

「彼女はココのスタッフのフヒト・フジワラ（千五百歳）、通称もこたんデース！藤原ナントカさんではありませーん」

「黙れ！人種性別年齢氏名すべてに嘘をつくな！千五百歳なんてありえないし、結局は藤原で、しかもその名前で通称ももこたんはおかしいだろうが！」

似非外国人に絡まれている間に藤原の姿は見えなくなつた

しかし、こここのスタッフに成りすましているとなると、かなり大掛かりな話だ。藤原の単独行動ではないだろう：おそらく、学園長も協力しているのだろう。本来、学園長にこのチケットを回収してほしいと言われたのにこのチケットが手元にある時点で怪しいからな

まあ、警戒しておくだけ損はないだろう。俺はそうやって心に決めた

「でハ、写真を撮りマース。腕を組んでくだサーイ。はい、チーズ」

俺達は言われたとおりに腕を組み、写真を撮ってもらつた

「スグに印刷しマース。そのまま待っていて下さい」

「…わかつた。このまま待つてる」

翔子は律義にもこのままという姿勢を貫き、俺達は二人で腕を組んだ状態で待つていた

「——はい、どうぞ」

程なくして似非野郎が写真を持ってきた

それと同時に開放される俺

「…ありがとう」

翔子は嬉しそうに写真を受け取った

「…雄二、見て。私たちの思い出」

「…なんだ、これは」

移っているのは無表情で腕を組んでいる翔子と俺。そして――

「サービスで加工も入れておきまシタ」

その二人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字

無表情で腕を組んでいる男女の周りを、未来を祝福するように天子が飛び回っている

…見る限り幸せそうではないし、かなり陰気な写真だな

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か!? コレを飾ることどこになんのメリットがあるというんだ!？」

それに、俺は言い逃れができなくなる

なんて似非野郎と言い合っていると

『ああつ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおうよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？ そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』
偉そうな態度でチャライカップルがやってきた

「すいません。こちらは特別企画でスので…」

似非野郎が断ろうとする。どうやらこの写真撮影はウエディングシフトとやらの一環で、俺達だけが対象なのだろう

『ああつ!? いいじゃねーか！ オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

『きやーっ。リユータ、かっこいーっ！』

男が下から睨み付けるように似非野郎を威嚇し始める。絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もどうかと思うが

『だいたいよお、あんなダツセえジャリどもよりオレたちを写した方がココの評判的にも良くねえ？』

『そうよっ！ あんなアタマの悪そうなオトコよりもリョータの方が百倍カッコイイんだからあー！』

まあ、とりあえずチンピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げるとするか

「…（ツカツカツカ）」

「つておい、翔子。どこに行くんだ」

急に勢いよく歩き出した翔子の腕を掴んで引き留める

「あのなあ……。その程度でイチイチ目くじら立てていたらキリがないぞ？」

あのテの連中は下手に相手をするとか執拗に絡んでくるkとが多い。悪口程度で構っていたらキリがないだろう

……まあ、翔子は気を悪くしたかもしれないが

「行くぞ、翔子」

「……雄二がそう言うのなら」

翔子もその光景が嫌だったようで、促すと淡々とついてきた

それにしても、まだ入ってそんなに経ってないはずだが……かなり疲れたな
俺達の長い一日は、まだ始まったばかりだ

写真と昼食と演劇魂

明久 side

雄二達と別れた後、僕と咲夜は入場ゲートに来ていた

「いらつしやいませ！如月グランドパークへようこそ！」

その人は日本人じゃないのか、若干訛りの混じった口調で僕達に笑顔を振りまいた。こんな人も働いてるんだ

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「はい」

僕は係員にチケットを渡す

「拝見しマース。これは特別チケットデスねー」

「特別チケット？」

特別チケット？そういうえば、チケットを二枚もらった時、それぞれ別のチケットだつて聞いたような気がする…

「ハイ。如月ハイランドのプレチケットには三種類あつて、プレミアムチケット、特別チ

ケツト、一般チケツトの三種類がありマース

それぞれ特典が少し違いマース」

なるほど、そうだったんだ。ということとは、雄二に渡したのがプレミアムチケツトで、僕達のは特別チケツトだったというわけか

「そうだったんだ……それで、このチケツトの特典ってどんな感じなんですか？」

「特別チケツトは入場時の記念撮影、ウエディング体験、ウエディング体験時の記念撮影となりマース

では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「お待たせしました。カメラです」

係員が写真撮影を言うと、目深に帽子をかぶった別の係員がカメラを持ってやってくる

声は女性で、地面までつくんじゃないかというくらい長い白髪で複数のリボンがついている、妹紅みたいだった

妹紅みたいな人はほかにもいるんだな

「でハ、写真を撮りマース。腕を組んでくだサーイ。はい、チーズ」

係員に言われたとおり、僕と咲夜は腕を組んで写真を撮ってもらう

「スグに印刷しマース。そのまま待っていて下さい」

そう言つて係員は別の場所に向かつて行つた

ふむ、すぐに印刷して持つてきてくれるんだ…

「それにしても、このチケットつてそんな特典があつたんだね。咲夜、良かったの？僕とウエディング体験なんて」

「そうですね…私は明久とウエディング体験ができるなら光榮に思います！」

目を輝かせてそう言う咲夜

…なんだかすごく僕のことを持ち上げられている気がする

「——はい、どうぞ」

そんなやり取りをしてたらさっきの係員が写真を持つてやつてきた

…すごく早い

「サービスで加工も入れておきまシタ」

「…なにこれ」

「…この加工は…一体…」

僕と咲夜は写真を確認して、啞然とした

写真に写っているのは腕を組んだ僕と咲夜、そしてその二人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字

…この加工はかなりきつい…というか、結婚はしないよ

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスカ？」

「ちよつと待った！それだけは断る！それに、そのフレームは何ですか！」

なんてことを言い出すんだこの人は！

「…わかりませタ。それデはここからはゆつくりお愉しみくだサーイ

午後三時にウェディング体験を始めるのデ、時間になりまシタラこの場所に来てくだ

サイ」

渋々食い下がりながら、係員は僕達にこ赤い丸の書かれた地図を渡してその場を去つ

た

「…とりあえず、時間までいろいろ回ろうか」

「そうですね」

僕と咲夜は地図を見ながらアトラクションに向かって歩き出した

明久 side out

雄二 side

俺は翔子と一緒にいろいろなアトラクションを回っていた

近くにある大時計が示しているのは時間も午後一時を過ぎた頃で、そろそろ昼飯かと考えていた

「…雄」——探しまシタよ。豪華なランチを用意してありマスので、こちらへいらして下サイ」二

翔子が何か言おうとしたところで、係員の似非野郎がこちらへやってきた

昼飯も用意してあるのか。流石はプレミアムチケットだな

そして、似非野郎はスタスタと歩き出す

「翔子、さっき何か言おうとしてたが、どうかしたか？」

「…なんでもない」

「??」

一瞬寂しげな顔をしていたような…？それに、テーマパークに来ているというのにやけに荷物が大きな気もするし、さっきから大事そうに抱えてるな…一体何かあるのだからか

「…雄二、急がないとはぐれる」

「お、おう」

俺達がついてくるといふ自信があるのか、似非野郎の姿が随分と遠くに見える。

まあ、豪華な昼飯と聞いたらご馳走になるつもりではあるが

速足で野郎を追いかける

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた

「コチラでランチをお楽しみ下さい」

そう言つて似非野郎が案内したのはパーティ会場のような広間だった。そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというよりは――

「…クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、TVでよく観るクイズ会場のような雰囲気になっていた

「いらつしやいませ。坂本雄二様、翔子様」

ボーイが現れ、俺達を席に案内する

…なんだか見たことある顔だな

「秀吉。ボーイの真似事か？」

「秀吉？何のことでしょうか？」

秀吉は顔色一つ変えずに返してくる

…コイツ、完全に役者モードに入つてるな。こうなつた秀吉の化けの皮を剥がすのは簡単ではない

そう思つて、俺は携帯を取り出した

「違うというのなら、確認させてもらおうぞ」

そう言つて俺はアドレス帳から『木下秀吉』を呼び出そうとした

「おおっと！手が滑つてしまいました！」

ポケットから携帯を取り出し、噴水のある方へと思いつき投げける秀吉（？）

遠くから小さくポチャンと音が聞こえた

「そ、そこまでやるか!?アレもう確実に壊れたぞ!」

「なんのことでしょうか?」

変わらないポーカーフェイス。あまり使つてないとはいえ、携帯を捨ててくるとはな

…敵ながら大した役者根性だ

「それでは、こちらへどうぞ」

「あ、ああ」

ボーイに案内されて会場の仲を移動する

「お客様は未成年とのことなので、こちらをご用意させて頂きました」

席につくと、ボーイがグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。ラベルが見えるように持っているあたり、徹底した演技だ。流星は演劇部

「オードブルでございます」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。豪華な、という前置きをするだけはあるな…

、そう苦笑いをしながら、俺と翔子は料理を食べ進めた
そして、波乱の一日はまだまだ終わってはいなかった…

クイズと陰謀とバカップル

雄二 side

翔子と一緒に食べていた昼食もデザートまで食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時

『皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！』

会場に大きなアナウンスの音が響き渡った

『なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやっています！』

飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した

『そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する催しを企画させて頂ききました！題して、『如月ハイランドウエディング体験』プレゼントクイズ〜！』

出入り口を封鎖する重々しい音が聞こえてくる。退路を断つとは、こんなことを考えたのは誰だ？藤原か？秀吉か？

『本企画の内容はいたってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高のウエディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、ご本人様の希望によつてはそのまま入籍ということでも問題ありませんが』

大問題だバカ野郎

そもそも、年齢が足りないだろうが

『それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進みください！』

「ご丁寧にも司会が俺達の席を示してくれたおかげで、レストランにいる客が一斉にこちらへと目を向けた」

「…ウエディング体験…頑張る…!」

翔子はかなり気合が入っている

これは俺も乗るしなくなってきた。これはただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上にかかる

スタツフの誘導の下、俺と翔子は回答者席へと案内された

壇上に上がって気づいたが、この空間に明久の姿がないな…藤原の奴、俺を嵌める為に明久の誘いを断って、さらに明久と十六夜はウエディング体験をさせないように誘導しているな!?

『それでは「如月ハイランドウエディング体験」プレゼントクイズを始めます!』

俺と翔子の上に大きなボタンが一つ設置されている。コレを押してから回答するというオーソドックスなシステムのようだ

そうだな…連続で正解したらプレゼントということは、連続で間違え続ければ失敗になるのだろうか

こうなったら、意地でも間違え続けてやる！

『では、第一問！』

ボタンに手を伸ばす用意をし、出題を待つ
さて、どんな問題が来る…？

『坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ！』

…おかしい。問題の意味が分からない

——ピンポーン！

しまった！油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！

だが、いくら翔子といえど、正解の存在しない問題は答えられないだろう——

「…毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

『お見事！正解です！』

しかも正解!?

司会者を睨み付ける。すると、司会者は観客には見えない角度で、俺に向かって片眼を瞑つてきた

さては…出来レースかつ!そこまでして俺達にウエディング体験とやらをさせたいのか藤原!!

いいだろう。それならば——俺は意地でも間違えてみせよう!

『第二問!お二人の結婚式はどこで挙げられるのでしょうか?』

——ピンポン!

素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。すでに問題自体がクイズではなく質問と化している気がするが問題ない。不正解を出すなんて造作もないこと!

『はいっ!答えをどうぞっ!』

「鯖の味噌煮!」

『正解ですっ!』

「何っ!?!」

馬鹿な！場所を聞かれたのに鯖の味噌煮が正解なのか!?というかこの司会者、俺が答えた瞬間に正解といっただろう！

『お二人の挙式は登園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！』

「待ていっ！絶対にその別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

「それだけ俺達にウエディング体験をさせたいんだ!?その別名はもはやマイナスイメージだろうが！」

『第三問！お二人の出会いはどこでしょうか？』

ダメだ、聞いてねえ……！だが向こうのやり口はわかった。今度は確実に間違えた回答を——

——ピンポーン！

しまった！考えることに集中しすぎて翔子の方が先に！

『はい、回答をどうぞっ！』

「…小学校」

『正解です！お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るといふ、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！』

くそつ、問題が出てから動き出すのは遅すぎるようだ。翔子の妨害が間に合わない、問題が言われる前だったら…！

『第四問参ります！』

——ピンポーン！

どんな問題が来るかはわからんが、「わかりません」と答えれば、100%間違いだらう！

「わかりま——」

『正解です！第四問の問題は【坂本雄二さんの前世は何か】という問題でしたが、その問題を先読みしてまで答えてくるとは、よほどウエディング体験がしたいのですね！

それでは、最終問題です！』

なんだその問題は！さっきまで質問だったくせに、いきなりわけのわからんフェイントをかましてきやがった！

もはや間違えることは無理だ。そう諦めそうになった時、

『ちよつとおかしくなくい？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

不愉快な口調の救いの神が現れた

その場の全員が声の主を探る。すると、彼らは呼ばれてもないのにステージのすぐ近くにまで歩み寄ってきていた

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか——』

『ああつ!?グダグダとうるせーんだよ！オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

茶髪で顔中にピアスをつけた男がスタッフを威嚇するように大声を出す。どこかで見た連中だと思ったら、入場口で似非野郎に絡んでいたチンピラどもか

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど〜?』
『で、ですが——』

『ゴチャゴチャ抜かすなつてんだコルア! オレ達もクイズに参加してやるつて言つてんだボケがつ!』

『うんうんつ! じゃあ、こうしよーよ! アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシ達の勝ちつてコトで!』

『そ、そPんな——』

慌てるスタッフをよそにそのカップルはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクの一つをひったくる

だが、これはチャンスだ。アイツらの問題なら、あの司会者の問題よりも間違えることが出来る確率はあるだろう…

後は翔子の妨害さえしておけば——

「…ゆ、雄二?」

『じゃあ、問題だ』

チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発言で言う

さあ、どんな問題だ？安心しろ、どんな問題でも間違えて――

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

……

言葉を失った。それどころか、会場中が静寂に包まれる

『オラ、答えろよ。わかんねえのか？』

確かにわからないと言えはわからない。俺の記憶が正しければ、ヨーロッパは国というカテゴリーに一度も属していないのだから。その首都を答えろと言われても、答えるなんてできない

『…坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウェディング体験】をプレゼントいたします』

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ!?オレ達の勝ちだろうがコルア!』

『マジありえない!?この司会者バカなんじゃないの!?!』

バカツプルがぎやあぎやあと騒ぎ立てる中、ステージに幕が下りてくる

まさかFクラスに換算してもぶっちぎりでバカな奴がいるなんて、世界は広いもんだな…

こうして、俺と翔子のウエディング体験が確定したのであった

体験と騒動と本当の気持ち

雄二 side

『それでは、本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！』

不本意にもウエディング体験の権利を手に入れてしまい、そのまま着替えさせられてウエディング体験が始まった

園内すべてに響き渡るのではないかと思える程の拍手が聞こえてくる。このうちのほとんどがこの関係者やFクラス関係者だろうが、周囲の熱気に圧されて一般入場客も拍手をしているようだ

「坂本雄二さん、お願いしマス」

舞台袖で似非野郎が耳打ちしてきた

最初は抵抗してやろうかとも考えるが、抵抗すれば似非野郎が何と言いだすかもわからないな

それに、ここまで来たんだ。ここで逃げたら翔子の悲しむ顔が容易に想像できる

…今、なんで俺は翔子の事なんて考えたんだ？

クソツ、わかんねえ…

「さア、どうぞ」

「あいよ」

似非野郎に言われ、トントンと小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした

「おいおい…なんだよこのセット…体験どころじゃないだろ…」

数えきれないスポットライトにライブステージのような観客席。スモークの設備は疎かバルーンや花火の用意までしてあるように見える。向こうにある電飾なんていくらかかっているかも見当もつかん

『それでは新郎のプロフィール紹介を——』

ん？俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。目的のシーン以外の部分もしつかりとしているようだ。俺のプロフィールなんて、どうせ藤原や秀吉にでも聞いたのだろう

『——省略します』

手え抜きすぎだろ

それにしても、このアナウンスの声：なんだか聴いたことがあるな：上白沢先生か：まさかな。あの人は一教師だからこんなことなんて：

いや、上白沢先生は義理とはいえ明久と藤原の親だったな。それだと、こんなことに手を貸していてもおかしくはない：か

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

『ここがオレ達の結婚式に使えるかどうかの問題だからな』
『だよね』

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてくる

さっきのチンピラどもか。それにしても、最前列であんな大声とは：見た目通りのマナーの持ち主だな

『…ほかのお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します』

『コレ、アタシ達こと言ってるの〜?』

『間違えだろ。俺らはなんたってオキヤクサマだぜ?』

『だよね〜っ』

『ま、俺達の気分が良いか悪いかってのが問題だろ? な、これ重要じゃない?』

『ウンウン! リュータ、イイコト言うね!』

調子に乗って下卑た笑い声が一層響き渡る

主催側もイベントの邪魔になる原因は排除したいだろうに…これであいつらが下手に悪評を流すと宣伝にはならないから、あまり手を出せないのだろう

『それでは、いよいよ新婦のご登場です』

心なしか音量の上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気がすべて消え

た。スモークが足元には立ち込め、いやおうなしに雰囲気盛り上がる

いよいよ翔子のドレス姿のお披露目か

数時間前までは必死に抵抗していたはずの俺の気持ちが少しずつワクワクしているのがわかる

：そうか、結局俺は、なんだかんだいいながら逃げていただけだったのか？

そんなことを考えながら待っていると、目が暗がり慣れるよりも早く、一条のスポットライトが点された

『本イベントの主演、霧島翔子さんです！』

アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す

。暗闇から一転して輝き出す壇上で、思わず眼を瞑ってしまう

そして、再び目を開けた時に飛び込んできた姿に——俺は一瞬、言葉を失った。あれは…誰だ？

『……………綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に漏れ出た、誰のものともわからない台詞。だが、そ

の言葉は何にも阻まれることなく壇上の俺のところまで届いてきた

「…雄二…」

ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む幼なじみが、どこか不安げにこちらを見上げてくる

「翔子、か…?」

「…うん」

頭の中が真っ白になり、言わずもがなな質問が口をついて出た。あまりの変わりように確認せずにはいられなかったのかもしれない

動揺する俺に、翔子は恥ずかし気に問いかける

「…どう…? 私、お嫁さんに、見えるかな…?」

「——ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

俺はつい、勢いでそう返してしまった

「…雄二…」

翔子は小さな声で俺の名を呼び、ブーケを抱えなおした

そして、その場で動きが止まる

「お、おい。翔子…?」

なんだ? 様子がおかしい。俺の返事がマズかったか?

「…嬉しい…」

目の前で翔子が俯き、ブーケに顔を伏せる。そして、それ以上言葉を発することなく静かに震えだした

『ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが…？』

仕事を思い出したかのようにアナウンスが入る

泣いている？

言われてみて初めて気が付く

俯いて、肩を震わせて——翔子は静かに泣いていた

「…ずっと、夢だったから…」

『夢、ですか？』

「…小さな頃からずっと…夢だった…。私と雄二、二人で結婚式を挙げる事が…。私が雄二のお嫁さんになること…。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さなころからの私の夢…」

口数の少ない証拠が懸命に紡ぐ言葉は、俺に形容し難い何かの感情を喚起した

幼いころのある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への思い。それは罪悪感と

責任感からくる勘違いであるはずなのに——コイツはどうしてここまでの気持ちを抱けるのだろう

「…だから…本当にうれしい…。ほかの誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが…」

そこまで言つて、あとは言葉にすることができずに翔子はまた静かに泣いた

『どうやらうれし泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方の方です。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか』

どう応える？そんなの決まっている。どんな場所であろうと、俺はコイツの勘違いを正してやるだけだ

…そう思っていたはずなのに、俺は言葉に出すことができない。いや、体は俺の気持ちがあわかつているのか、口がうまく動かせない

「翔子、俺は——」

『あーあ、つまんなーい！』

何かを言いかけたところで、観客席から大きな声上がる。俺は慌てて口を噤んだ

『マジつまんないこのイベントお。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い?』

『だよな。お前らのことなんてどうでもいいっての』

どうやら俺の窮地を救ってくれたのは最前列に陣取る馬鹿二人組のようだ。会場が静まり返っていたおかげで、発言者が誰だかよくわかる

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ?なに?キャラ作り?このスツップの脚本?バカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの?そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない?ギャグにしか思えないんだケドお』

『そっか!コレってコントじゃねえ?あんなキモい夢、ずっと持つてるヤツなんていねえもんない!』

『え〜っ!?コレってコントなのお?だとしたら、超受けるんだけどお〜!』

口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める二人組。すると

『んだとテメエらっ！もういつペン言ってみやがれ！』

『待て妹紅！今のお前が暴れたらステージが台無しどころじゃなくなる！少し落ち着け！』

そんな放送が入り、舞台裏から誰かが暴れるような音が聞こえてきた。どこかで今のカッパルの発言に腹を立てたヤツが暴走しているんだろう。それに、気のせいか会場の気温が一気に上がった気がする

どこで暴れているのかと、チンピラどもものいる席から舞台裏の音がした方に一瞬視線を移す

そんな短い時間の間に

『は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？』

翔子は壇上から姿を消していた

さつきまでたっていた場所に、花束とブーケを残して

「…はあ、やれやれ」

なんとなくブーケを拾い上げる

それは羽根のように軽いはずなのに、涙で湿って少し重たくなっていた

『霧島さん？霧島翔子さーんっ！皆さん、花嫁を捜して下さい！』

スタッフがバタバタと駆け出す

ふむ。このイベントは中止のようだな。今頃、お偉いさんは真っ青になっているだろう

「さ、坂本雄二さん！霧島さんを一緒に捜して下さい！」

スタッフが一人、息を切らしてこちらにやってくる

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え？ちよ、ちよつと、坂本さん…！」

俺はスタッフに背を向けて歩き出す

まったく、俺なんか頼るなら最初から自分で捜したほうが早いだろうに

そのまま退場していく客に混ざって会場を出て行く。五分もしないうちに目的地が

見えてきた。あまり遠くでなくて助かった

『いや、マジでさっきのウケたな!』

『うんうん!私…結婚が夢なんです…。どう?似てる?可愛い?』

『ああ、似てる!けど——キモいに決まってるだろ!』

『だよね〜!』

さてさて。それじゃ、とつと用を済ませるか

「なあ、アンタら」

『ああ?あんだよ?』

二人組が真つ茶色な顔をこちらに向けてくる

『リユータ。コイツ、さっきのオトコじゃない?』

『みてえだな。んで、その新郎サマがオレ達になんか用か、ああ!』

男が一步前に出て、威嚇するような仕草を見せた

「いや。大した用じゃないんだが——」

借りものの上着を脱ぎ、タイを緩める

「——ちよつとそこまでツラあ貸せ」

数時間後

「よつ。随分と待たせてくれたな」

「…雄二」

如月ハイランドの中にあるグランドホテルの前で待つことしばし。翔子が玄関からトボトボと俯きがちに出てきた

「さて。それじゃ、帰るとすつか」

あの騒動の後、似非野郎から受け取っておいた翔子の鞆を担ぎ直し、駅に向かって歩き出す

「…」

翔子は何も言わず、静かに俺の少し後ろをついてくる

しばらく歩いた後、翔子が聞き取れるかギリギリの小さな声で呟いた

「…雄二」

「…なんだ？」

「…私の夢、変なの？」

例のバカツプルの言葉のことを気にしているのだろう。翔子は足を止めて俯いていた

「まあ、あまり一般的ではないかもしれないな」

俺は少し言葉を選んでからそう答えた

「…」

再び黙り込む翔子

「この際だから言っておく。お前のその気持ちは、過去の話に対する責任感を勘違いしたものだ——」

「…ゆう、じ…」

翔子は、息を呑む。俺に面と向かってこんなことを言われて、傷ついたのかもしれない

「——と、今までの俺なら言ってたかもしれない。今日、気づいたんだ」

「……雄二？」

俺の続けた言葉に、翔子が首を傾げる

「俺はそう思うことによつて、お前から逃げようとしていたんだと…間違っていたのは俺で、実はお前の方が正しいのかもしれないと…時間はかかるかもしれないが、必ず答

えを出す。これは逃げの言葉じゃなく、ちゃんとした俺の言葉だ。それに、俺はお前の夢を笑わない。お前の夢は、大きく胸を張れる、誰にも負けない立派なものだ」

会場で拾っておいた物を俯く翔子に被せてやる

「…これ…さつきの…ヴェール…」

花嫁衣裳の一つである薄布を手で押さえ、翔子は驚いたように顔を上げた

つと、もう一つ言わなきやいけない言葉があるんだつた

「それと、翔子。弁当、旨かった」

俺は軽くなった鞆を翔子に放つた

「…あ…私のお弁当…。気づいて…くれたんだ…」

「さて。さつさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

「…雄二」

「特におふくろのやつは、いくら言っても——」

「雄二っ！」

「…最近では記憶にない証拠の大声を聞いて、思わず立ち止まってしまっ

「…なんだ？」

平静に、いつも通りの態度と声で言葉を返す

そして少しだけ振り返ると、紅い光の中、自らの手でヴェールを持ち上げ

「——私、やっぱり何も間違つてなかった」

満面の笑みを浮かべる幼なじみが、そこにいた

「

ドッキリと告白と伝える気持ち

明久 side

時間も午後三時になり、僕と咲夜は係員に言われていた場所に来ていた

「ここでもいいのかな？」

「どうやらそのようですが……」

「おかしい……誰もいない……」

ブランドホテルの入口とはいえ、こんなに係員はいないものなのだろうか……

そういうえば、さつきあちこちで係員がドタバタしてたけど……何か関係があるのかな？

「すみません、お待たせしました！吉井明久様と十六夜咲夜様ですね？」

そう思っていると、一人の係員が僕達の元へとやってきた

入場口でカメラを持ってきた係員だ

「はい、そうですけど……何かあったんですか？凄い汗が出てますけど……」

「いえ、少し別件でバタついてまして……それでは、こちらへどうぞ」

そう言って係員は僕達をホテルの中へと案内して、僕と昨夜はそれについて行く

案内されたのは、大広間のような部屋だった

この部屋からは結婚式で使うような雰囲気が出ている

…ここで体験するのか？

「それでは、お二人をコーディネートするので、咲夜様は私に、明久様はそちらのスタッフについて行って下さい」

女性の係員がそう言うと、僕の元へ男性の係員がやってくる

何故かこの人は仮面をつけてるけど…何かあるのだろうか？

「わかりました。それじゃ、咲夜。またあとで」

「ええ。またあとで」

こうして僕達は、係員に案内されるままに別の部屋へと入っていった

明久 side out

咲夜 side

私は女性の係員に案内された部屋に入ると、中には二人の別の係員がいた

「はあ、バレないかヒヤヒヤしてたけど…まさかここまでバレないとは…流石は天然二

人組といふかなんというか……」

私を案内した係員は、目深に被った帽子をとりながら、口調を崩す

この声……まさか……

「妹紅……?」

「ああ。ここまでバレないとはある意味予想してなかったぞ。坂本には一発でバレたんだが……」

予想してなかった人物の登場により、私は少し驚いた

「どうして妹紅がここに……?」

「妹紅だけじゃないわよ」

「明久も貴女も……少し鈍すぎない?」

そう言いながら、既に部屋にいた係員が正体を明かす。輝夜とアリスだ

「輝夜とアリスまで……本当に一体どうして?」

「本当は慧音もいるんだけど……今は別室で待機中だ」

そうだな……本来の目的は坂本と霧島の二人だったんだが、時間が空いてな」

どうやら妹紅達は坂本さんと霧島さんの仲の後押しが目的で、時間が空いたからこつちにも来たらしい

「だからって、なんで明久の誘いを断ってまで……? 貴女、明久のこと……」

「いやいや、私は明久に対してそういうった感情はあまりないさ。どちらかと言うと親心かなって感じだし、意外とアンタと明久の事を応援してたりするんだぞ？」

妹紅は私の感情を見透かすようにそう言ってくる

私が明久のことを好きだと言うのは、バレていたようです…

それにしても、妹紅は私のことを応援してくれていたのですか…

「——ま、紅魔館に明久を渡すつもりは無いし、明久の意思を尊重したいから今までは触れてこなかったけど、こんな機会があつてもいいだろう？」

早く告白しないと、私の気持ちが変わるぞ？告白するなら今のうちだ」

応援…してくれていたのですか…？

この人はどうも私の事を弄って楽しんでるように感じます…

「とにかく、輝夜とアリス、咲夜のコーデイナーは任せただぞ

あまり長話をしすぎると、明久に迷惑をかける」

「分かったわ！」

「任せてちょうだい！」

こうして、私のコーデイナーが始まりました

咲夜 side out

明久 side

僕はタキシードに着替え終わって一時間ほどが経過した

女性の着替えは長いようで、僕は用意されている別室で待機していた

「吉井明久様、お待たせしました。十六夜咲夜様の準備が終わりましたので、こちらへお願います」

僕達をここに案内した女性の係員がやって来て、移動するように促される

僕は係員について行き、先程の大広間にたどり着いた

同じタイミングでウエディングドレスを身にまとった咲夜が、反対側の入口から二人の係員と共に現れる

すごく綺麗だ：

そして、大広間にはもう一人、神父役であろう女性の係員がいた

神父役なのに女性なのか：

僕達が大広間に揃ったことを確認した神父が、口を開いた

「吉井明久様、十六夜咲夜様、ようこそ如月ハイランドへ。本日はお楽しみ頂いているでしょうか？」

ウエディング体験ですが、記念撮影を十分後に行うので、それまでの間は新婚のような気分をお楽しみください」

そう言つて、神父は席を外す。同時に、三人の係員も席を外した

大広間にいるのが僕と咲夜だけになって、咲夜が口を開いた

「あの、明久」

「咲夜、なにかな？」

「……この際なので、伝えたいことがあります」

咲夜は神妙な面持ちでそう告げる

「私は……ずっと前から明久のことが好きでした！

私と……私と付き合ってください！」

「……え？」

咲夜から告げられる突然のカミングアウトに、僕は驚く

「と、突然すみません！迷惑ですよね……忘れてください！」

咲夜は申し訳なさそうな顔をして、俯きながらそうやって言い足した

これは……僕の気持ちも伝えておくべきだよね……咲夜が勇気を振り絞ったんだから

「……咲夜、顔を上げて？今から僕の気持ちも伝えるから」

「……明久……？」

咲夜は僕の言葉を聞いて顔を上げた

「ごめん。僕はまだ、その気持ちに応えることは出来ない。僕はまだ、僕がこれからどうしたいのかが分かってないんだ。幻想郷と現代、どっちも立派で、どっちも魅力がある。そして、いずれかはどちらかだけを選ばないといけない…僕はそう思ってる」

「…」

「だから、僕の気持ちがそんな中途半端な状態で、咲夜の気持ちに応えるのは、咲夜にも失礼になる、僕はそう思ってる」

「…明久」

「僕は文月学園を卒業するまでに、僕自身どうしたいのかを決めるから、もし、その時も咲夜の気持ちが変わってなかったら、その時はまた僕にその気持ちを教えて欲しい」

…逃げてるような答えでごめん…」

僕は、僕の気持ちを咲夜に伝える

「…わかり…ました。今はそういうことにおきます。ですが覚悟してくださいよ？私の気持ちは…そう簡単には変わりませんから」

咲夜は、僕の気持ちに納得してくれたのか、笑顔で、そう返した

今日一番の笑顔だ。ウエディングドレスも相まって、咲夜自身が輝いて見えた「失礼します。時間になりましたので、記念撮影を始めたいと思います」

時間がきたのか、さっきの係員四人が大広間に入ってくる

僕と咲夜は立ち位置を指示され、その指示に従う

「それでは、撮りますよ。笑ってください」

僕と咲夜はその言葉を言われて笑顔になる

その写真に写る笑顔は、今日一番の笑顔だった

明久 side out

咲夜 side

ウエディング体験も終わり、私はコーディネートをしてもらった部屋に戻ってきた

すると、その部屋に既にいた妹紅が私に声をかけてきた

「お疲れさん。ま、なんとというか……まさか明久があんなことを考えてたとはな」

「……妹紅も知らなかったんですか？」

意外です。明久のことだから、真っ先にそういうことは妹紅には伝えてそうですが……

「全く。まあ、私の予想では明久は幻想郷に残ると思うが……明久のことだからぶっ飛んだことは考えそうだよな」

「そうね。明久の目指してるところがたまに分からないことは良くあるわね」

「その内、蓬莱人とか、魔法使いとか…仙人にでもなってるんじゃないかしら？」
妹紅の言葉にアリスと輝夜が続ける

…あまり否定出来ません

「…有り得そうで怖いですね…」

「…そうだな

さ、とりあえず着替えて帰ろう。明久も待つてる」

苦笑いする妹紅。そして着替えるように促進する

確かに、このまま話していると帰るのが遅くなりそうです

こうして、私は着替えて明久の元へと急ぐのだった

帰宅路にて…

「うーん…結構遅くなっちゃったね。

…妹紅達が待つてるだろうな…」

明久は帰り道で家にいる（と明久は思っている）妹紅達の心配をする
付き合ってる訳では無いけど、それはそれで少し妬きます…

「明久っ！」

「うわっ!? どうしたのさ咲夜」

そう思った私は、明久の腕に腕を組むように絡みつきました

「いえ…今日だけは…こうして一緒に帰ってください」

「…うん、いいよ」

明久は返事を遅れさせた後ろめたさがあるのか、特に咎めることなく許可を出してくれる

今はまだこんな関係ですか…いつかは…きつと…

…今日の思い出は、一生の宝物です

そう思って、鞆にしまった記念写真を思い浮かべながら、明久と一緒に家まで帰りま
した

3章 学力強化合宿編 合宿としおりと無慈悲な宣告

明久 side e

清涼祭が終わり、一カ月くらい経った日。僕と妹紅は普段通り、文月学園へと登校していた。

「そういえば、明日から『学力強化合宿』だね」

「あー…そんなイベントあるって言ってたな…明日って…ほとんど準備も終わってないけど」

『学力強化合宿』その名の通り学力強化を目的とした合宿で、二年生の六月ごろに行われるイベントだ

「特に何も問題は起きないらしいけど…」

「私達の学年はなんというか…癖のあるやつが多いからな…」

問題はそこだ。僕達の学年は癖の強い人が多くて、何も問題が起きずに終わるかどうか…

「ま、そんなこと私達が考えてもどうもできないからな、祈るだけ祈っておこう」
「うん、そうだね」

妹紅とそんなやり取りをしながら、席に着く

清涼祭の売り上げのおかげで、Fクラスの設備もまともな物にはなった

まともと言っても、学校方針として設備を全部新品にすることまでしかなかった
けど…

「強化合宿って何をやるんだろう」

「強化合宿って言うくらいだから、ずっと勉強漬けなんじゃないか？」

それもそうか

そんなことを話していると、いつの間にか学校のチャイムが鳴る

おかしいな…西村先生がホームルームに遅れるなんて

「西村先生が遅れるなんて珍しいな」

妹紅もそう思ったのか、そう口にした

「そうだね…まあ、何かしらの資料作りとかに手間取ってたりするんじゃない？」

「それはありそうだな。アレでも一応人間なんだし」

一応って…本人がいないからってすごいことを言うなあ…

そう思っていると、ガラガラと教室の扉が開く音が響いた

「どうやら西村先生がやってきたようだ。タイミングが悪かったらさっきの会話も聞かれていたと思うと少しぞっとする」

「遅くなつてすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

そう告げる西村先生は、大きな箱を抱えていた。僕の予想は的中したようだ。さつきまで少し騒がしかったクラスメイトが静かになつて、自分の席に着く

「さて、明日から始まる『特別強化合宿』だが、だいたいのは今配つている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば問題ないはずだが…」

前の席からしおりが回つてきたので、僕はそのしおりをパラパラとめくる

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

確かにそれは確認しておかないと。学力強化が目的とはいえ、それに参加できなかつたら元も子もない

そう思いながら集合の場所と時間の書いてあるページを探す

今回僕らが向かうのは卯月高原と言う少し洒落た避暑地で、この町からだと言つて四時間、電車とバスを乗り継ぎで五時間ほどかかる場所みたいだ

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

そうなのか。まあ、この学校の方針を考えるとそうなのか……って、なんだか嫌な予感がしてきた……

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは——現地集合だからな」
『『案内すらないのかよっ!?!』』

集合場所が書かれたページを見つけると同時に西村先生から飛び出した発言は、無慈悲な宣告だった